

Title	乳幼児期のきょうだい関係に関する行動発達研究 : 調整者としての母親の役割を中心に
Author(s)	小島, 康生
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3128806
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

乳幼児期のきょうだい関係に
関する行動発達研究
—調整者としての母親の役割
を中心に—

大阪大学人間科学部
比較行動論講座

小島康生

目 次

第1章	序 論	1
第2章	乳児期のきょうだい関係に関する縦断的研究	
	—母親の関わりかけにおける特徴及び調整行動の機能—	18
	目 的	19
	方 法	20
	結 果	32
	1. 母親から子どもへの行動	32
	2. きょうだい間の相互作用	35
	3. Older から Younger への否定的行動・親和的行動・関心の 前後における母親の調整行動	43
	4. 子ども同士の相互作用に対する母親の調整行動の役割	53
	考 察	55
	1. 母親から子どもへの関わりかけの特徴	57
	2. 子ども同士の相互作用に及ぼす母親の調整行動の影響	59
	3. Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動の機能	66
	まとめ	67
第3章	幼児期のきょうだい関係に関する横断的研究	
	—調整者としての母親の役割を中心に—	69
	目 的	70
	方 法	71
	結 果	83
	第1節 子ども同士の相互作用と他の変数との関連性	83
	1. きょうだい構成との関連性	85
	2. 子どもの年齢やきょうだい間の年齢差との関連性	85
	3. 子どもの気質との関連性	88
	4. 母親の行動との関連性	91

第2節	子ども同士の相互作用に対する母親の行動の関与	----	105
1.	Older から Younger に対する親和的行動	-----	105
2.	Older から Younger に対する否定的行動及び Younger から Older に対する非意図的邪魔行動	-----	107
3.	Younger から Older への参加	-----	108
4.	Younger から Older に対する否定的行動	-----	108
第3節	子どもの各年齢段階における母親の調整行動ときょうだい間の相互作用との関連性	-----	109
第4節	三者遊び場面におけるきょうだい間の相互作用と質問紙調査の結果との整合性	-----	115
考 察		-----	121
1.	母親の行動の特徴	-----	124
2.	きょうだい間の相互作用と母親の行動との関連性	-----	126
3.	発達の観点からみた母親の調整行動の機能	-----	133
まとめ		-----	136
第4章	総合論議	-----	139
要 約		-----	152
謝 辞		-----	159
引用文献		-----	160
付 表		-----	167

第 1 章

序論

ヒトの子育ての特徴 —生物学的な観点から—

あらゆる生物にとって共通していえることは、生命の流れが絶えることなく次の世代へと伝えられていくことである。このためのしくみの中心に生殖があり、そこから我々は親と子を確認することができる。しかしながら、一般に系統発生的に下位の動物では、親と子は存在しても、親と子の関係は認められない。親は子を産みっぱなしであり、子を保護し育てるということをしないからである。これらの動物は、その代わりに、一度に無数の子を産み出す、という方策を通して一つの世代から次の世代へと生命の継承をはかっている。

親が子を産みっぱなしにせず、子が未熟な間は親がその養育を行う場合に、はじめて親子関係を認めることができる。このような段階が特にはっきりしているのは、鳥類と哺乳類である。産まれてくる子どもの数は比較的少数であるが、その少数の幼い子どもがある程度成熟するまで、親は子どもの世話をする。

哺乳類の中でも系統的に上位にある霊長類の多くの種では、メスは通常一度に1頭しか子どもを産まない。しかも、産まれたばかりの子どもは単独で生存できないので、母親は、授乳によって子どもの生存を保障するだけでなく、身体の清潔や保温、運搬と危険からの保護、子どもへの心理的安定源、物理的・社会的な刺激供給など、さまざまな側面で子どもの養育に関わらなければならない。

社会生物学的に言えば、個体としてのメスの適応性は自分の子どもを多く残すことに尽きる（根ヶ山, 1989）。したがって、霊長類の多くの種のように一産一子の場合は、できるだけ早く当該の子どもを自立させ次の繁殖の準備にかかる必要がある。できるだけ長い間母親の世話を得ようとする子どもとできるだけ早く次の子どもを設けようとする母親との間には、このようにして葛藤が生じる（根

ヶ山, 1995) .

母親の立場からすれば、あまりに早く次の繁殖にとりかかってしまうと、当該の子どもの生命を不確実なものにする可能性がある。このため、多くの霊長類のメスは、ある程度出産間隔を開けないと子どもを産まない。例えば、遺伝的にヒトにかなり近いとされる類人猿の一種チンパンジー (*Pan troglodytes*) の場合、子どもへの授乳が続いている間は発情しないという特徴がある。授乳期間すなわち発情しない期間が約4年半、発情を再開してから妊娠するまでに約1年、そして妊娠期間が7~8ヵ月あるので、次の子どもが産まれるまでにはおよそ6年もの間隔が開くのである (Nishida, 1990) .

では、ヒトの場合はどうであろうか。

例えば、日本人を対象とした資料によると、出産間隔の平均は2~3年で、チンパンジーなどと比較した場合、子どもを産む間隔が短いことに気づく。高畑 (1994) は、南アフリカのある民族の出産に関するデータを他の霊長類のデータとつぎあわせ、ヒトの出産の特徴は、短い間隔で行われる点であると指摘している。

またヒトの場合、忘れてならないのは、実際はもっと短い間隔で子どもを産むことすらできるという点である。例えば、20人あるいは30人もの子どもを産み育ててきた女性が最近マスコミでよく取り上げられる。ヒトにおいてこのようなことが可能となるのは、かなりの短期間に複数の子どもを産むことができるからにほかならない。ヒトは年中繁殖が可能なので、排卵さえあれば、場合によっては出産を終えたばかりであっても、すぐにまた妊娠することができるのである。

ヒトに見られるもう一つの特徴として、子育てに要する期間が非常に長いとい

う点が挙げられよう。子育てとは、狭義的には授乳を始めとする基本的な世話行動を指す。しかしながら、より広義的には、しつけ・見習いによって生存に必要な行動や技能を修得させる「教育」なども含まれる。

Napier & Napier (1967) は、霊長類の生涯を、在胎期 (gestation) , 乳幼児期 (infancy) , 思春期以前の子ども期 (juvenile) , おとな期 (adult) の 4 つの時期に分類している。それによると、ヒトの場合は乳幼児期、子ども期のいずれもが他の霊長類より長く、おとな期に入るまでに 20 年もの歳月を要する。彼らのいう「子ども期」は、先ほど述べた広義的な意味での子育ての時期に相当するので、ヒトの子育ては他の霊長類とは比べものにならないほど長いことがわかる。

子育てに関するヒトの特徴は、子育てに要する期間が非常に長いにもかかわらず、かなり短い間隔で次の子どもを設けることができるという点である。このことは、言い換えるなら、複数の未成熟な子どもを母親は同時に育てているということの意味する。

複数の、しかも未成熟な子どもを同時に育成するのは、いうまでもなく大変な作業である。ヒトはこのような負担に対してどのように対峙しているのだろうか。

まず、家族を始めとする生活共同体の存在は大きい。国家や民族によってももちろん大きく異なるが、例えば日本では、特に配偶者である父親が子育てに参加するが多い。配偶者の援助を得ることによって、子育ての負担はかなり解消されるであろう。

さらに、三世代同居家族の場合なら、祖母 (子どもから見て) からの援助が得

られる。すでに何人もの子どもを育ててきたいわば人生の先輩から、子育てにまつわるさまざまな話が聞けるのは、母親にとって非常に有益なことであろう。

また、仮に核家族であっても、出産に際して一時的に里つまり生家へ帰る、里帰りという習慣が日本にはある。通常里帰りは、間近に控えた出産の準備あるいは出産直後の母親の休息に当てられる。最も大変なこの時期に、このように近親者の援助が得られるのは母親にとって大変大きい。

複数の子どもの相手をするのはなぜ大変か

配偶者を始めとする近縁者から支援を受けることによって、子育てに伴う負担は随分と解消されるであろう。しかしながら、依然として子どもに接する時間が最も長いのは母親にほかならない。

ところで、先ほどから、複数の未成熟な子どもを同時に育てるのは大変な作業であることを強調してきたが、その原因はどのようなところに求められるであろうか。

すでに記したように、子育ての内容は非常に多岐にわたる。食事の世話、着衣の援助、排泄の面倒などの基本的なものから、生活習慣やしつけに関する教育などの社会的なものに至るまで、その内容はさまざまである。

しかしながら、おそらく母親にとって最も大変なことは、子ども同士の競合的關係に対する介入の問題なのではないだろうか。

仮に、二人きょうだいの家庭を念頭に置くと、小さい時分には、彼らの間には母親の注意をめぐる敵対関係のあることが予想される。とりわけ、第二子が誕生した直後には、第一子は第二子に対して激しい嫉妬を示すであろう。第二子は、

第一子にとって、それ以前には自分の方に注がれていた母親の注意を横どりする存在として、認識されるであろう。母親が第二子の相手をしているときなどは、おそらく、少しでも早くその注意を自分の方に向けようと、無理な援助を要請したり、攻撃的な振る舞いをしたりするに違いない。

第二子の活動性が増し、あたり構わず周囲の事物に関心を持つようになると、両者の間には主におもちゃをめぐる競合関係が生まれる。第一子は、自分の気に入ったおもちゃを第二子に取られまいと、激しく抵抗するであろうし、ときには攻撃行動を示すことすらあるかもしれない。

子ども同士の間には存在するこのような競合的關係が、母親に大きな負担をもたらすことは容易に想像される。嫉妬心を抑圧するためには、一方の子どもにだけ注意が偏らないように努力しなければならないし、激しい敵対行動が生じたときには、直ちに仲裁に入り彼らの関係を修復してやらねばならない。

母親は子育てに伴う負担に対してどう対応しているか

では、このような負担を軽減するためには、子どもたちにどのような接し方をするのが望ましいであろうか。

おそらくそれは、子ども同士の関係をできるだけ親和的なものへと導くことに尽きるであろう。子ども同士ができるだけ長い時間仲良く過ごしてくれることによって、母親は先ほど述べたような負担から解放される。

両者の関係を親和的なものに方向づけるということは、すなわち、競合的な関わりを少なくすること、及び親和的な関わりを亢進させることを意味している。競合的な関わりが生じたときには、直ちにそれを終結させるようにしなくては

ならない。また、そればかりでなく、少しでも彼らが親和的に関わるように仕向ける必要もあるのである。

ただし、ここで注意しなくてはならないのは、子どもたちの相互作用のたびごとに、恒常的に介入行動を示すのは、やはり大変だということである。競合的な関わりの一つ一つに対して仲裁に入るのも、あるいは繰り返し彼らの親和的行動を促し続けるのも、母親の立場からすれば、これはかえって負担を増大させることになる。

したがって、母親の介入行動は、まさに今起こっているその関わりに影響を与えるだけではなく、もっと長期的な効果を持つような性質のものの方が望ましい。具体的にいえば、例えば、子ども同士の否定的な関わりに介入するときには、当該の関係を修復することだけではなく、むしろそれ以降子どもたちが自分の意志で否定的行動を抑制しうるように方向づけた方がよい。

親和的な関わりに関しても同様である。母親の介入がなくても、それ以降子ども同士が親和的に関わるようになってくれることが、母親にとっては最も望ましいといえる。

きょうだい関係に対して母親はどう関与しているか ―問題点の確認―

以上述べたように、母親にとって最も望ましいのは、子どもたちができるだけ長い時間をいっしょに仲良く過ごしてくれることにほかならない。そして、子ども同士のこのような関係は、母親の負担を軽減するうえでも有効である。

さて、子ども同士の関わりに対して母親が具体的に介入し、それが子どものきょうだい関係に影響を及ぼしているという指摘は、わずかながらある。

以下では、その先行研究を紹介し、問題点を確認する。

1. 乳児期におけるきょうだい関係に母親はどう関与しているか

きょうだい関係は、そもそも弟（又は妹）の誕生によって開始するものである。第一子と第二子を対象としたきょうだい関係の研究を通して、第二子の誕生が第一子の行動にさまざまな変化をもたらすことが知られている。

Dunn, Kendrick, & MacNamee (1981) は、第二子の誕生をきっかけに、第一子から母親への不満や要求行動が増加し、なかでも不満は、母親が第二子を抱いているときによく観察されたと報告している。Stewart & Marvin (1984) は、第二子の誕生後14ヵ月間にわたる第一子の問題行動を追跡し、時期によって第一子の問題行動には質的な違いがあることを明らかにした。それによると、第二子が生まれて約1ヵ月を経過した頃には強い退行現象が、第二子が4ヵ月齢に達した頃には不安傾向が、またそれ以降は母親や第二子へ攻撃行動が頻繁に観察された。

乳児期におけるきょうだい間の相互作用は、圧倒的に第一子から第二子に向けられるものが多い。そして、第一子が第二子に対して示す行動には母親の行動が関与していることが確かめられている。Dunn & Kendrick (1982) によれば、

第二子の世話を積極的に第一子に任せる母親であった場合、第一子は第二子に対して親和的な行動を示すことが多かったと報告している。また、Howe & Ross (1990) は、第二子の内的状態をよく問い合わせるような母親であった場合、第一子は第二子に対して友好的に関わりかけたと報告している。

全体的に、第二子が誕生してまもないこの時期に、きょうだい関係と母親の行動との間にどのような関連があるかという問題は、ある特定の時期を対象として検証されているにすぎない。また、二人の子どもを相手に、母親が彼らとの関係をいかに維持していくかについて、行動学的に検証した研究は全く見られない。

さらに、子ども同士の関係に対する母親の行動の関与に注目した研究は、いずれも彼らの親和的な関わりに焦点を当てている (Dunn & Kendrick, 1982; Howe & Ross, 1990) 。つまり、彼らの間にある競合的な関係に母親がどう関与しているのかについては、これまでほとんどわかっていない。

2. 幼児期におけるきょうだい関係に母親はどのように関与しているか

第二子も生後1年を経過する頃になると、第一子の方へ近づいたり、第一子の行動を模倣したりすることが多くなり、積極的に第一子と関わりを持とうとする (Lamb, 1978a, b) .

幼児期において、子ども同士の関係に母親がどの程度関与しているかという問題に注目した研究は非常に少ない。また、その多くは、子ども同士の競合的な関係に対する母親の介入の問題に注目している (Dunn, Slomkowski, Donelan, & Herrera, 1995; Martin & Ross, 1995; Ross, 1996) .

Martin & Ross (1995) は、幼児期のきょうだいと母親を対象に、家庭での観察を実施し、子ども同士の否定的相互作用に対して母親が介入したのは、全体の半分以下であったと報告している。また、Ross (1996) は、子ども同士の否定的相互作用が生じたとき、母親は年少の子どもの支援をすることが多かったと報告している。

上述したように、幼児期を対象とした研究においては、子ども同士の否定的な関わりに対して母親がどう介入するかという問題に焦点が向けられている。繰り返し述べているように、母親にとって最も望ましいのは、子どもたちが比較的長時間けんかをせずに、仲良くいっしょに過ごしてくれることだと推測される。そのためには、母親は否定的な関わりを解消するだけでなく、親和的な関わりを促進するような行動も示しているはずである、

本研究の構想と仮説

以上に挙げた研究報告を踏まえて、本研究では乳児期を対象とした研究と幼児期を対象とした研究を企てた。いずれの研究においても、原則的に子どもが二人いる家庭が被験者に選ばれた。その理由は、日本では二人きょうだいの家庭が最も一般的であり（総務庁青少年対策本部, 1996）、しかも二人きょうだいがきょうだい関係の最も基本的な形だからである。

第二子が誕生してまもない頃は、母親にとって最も負担の大きい時期である。第二子の誕生は、子育ての対象が二人に増えたことを意味するが、なにしろ両方の子どもがまだ未成熟なので、母親は二人の相手を同時にしなくてはならない。このような過渡期において、母親と子どもたちの関わりに、どのような特徴が見られるのかという問題は、子育てに伴う負担に対して母親がどう対峙しているのかを知るうえで、非常に興味深い。

幼児期のきょうだい関係に対する母親の関与については、報告が少ないうえに、限られた場面（否定的場面）においてなされた研究が大半である。母親は彼らの否定的な関わりに介入するだけでなく、親和的な関わりを亢進するためにも、何らかの行動を示すのではないかと考えられる。子どもたちが親和的な関係を構築していくことによって、母親はすでに述べたような負担からも解放されるものと考えられる。

以下ではそれぞれの研究に関する詳細な構想を述べる。

1. 乳児期を対象とした研究

本研究の被験者には、第二子の出産を終えたばかりの家庭が選ばれた。この時期は母親の子育てに大きな変化が生じた時期にあたる。なぜなら、子どもが一人から二人に増えたことによって、母親の負担は飛躍的に増大するからである。

本研究の目的は、母親が子どもたちの関係をいかに調整しているかを明らかにすることである。

その一つ目の側面は、子どもたちとの関係を母親がどのようなバランスで維持していくかという問題である。子どもが二人いる場合、母親は一方の子どもとだけ関わりを持つわけにはいかない。なぜなら、子どもへの関わり方に偏りがあった場合、一方の子どもが他方の子どもに強い嫉妬心を持つ可能性があるからである。子どもたちへの関わりかけをいかに配分しているかを縦断的に追跡することで、母親が自分の判断で彼らの関係をいかに調整していくかという疑問が解明される。

母親の行動における二つ目の側面は、子どもたちの相互の関わりに対して、どのような行動を示すかという問題である。母親の行動傾向は、子ども同士のけんかを解消し親和性を亢進するように方向づけられていると考えられる。子ども同士の否定的あるいは親和的な相互作用が生じた直前や直後に、何らかの介入行動を示す場合がどの程度あるのかに注目することで、これらの問題は解決されるであろう。

また、このように直接的に子どもたちの相互の関わりを調整するとき、具体的にどのような内容の行動を示すのかについても分析される。例えば、何らかの事情で彼らが否定的な関わりを示したとき、母親は当該の関わりを解消させるこ

とよりも、むしろ長期的に見て、子どもたちが自分自身の意志でこの種の関わりを抑制しようように方向づけるのではないかと考えられる。

本研究では、家庭における三者遊び場面を設定した。このような場面は以下のような理由で、本研究の目的を達成するのに有効であると考えられる。

遊び場面で用いられるブロックは子どもにとって新奇なものだったことから、飽きることなくある程度の時間をブロック遊びに費やしてもらえることが予想される。また、ブロックの部品は限られているため、子ども同士が敵対的及び否定的な相互作用を示すことが多いものと考えられる。子ども同士の否定的な相互作用に対する母親の行動の内容を定量的に分析するためには、否定的な場面の比較的多い方が望ましい。

逆にこのような実験場面では子ども同士の親和的相互作用は生じにくいことが予想される。なぜなら、特に第一子の注意はブロックに向かっていることが多く、よほどのことがない限り、第二子に親和的に関わりかけない可能性が高いからである。親和的行動は、もちろん子ども自身が自発的に行う場合もある。しかしながら、子どもの親和的行動のレベルを高めるために母親がどの程度、あるいはどのように関与するのかという問題を明らかにするためには、このように親和的行動が生じにくい場面の方が適切であろうと考えた。

2. 幼児期を対象とした研究

本研究の目的は、幼児期のきょうだい関係に母親がどう関与しているかを明らかにすることである。具体的には、母親と子どもの三者遊び場面において、子ども同士の相互作用と母親の行動との間にどのような対応関係があるかが分析される。

母親の行動に関しては、二通りのアプローチがなされる。

第一のアプローチは、子ども同士の相互作用を直接的に調整するような行動である。一方の子どもの注意を他方の子どもに向けることによって、親和的な関わりを促す行動などがこれに該当する。

このような観点からの研究がこれまでに全くなかったわけではない。しかしながら、先行研究の被験者は乳児期の子どもか (Dunn & Kendrick, 1982; Howe & Ross, 1990) , あるいは被験者が幼児期の子どもであっても否定的な場面に注目したものか (Martin & Ross, 1995; Ross, 1996) , のいずれかであった。

本研究では、否定的な関わりを解消するのに有効な行動だけではなく、親和的な関わりを促進するような行動にも注目した。母親は、ただ否定的な関わりを処理するだけではなく、親和的な関わりを促進しながら、彼らの関係を調整しているのではないかと推測される。

さらに、このような行動の効果は、子どもの年齢段階によって異なる可能性がある。年少の子どもがある程度成長すれば、子どもたちは自分の力できょうだい関係を調整できるようになるだろうが、年少の子どもが小さい時分には、競合的な関係に抑制がかからず激しい内容へと発展していく可能性が高い。したがって、母親は、子どもの年齢段階が低い場合ほど、頻繁に彼らの関係を調整していく必

要があると考えられる。

母親の行動に関する第二のアプローチは、上述したような、子ども同士の関わりを直接的に規定するような性質のものではない。むしろ、子どもに相對したときにどのようなスタイルで子どもと関わるのかという問題が取り上げられる。

このような視点で母親の行動に注目した研究報告はすでにある。例えば、Brody, Stoneman, McCoy, & Forehand (1992) によれば、第一子に対して親和的な行動を多く示す母親ほど、第一子は第二子に親和的に関わる傾向がある。また、最近の研究では、母親から第一子、第二子それぞれに向けられた関わりかけの配分がきょうだい関係に影響を及ぼすことが指摘されている (Brody, Stoneman, & Burke, 1987; Brody et al., 1992; Munn & Dunn, 1989; Stocker, Dunn, & Plomin, 1989)。つまり、母親の関わりかけが第二子の方に偏っていればいるほど、第一子は第二子に攻撃的に振る舞うことが多い。

以上述べたような報告に基づき、本研究では、二人の子どもに相對したときの母親の行動特性を一つの変数として取り上げる。

遊び場面では、乳児期を対象とした研究と全く同じブロックが用いられた。このような場面を設定した大きな理由は、以下に述べる通りである。

すなわち、幼児期であれば、遊びの対象が定まっていた方が子ども同士の否定的相互作用や親和的相互作用が生じ易いと考えられる。遊びの対象がブロックに限定されていることによって、取り合い・身体的攻撃などの否定的相互作用や共同作業・援助行動などの親和的相互作用が通常よりも頻繁に観察されるのではないかと推測される。

乳児期を対象とした研究では、第二子はまだ誕生してまもない時期であった。

したがって、子ども同士で協力したり共同作業したりすることは難しいが、幼児期であれば、むしろブロック遊びのように場面がはっきりと設定されていたときの方が親和的相互作用も観察されやすいであろう。

さて、子どものきょうだい関係に関与するものとしては、母親の行動以外の変数も考慮に入れなくてはならない。なかでも、子どもの年齢、互いの年齢差、きょうだい構成はきょうだい関係の特徴と関連があることが指摘されている (Cicirelli, 1972, 1976; Bigner, 1974; Lamb, 1978a, b; Abramovitch, Corter, & Lando, 1979; Abramovitch, Corter, & Pepler, 1980; Abramovitch, Pepler, & Corter, 1982; Dunn & Kendrick, 1979, 1982; Pepler, Abramovitch, & Corter, 1981; Minnett, Vandell, & Santrock, 1983; Brody, Stoneman, & MacKinnon, 1982; Brody, Stoneman, MacKinnon, & MacKinnon, 1985; Stoneman, Brody, & MacKinnon, 1986)。例えば、Lamb (1978b) は、兄よりも姉の方が弟 (又は妹) に対して親和的に振る舞うことが多く、おもちゃを手渡したり視線を向けたりする頻度が多かったと報告している。きょうだい間の年齢差については、年齢差が4歳未満の場合と4歳以上の場合とで、きょうだい関係の特徴が異なるという報告がある (Furman & Buhrmester, 1985)。きょうだい構成についても、同性のきょうだいか異性のきょうだいかで異なるという報告がある (Dunn & Kendrick, 1979, 1982; Pepler et al., 1981)。

Brodyらのグループはまた、きょうだい関係に及ぼす子どもの気質の影響について検討し、第一子、第二子の活動性や適応性がきょうだい関係に影響を及ぼしていることを明らかにした (Brody et al., 1987; Brody et al., 1992; Stoneman, Brody, & Burke, 1989; Stoneman & Brody, 1993)。また、Munn & Dunn

(1989)によると、きょうだいそれぞれの気質の組み合わせがきょうだい関係に影響を及ぼす。すなわち、第一子、第二子の活動性のレベルが似ている場合には、きょうだい間の葛藤が少ない。

以上述べたように、子どものきょうだい関係には、子どもの年齢、気質をはじめとするさまざまな変数の影響が指摘されている。また、母親の行動自体もこれらの変数と関連があるという報告がある (Stocker et al., 1989)。このことから、本研究の目的を達成するためには、母親の行動だけではなく、他の変数も分析の対象に加える必要があると考えた。

これらの変数と母親の行動とを組み合わせることにより、子どものきょうだい関係に対して母親の行動がどう関与しているかがより明確に把握できるであろう。

第 2 章

乳児期のきょうだい関係に
関する縦断的研究
—母親の関わりかけにおけ
る特徴及び調整行動の
機能—

目 的

本研究の目的は、第二子を出産したばかりの母親が二人の子どもたちの関係をいかに調整しているかを明らかにすることである。母親の行動に関しては以下に述べる二つの側面に注目する。

一つ目の側面は、子どもたちへの関わりかけを母親が自らの判断でいかに配分していくかという問題である。子ども同士の嫉妬心を昂じさせないように、母親はうまくバランスを取りながら、彼らとの関係を維持していくことが予想される。

二つ目の側面は、子ども同士の相互関係をいかにして調整していくかという問題である。否定的な関わりを解消させるだけでなく、親和的な関わりを亢進させるために、母親は何らかの行動を取るのではないかと予想される。

方 法

被験者

本研究の被験者は、第二子が出生してまもない4組の家庭（A, T, K, M）であった。いずれの被験者も知人からの紹介を通じて直接、研究への参加を依頼した。これらの4組すべての家庭において、第一子（以降の文中では「Older」と表記する）、第二子（以降の文中では「Younger」と表記する）はいずれも男児であった。Youngerが出生したときのOlderの年齢は、Aが1歳3ヵ月6日、Tが2歳0ヵ月12日、Kが2歳4ヵ月25日、Mが3歳5ヵ月23日であった。被験者の詳細についてはTable 2-1に示す。

観察期間

家庭訪問はYoungerが誕生した直後から開始され、原則として1~2ヵ月に1回の割合で行われた。観察期間は、A, T, K, Mそれぞれ17ヵ月、17.5ヵ月、12ヵ月、14ヵ月であった。各被験者に対する観察期間の詳細をTable 2-2に示す。

家庭訪問の手続き

家庭訪問は、Older, Youngerがともに在宅し、かつ最も機嫌の良い時間帯に行われた。観察者1名が家庭訪問を実施し、母親、Older, Youngerの三者遊び場面の観察が行われた。家庭訪問の時間は各回約1時間半であった。

Table 2-1 被験者

被験者の 略称	Younger		Older		子ども同士の年齢差 (年:ヵ月:日)	両親の年齢 ^a	
	生年月日	性	生年月日	性		母親	父親
A	1995/1/20	♂	1993/10/14	♂	1:03:06	22	23
T	1994/12/22	♂	1992/12/10	♂	2:00:12	27	28
K	1995/7/19	♂	1993/2/24	♂	2:04:25	26	26
M	1994/5/26	♂	1990/12/3	♂	3:05:23	35	35

^a Youngerが誕生したときの年齢

Table 2-2 観察期間

被験者	Youngerの月齢																			
	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	9	9.5	10	10.5	11	11.5
A					○	○		○			○			○			○			
T		○		○				○			○			○			○			○
K			○			○						○			○			○		
M					○		○		○			○		○			○			

被験者	Youngerの月齢													観察回数	観察時間(分)			
	12	12.5	13	13.5	14	14.5	15	15.5	16	16.5	17	17.5	18					
A		○			○		○				○						10	302.5
T			○				○		○			○					11	310.3
K	○																6	168.2
M			○		○												8	164.7

○：家庭訪問をして観察を行ったことを表す

遊び場面の行動観察

三者遊び場面の観察は、日頃子どもたちがよく遊んでいる部屋で行われた。母親、Older、Youngerの3人に、観察者が持参したブロック（カワダ社、ダイヤブロック）を用いて20～30分間自由に遊んでもらった。遊び場面の様子は、約2m離れた位置に設置された8mmビデオカメラ（SONY製、Video8 Handycam）で撮影された。観察者は、被験者から約3m離れた位置に座り、気のついたことをノートにメモした。観察者は、可能な限り被験者と相互作用を持たないよう心がけたが、被験者の方から話しかけがあった場合には、不自然にならない程度に対応した。被験者4組についての総観察時間は946分であった。

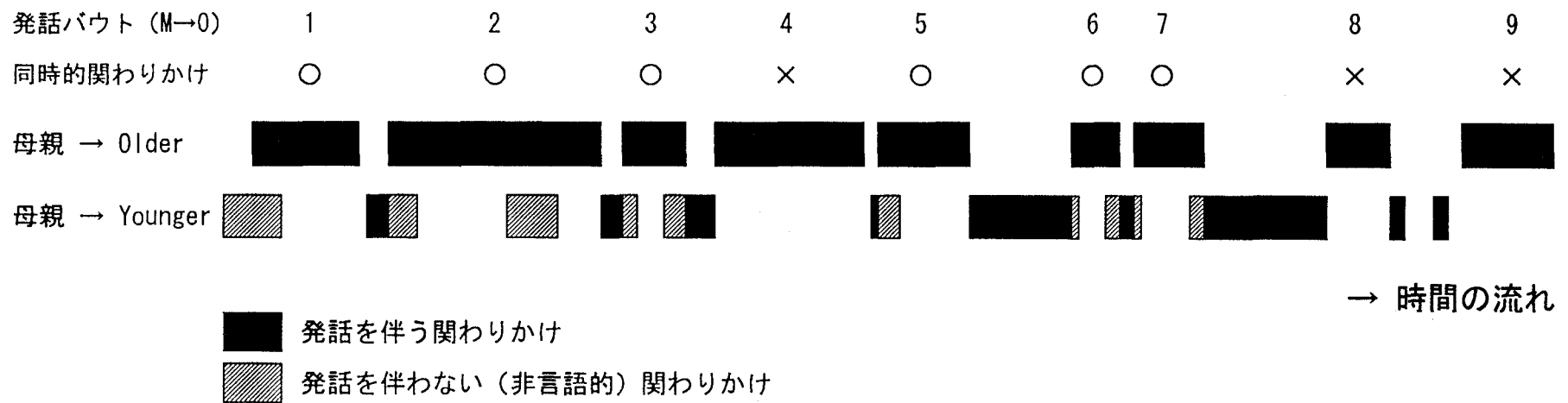
行動カテゴリー

母親から子どもに対する行動のカテゴリー及び子ども同士の相互作用に関するカテゴリーは、撮影されたビデオテープを見ながら作成された。子ども同士の相互作用、母親から子どもに対する行動のいずれについてもカテゴリー毎の生起頻度が求められた。以下に分析に用いられた行動カテゴリーの詳細を説明する。

1. 母親から子どもへの働きかけ

1) 発話バウト

母親が Older、Younger のいずれに話しかけているかを基準として、Figure 2-1 に示すような母親の発話に関するフローチャートが作成された。このとき、母親から Younger への発話が交互に生起するというパターンが頻繁に観察された。そこで、母親から子どもへの発話のひとまとまりを「1 バウト」とし、一方の子ども（X）への発話が中断し、他方の子ども（Y）への発話に移行した場合、ある



注1：母親からOlderへの発話バウトは“9”とカウントされる。

注2：同時的関わりかけの割合は、6/9すなわち66.7%と計算される。

Figure 2-1 三者遊び場面のフローチャート

いはXへの発話が5秒以上中断したとき、Xに対する当該の発話バウトは終了したと考えた。発話バウトに関しては、以下の2つのカテゴリーが定量化された。

① 発話バウト数

Older に対する発話バウト数, Younger に対する発話バウト数が算出された (Figure 2-1 参照)。

② 1バウトあたりの持続時間

Older, Younger それぞれに関して、1バウトあたりの持続時間の中央値が算出された。

2) 同時的関わり

母親は Older に対する話しかけを進行させながら、同時に Younger に対しても非言語的な働きかけを行うことがあった。そこで、Older に対する発話バウトの総数のうち、このような非言語的な働きかけを伴うものがどの程度あるかが割合として算出された。非言語的行動とは、抱く、支える、おもちゃを提示する、などの発話を介さない行動を指す。同時的関わりの割合の算出方法の詳細は、Figure 2-1 に記されている。

2. 子ども同士の相互作用

以下に示す3種類の行動の生起頻度が求められた。

1) 否定的相互作用

① Younger から Older に対する非意図的な邪魔行動

Older がブロックを用いて何かを組み立てている状況で、Younger がそれに手を伸ばすなどして壊してしまう行動を指す。この場合、Younger は邪魔をしよう

と意図しているわけではないが、結果的に Older の作っていたものが破壊されてしまうので、本研究ではこれを「非意図的な邪魔行動」と定義した。

② Older から Younger に対する否定的行動

Older から Younger に対して向けられた否定的な行動一般を指す。否定的行動は、非難、拒否、奪取、身体的攻撃、邪魔の5つに分類された。これらの行動の詳細について Table 2-3 に示す。

Older から Younger への否定的行動はまた、その原因を基準に3つに分類された。第一の原因は、母親から Younger への働きかけに対する嫉妬である。母親が Younger に対してブロックを提示しているときに、それを取り上げる、あるいは故意にそのブロックを奪うなどの行動がこれに該当する。第二の原因は、上述した Younger から Older への非意図的な邪魔行動である。第三の原因は、上記以外、すなわち特定の原因が見当たらない場合である。

2) Older から Younger への親和的行動

Older から Younger に向けられた親和的な行動一般を指す。ブロックを提示する、与える、組み立ててやる、あるいはなでる、接触する、抱きしめる、などの行動がこれに該当する。

3) Younger の行動や内的状態に対する Older の関心

Younger がしていることに注目して指差しをしたり、そのときの Younger の感情や意図、欲求など（以下の文中では、これらを総称して「内的状態」と記述する）についての発話を示したりする行動を指す。「○○ちゃん（Younger の名前）、ブロック投げちゃった」、「あ、○○ちゃん、笑ってる」、「○○ちゃんもこれが欲しいみたい」などの発話がこれに該当する。

Table 2-3 OlderからYoungerへの否定的行動

否定的行動	定義
非難	Youngerの行動（例えばブロックを取る，壊すなど）を咎める発話や行動 例：「お兄ちゃんが作ってるんだから，取るな！」
拒否	YoungerがOlderの方へ近づいたり，手を伸ばしたりしたときにそれを拒否する発話ないしは行動 例1：「（Olderの操作しているブロックを取ろうと近づいてきたYoungerに対して，それを取られまいと）だめっ！」 例2：Youngerから離れたところへ移動する，体の向きを変えてYoungerが届かないようにする
奪取	Youngerが手にしているブロックその他を無理矢理奪う行動
身体的攻撃	叩く，蹴る，髪をひっぱる，押し倒す，などの身体的な攻撃行動
邪魔	Youngerが何か取ろうとしているときにそれを遠ざけるなどして妨害する行動

3. Older から Younger への否定的行動・親和的行動・関心の前後における

母親の調整行動

前項に記した 1)Older から Younger への否定的行動, 2) Older から Younger への親和的行動, 3)Younger の行動や内的状態に対する Older の関心, のそれぞれが生起した直前や直後に, 母親が子ども同士の関わりに影響するような行動を示した場合, それを「調整行動」と定義した. 調整行動の割合や内訳が分析された. 母親が示した調整行動を Table 2-4 に示す.

4. 子ども同士の相互作用に対する母親の調整行動の役割

母親の調整行動として, Younger の行動や内的状態に関する話題を提供する行動の持つ効果が分析された. 具体的には, この調整行動の直前や直後がどのような状況であったかが調べられた.

直前の状況は, 子ども同士の否定的関わり・親和的関わり・Older から Younger への関心, の 3 つに分類された. ここでいう否定的関わりとは, Younger から Older への非意図的な邪魔行動, Older から Younger への否定的行動のいずれかを指す. また親和的関わりとは, Older から Younger への親和的行動だけでなく, Older が Younger を遊びに誘う行動, Younger が Older の遊びに参加する行動も含まれた.

分析方法

以上に述べたすべての行動カテゴリーの生起頻度や割合などは, 被験者毎に, かつ観察期間毎に算出された. 生起頻度については, 観察期間毎に20分あたりに換算した値が求められた.

Table 2-4(1) Olderの否定的行動に対する母親の調整行動

行動	定義
(1) Youngerに対する調整行動	
保護	OlderとYoungerの間に割って入る, YoungerをOlderから離れたところへ運搬する, などの保護的行動
慰撫	OlderからYoungerへの否定的行動に対する慰め行動 例1: 「かわいそうに, かわいそうに」 例2: 「よしよし」と言いながら頭をなでる
Youngerの注意を逸らす	Youngerの注意をOlder以外の対象へ逸らす行動 例: 「あなたはこっちのおもちゃで遊んでなさい」といいながら別のおもちゃを提示する
Olderの行動や内的状態に関する発話	Olderがしていることを説明したり, Olderの感情, 意図, 欲求などを伝えたりする行動 例1: 「お兄ちゃんが先に使ってたんだから」 例2: 「お兄ちゃん, このブロックが気に入ったんだって」
親和的関わりの促進	Olderに対して親和的に働きかけるようYoungerに指示する行動 例: 「お兄ちゃんのところに行っておいで」など
(2) Olderに対する調整行動	
叱責	Olderの否定的行動に対して叱る行動 例: 「だめ! そんなことしたらだめでしょ!」
Youngerの代わりに謝罪	Youngerの行動に対してYoungerの代わりに謝る行動
Olderの注意を逸らす	Olderの注意をYounger以外の対象へ逸らす行動 例: 同上
Youngerの行動や内的状態に関する発話	Youngerがしていることを説明したり, Youngerの感情, 意図, 欲求などを伝えたりする行動 例: 「〇〇ちゃん (Youngerの名前, 以下同様) も使いたかったんだよきっと」
親和的関わりの促進	Youngerに対して親和的に働きかけるようOlderに指示する行動 例: 「〇〇ちゃんがしてるのを手伝ってあげて」など

Table 2-4(2) Olderの親和的行動の直前・直後における母親の調整行動

行動	定義
Youngerの行動や内的状態に関する発話	Youngerがしていることを説明したり, Youngerの感情, 意図, 欲求などを伝えたりする行動 例1: 「〇〇ちゃんも仲間に入れてほしいって」 例2: 「(Olderの親和的行動に対して) ほら, 〇〇ちゃん, 喜んでよ」
Youngerとの関わりを促す発話	Youngerに対して親和的に働きかけるようOlderに指示する行動 例: 「〇〇ちゃんがしてるのを手伝ってあげて」など
Olderの行動に関するYoungerへの発話	OlderがしていることをYoungerに伝える行動 例: 「お兄ちゃん上手に作ってるねえ」
賞賛	OlderからYoungerへの親和的行動に対してそれを誉める行動

Table 2-4(3) OlderからYoungerへの関心の直前・直後における母親の調整行動

行動	定義
Youngerの行動や内的状態に関する発話	Table 2-4(2)に同じ
Youngerとの関わりを促す発話	同上

母親から子どもへの働きかけ，子ども同士の相互作用については，その生起頻度や割合等の縦断的変化が分析された．調整行動に関しては，被験者毎に，観察期間全体のデータが一括して分析された．

結 果

1. 母親から子どもへの行動

1) 発話バウト数及び発話バウトの持続時間に関する縦断的变化

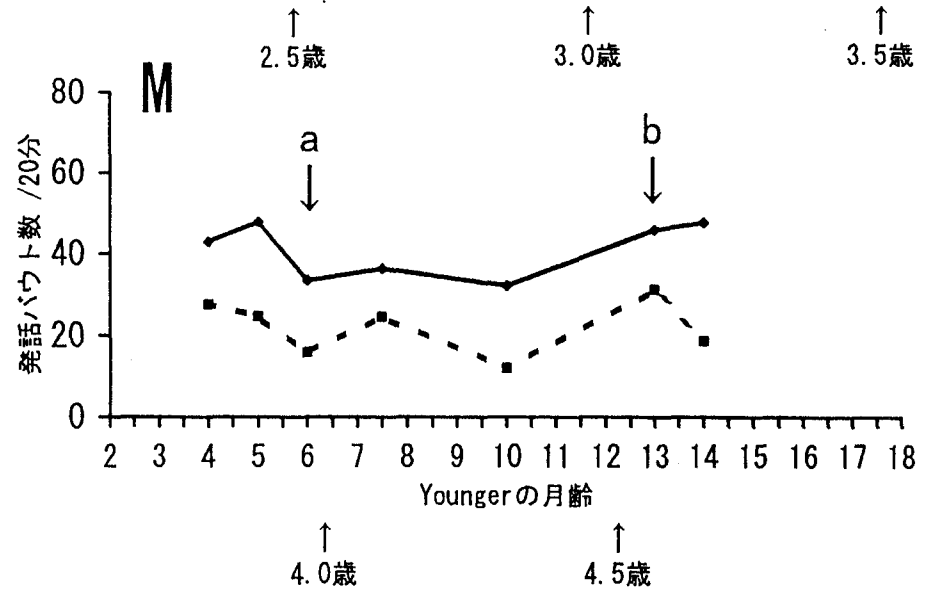
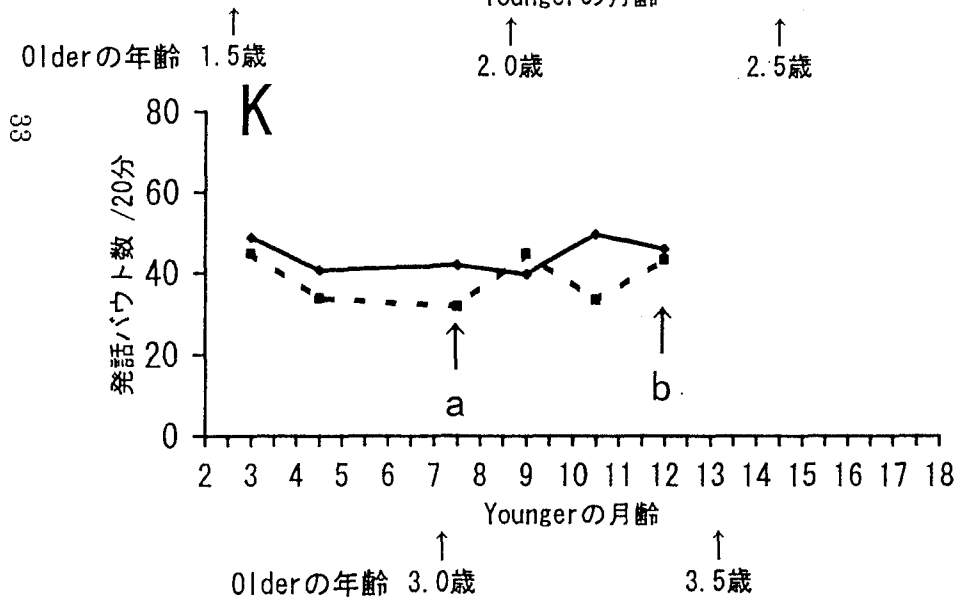
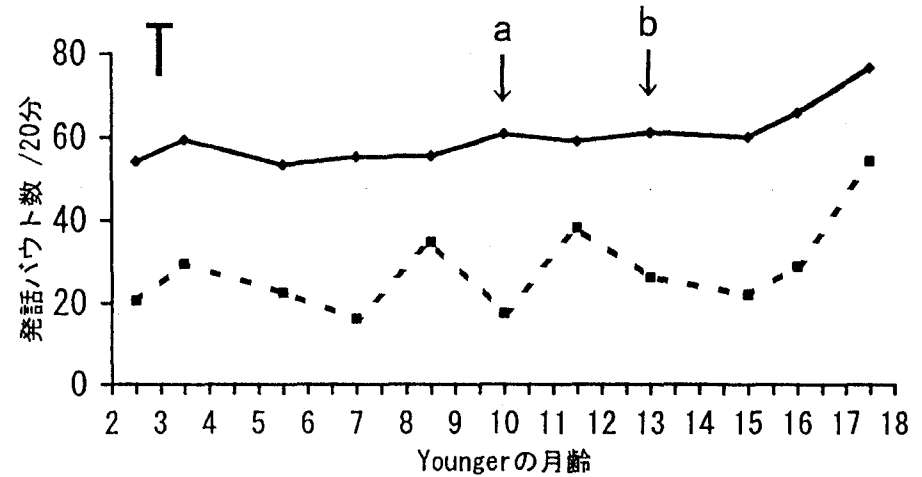
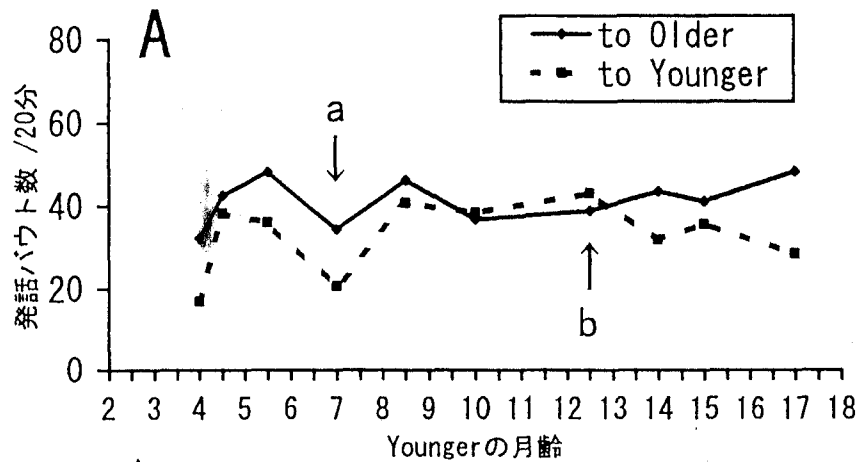
Figure 2-2 は、母親の発話バウト数を Older に向けられたものと Younger に向けられたものに分類し、それぞれの単位時間あたりの生起頻度が縦断的にどう変化したかを表したものである。データは被験者毎に示されている。

TとMに関しては、観察期間中のすべての時期において、Younger に対する発話バウトより Older に対する発話バウトの方が多かった。AとKに関しても、一部の時期（A：Younger 出生後 10～12.5 ヶ月； K：Younger 出生後 9 ヶ月）を除くすべての時期において、Younger に対する発話バウトより Older に対する発話バウトの方が多かった。

Older に向けられた発話バウトは、AとMでは生後 10 ヶ月頃から、Tでは全観察期間を通じて、徐々に増える傾向が認められた。Younger に向けられた発話バウト数に関しては、発達的な変化は認められなかった。

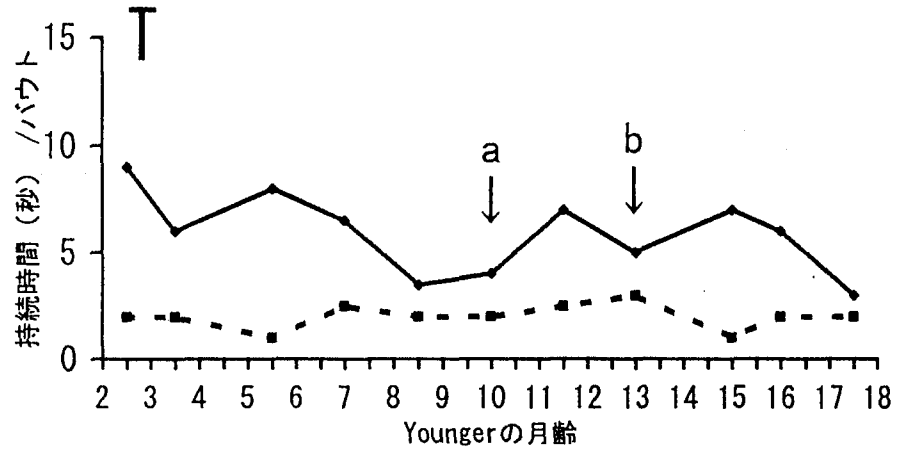
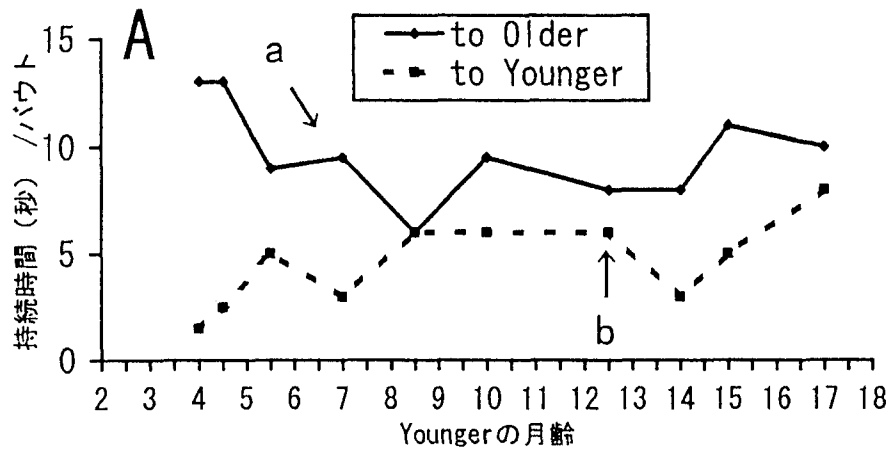
Figure 2-3 は、母親の発話バウトの 1 バウトあたりの持続時間を Older に向けられたものと Younger に向けられたものに分類し、それぞれが縦断的にどう変化したかを表したものである。

A， T， Mの 3 組に関しては、観察期間中のすべての時期において、Younger に向けられた発話バウトより Older に向けられた発話バウトの方が長かった。K に関しても、一部の時期（Younger 出生後 10.5 ヶ月）を除くすべての時期にお



- a: Youngerがハイハイできるようになった時期
- b: Youngerが歩けるようになった時期

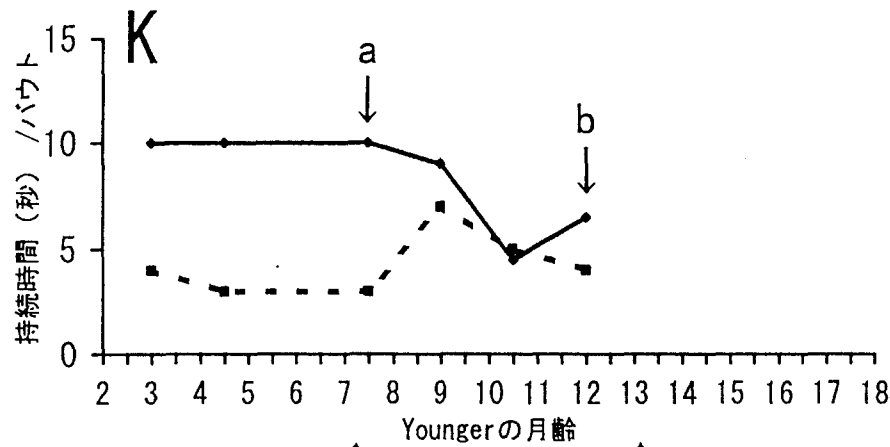
Figure 2-2 母親の発話バウト数の縦断的变化



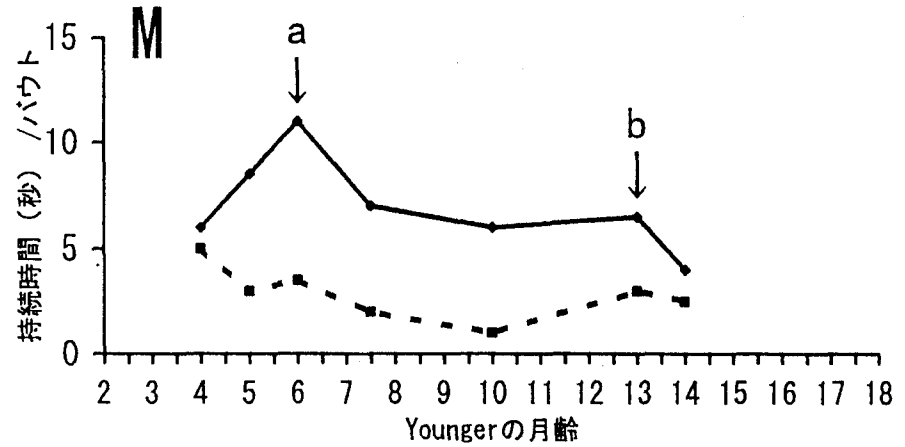
Olderの年齢 ↑ 1.5歳 ↑ 2.0歳 ↑ 2.5歳

↑ 2.5歳 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳

34



Olderの年齢 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳



↑ 4.0歳 ↑ 4.5歳

a: Youngerがハイハイできるようになった時期
 b: Youngerが歩けるようになった時期

Figure 2-3 発話バウトの持続時間の縦断的変化

いて、Younger に向けられた発話バウトより Older に向けられた発話バウトの方が持続時間が長かった。

Older に対する発話バウトの持続時間は、T, K, Mの3組については、漸減する傾向が認められた。Younger に対する発話バウトの持続時間については、顕著な傾向が認められなかった。

2) 母親による同時的関わり

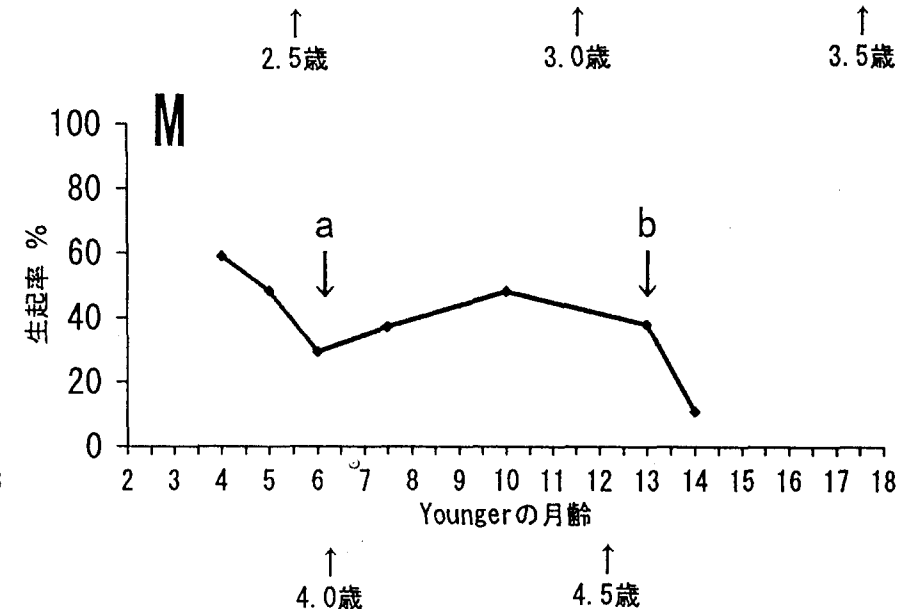
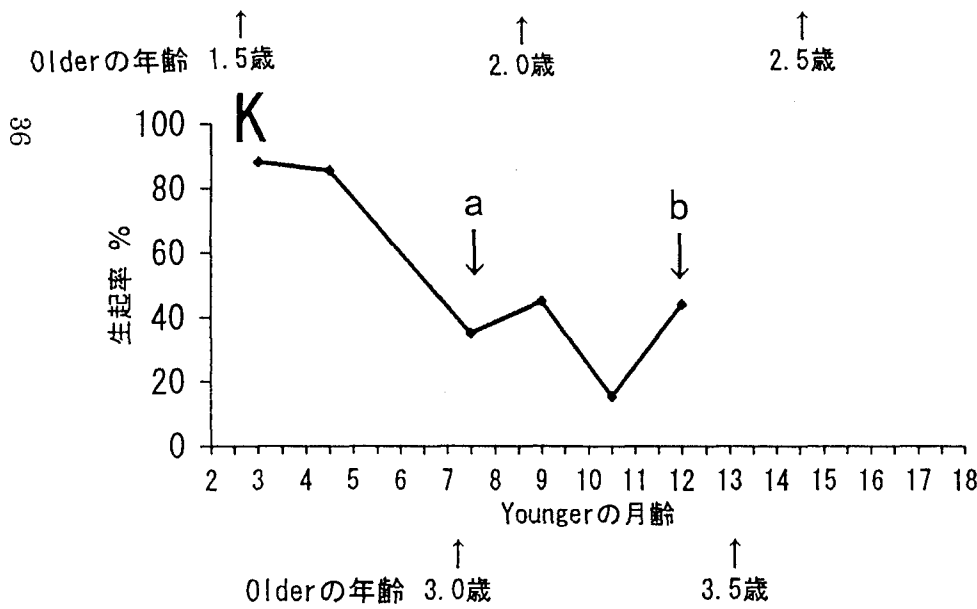
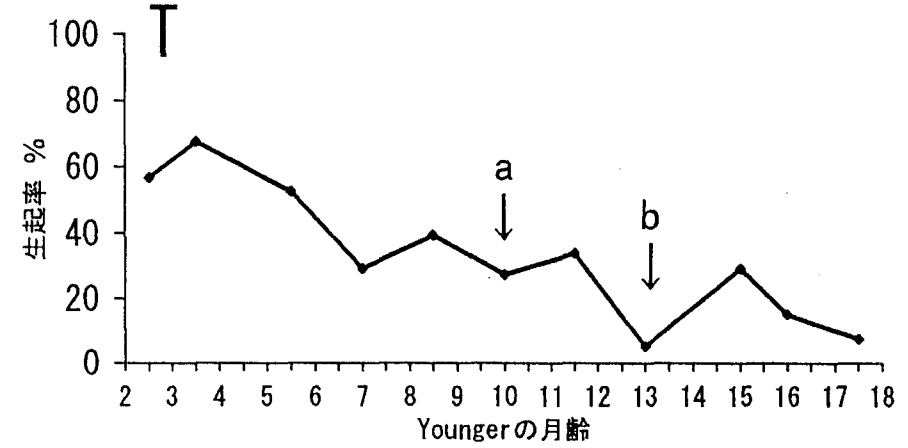
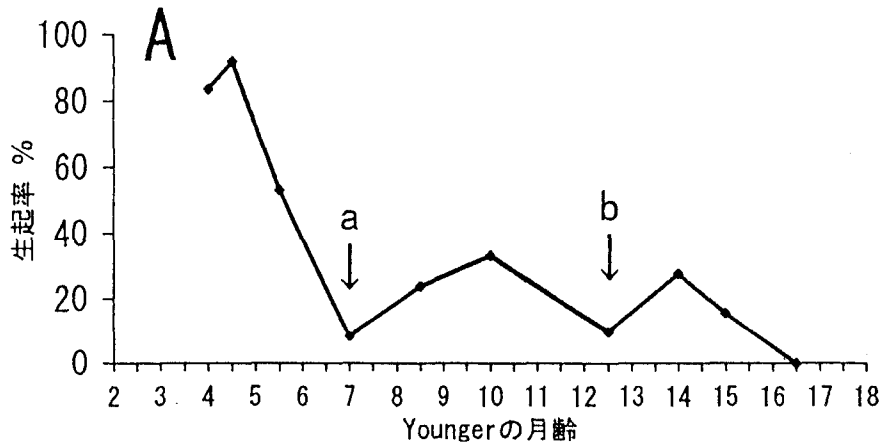
Figure 2-4 は、同時的関わりの割合を縦断的に表したものである。同時的関わりは、A, T, K, Mのいずれの被験者についても、全体的に減少する傾向があった。同時的関わりが最も急激に減少する時期は、A, K, Mにおいては Younger がハイハイを始める頃であった。

2. きょうだい間の相互作用

1) 否定的相互作用

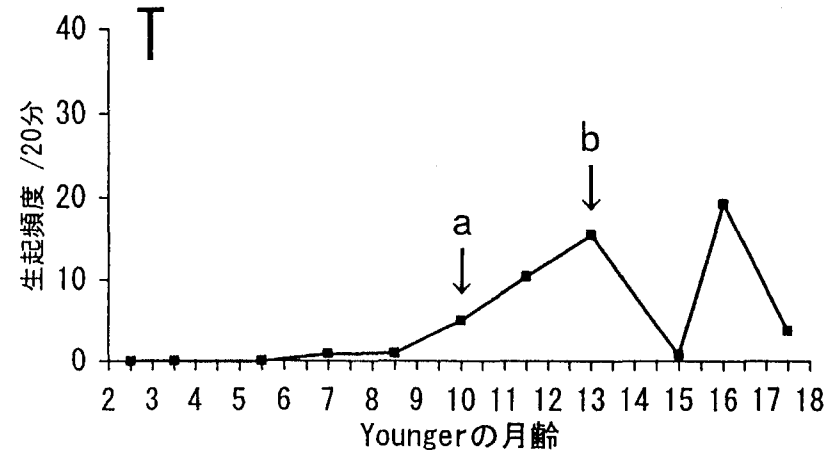
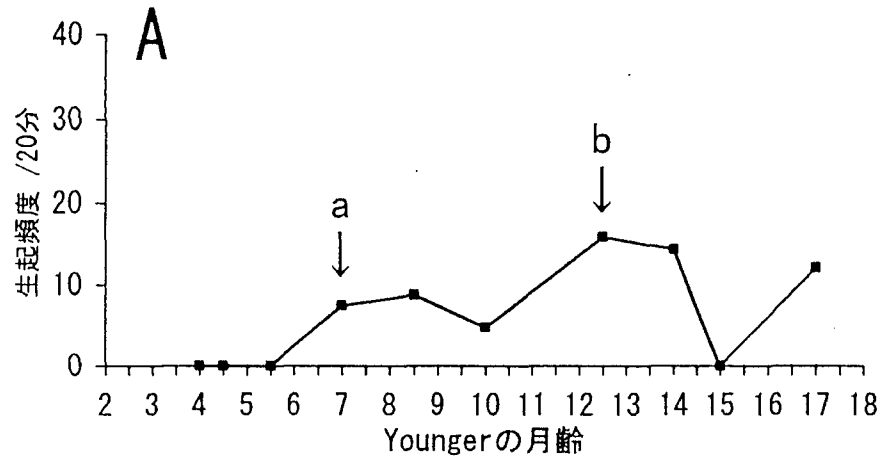
Figure 2-5 は、Younger から Older への非意図的な邪魔行動が縦断的にどう変化したかを表したものである。いずれの被験者に関しても、この行動は、出生後半年前後から観察され、12 ヶ月齢になる頃にかけて増加する傾向があった。Younger の非意図的邪魔行動の初発時期は、Younger がハイハイができるようになった時期とほぼ同期していた。また、この行動のピークは、Younger が歩けるようになった時期と同期していた。

Figure 2-6 は、Older から Younger への否定的行動が縦断的にどう変化したかを表したものである。A, K, Mの3組に関しては、この行動は、Younger が出生後半年を迎える頃から 12 ヶ月齢になる頃にかけて頻繁に観察された。Tにつ



a: Youngerがハイハイできるようになった時期
 b: Youngerが歩けるようになった時期

Figure 2-4 母親による同時的関わりかけの縦断的变化

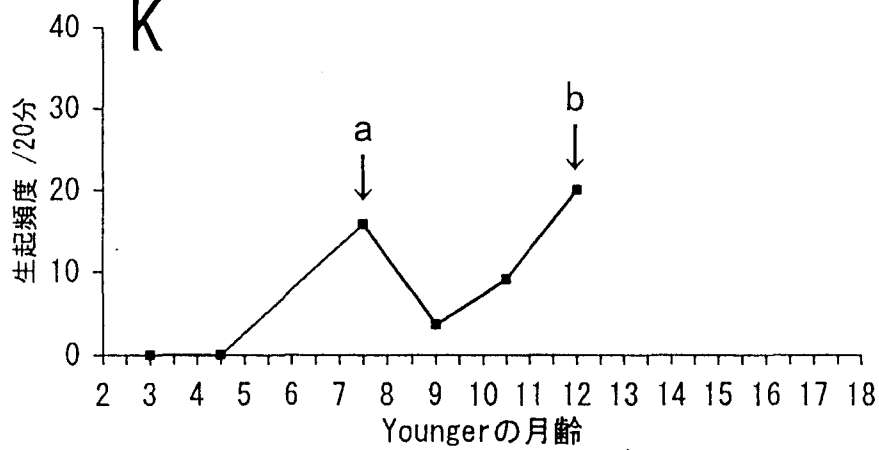


Olderの年齢 1.5歳

2.0歳

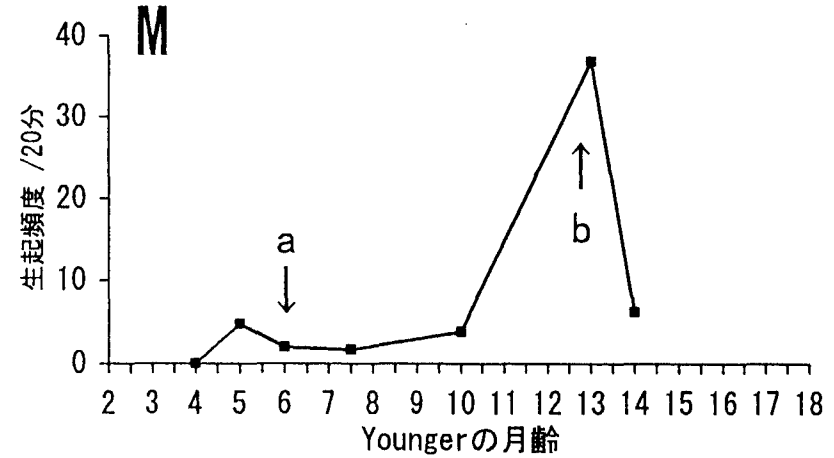
2.5歳

37



Olderの年齢 3.0歳

3.5歳



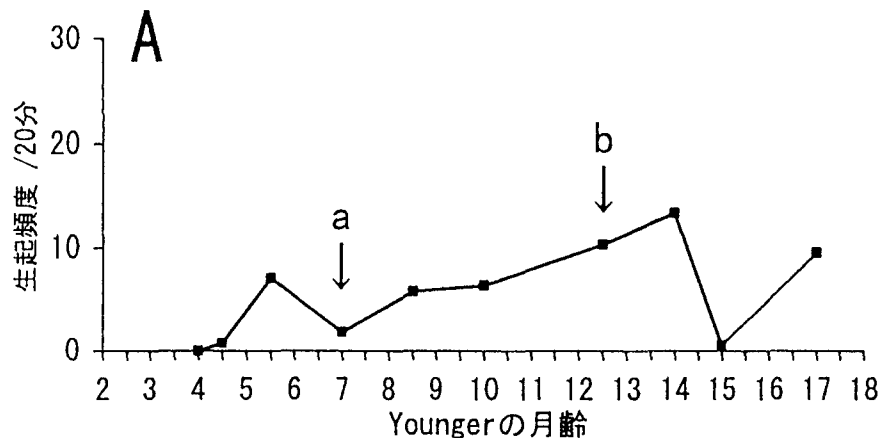
4.0歳

4.5歳

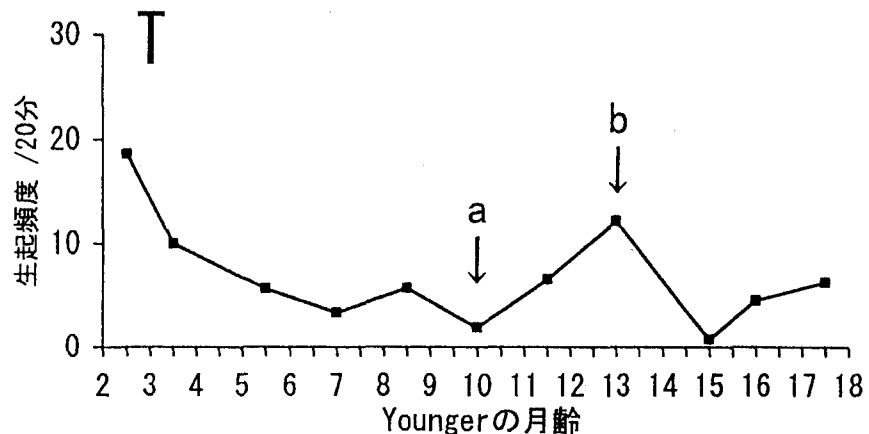
a: Youngerがハイハイできるようになった時期

b: Youngerが歩けるようになった時期

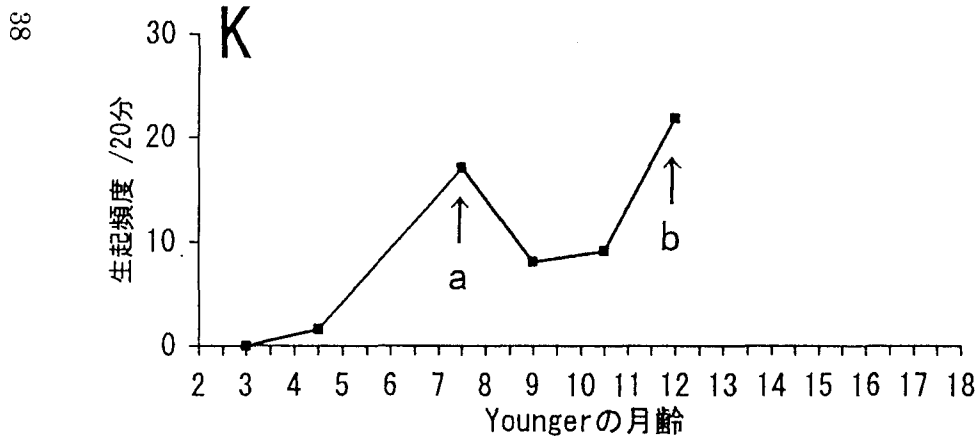
Figure 2-5 Youngerによる非意図的な邪魔行動の縦断的变化



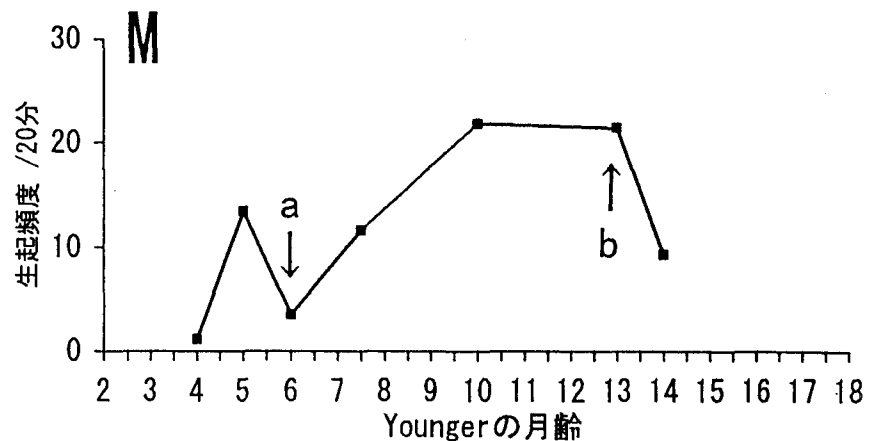
Olderの年齢 ↑ 1.5歳 ↑ 2.0歳 ↑ 2.5歳



↑ 2.5歳 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳



Olderの年齢 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳



↑ 4.0歳 ↑ 4.5歳

a: Youngerがハイハイできるようになった時期
b: Youngerが歩けるようになった時期

Figure 2-6 OlderからYoungerへの否定的行動の縦断的变化

いては、この行動は観察開始時点から観察され、Younger が 7 ヶ月齢になる頃にかけて減少したが、それ以降 12 ヶ月齢頃にかけて再び増加した。

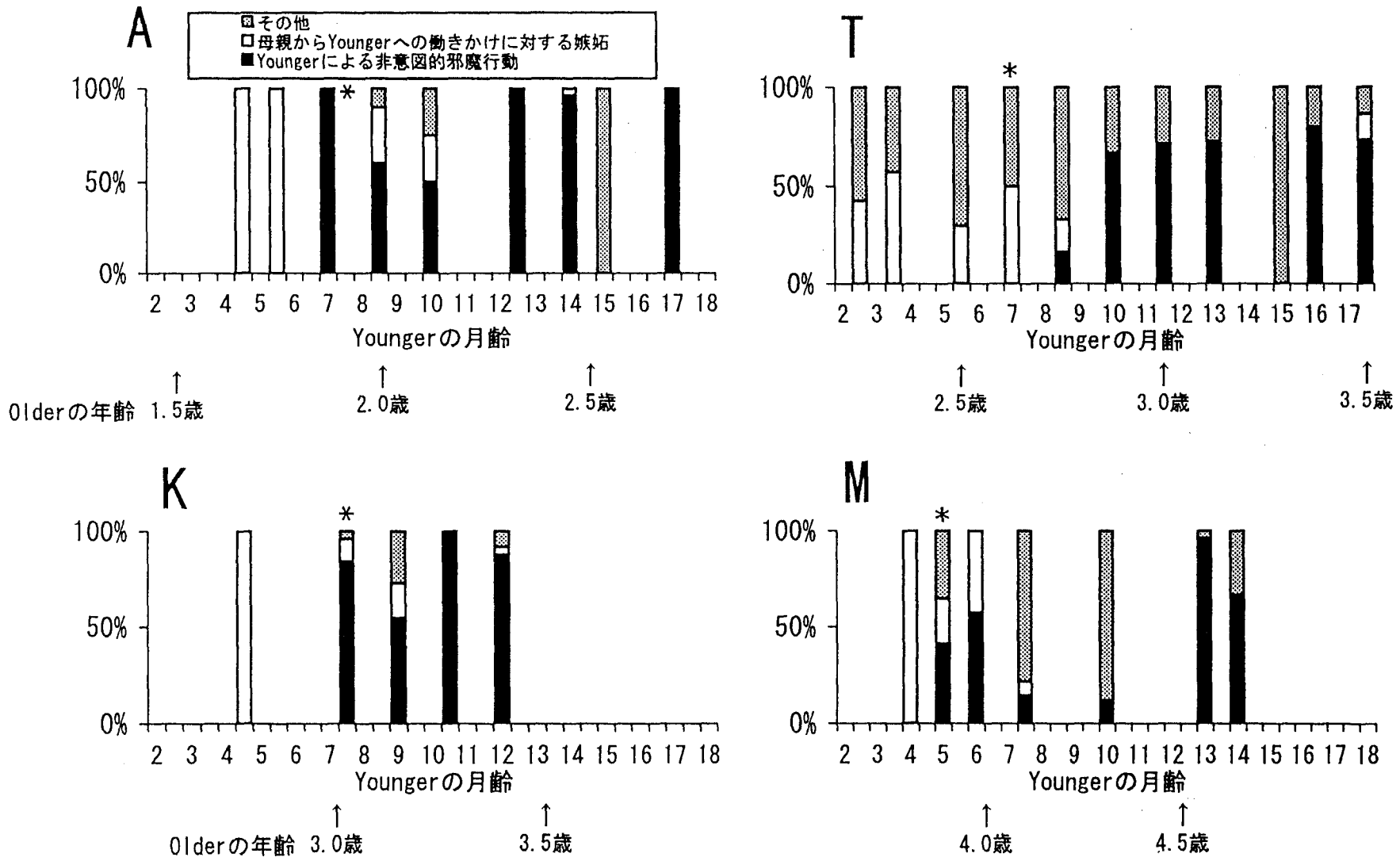
Figure 2-7 は、Older から Younger への否定的行動がいかなる原因で生じたかを縦断的に表したものである。いずれの被験者に関しても、Older から Younger への否定的行動は、最初は母親から Younger への働きかけに対する嫉妬が原因で生じることが多かった。しかしながら、Younger が出生後半年前後になる頃よりは、Younger の非意図的な邪魔行動が原因で Older の否定的行動が生起することが多かった。

2) Older から Younger への親和的行動

Figure 2-8 は、Older から Younger への親和的行動の縦断的変化を示したものである。A では、この行動は観察期間を通じてほとんど見られなかった。T では、初回の観察で最も頻繁に観察されたが、その後は減少した。しかしながら、Younger が 15 ヶ月齢の時期及び 17.5 ヶ月齢の時期において再び観察された。K では、Older の親和的行動はほとんどすべての時期において観察された。M では、Older の親和的行動は、観察開始当初の 4 ヶ月頃に最も頻繁に観察されたが、それ以降は減少し、ほとんど観察されなかった。

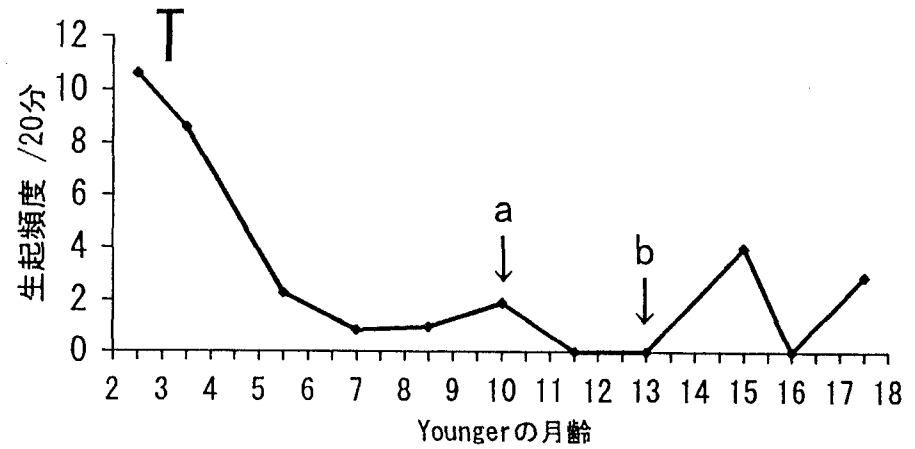
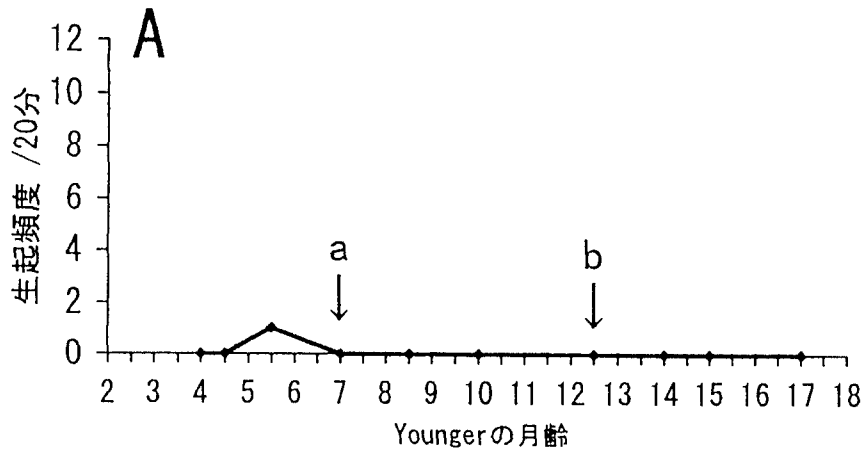
3) Younger の行動や内的状態に対する Older の関心

Figure 2-9 は、Younger の行動や内的状態に対して Older がどの程度関心を示したかを縦断的に表したものである。A では、この行動は、わずかであるが観察された。T では、すべての時期において観察され、特に Younger が 11.5 ヶ月齢の時期には頻繁に観察された。K では、この行動は少ないながらも観察期間中のいずれの時期においても見られた。M では、この行動は 6 ヶ月齢、13 ヶ月齢の時



* Youngerによる非意図的邪魔行動がはじめて観察された時期

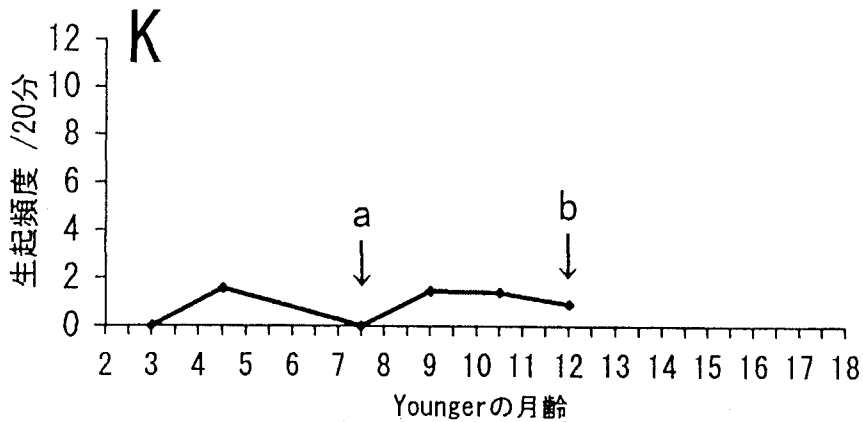
Figure 2-7 Olderによる否定的行動の原因の縦断的变化



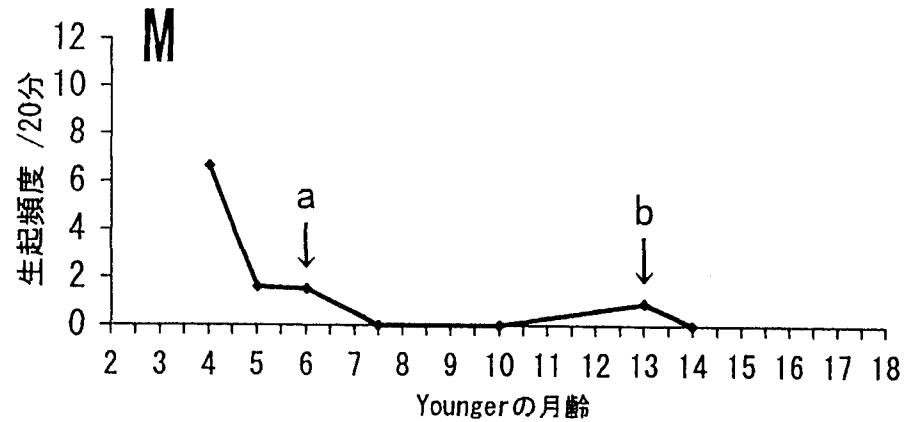
Olderの年齢 ↑ 1.5歳 ↑ 2.0歳 ↑ 2.5歳

↑ 2.5歳 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳

41



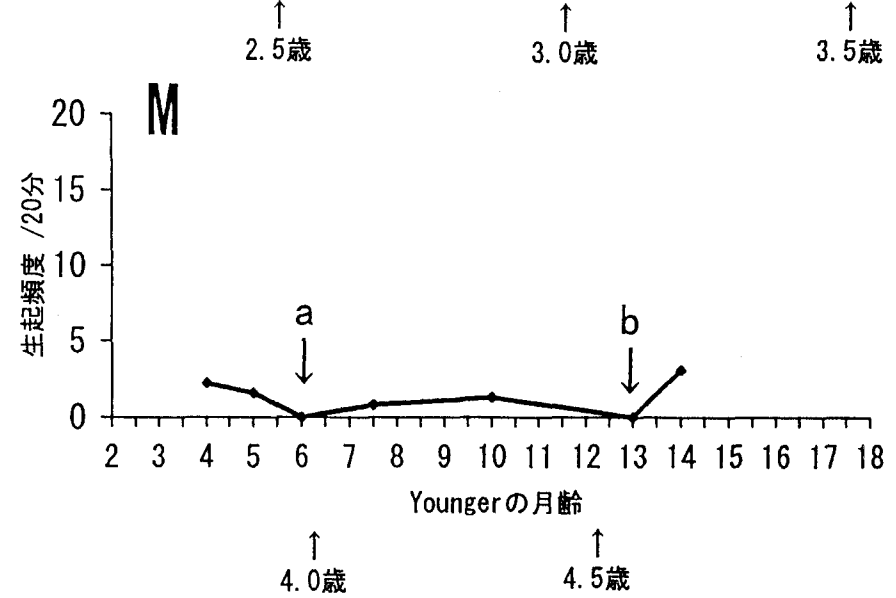
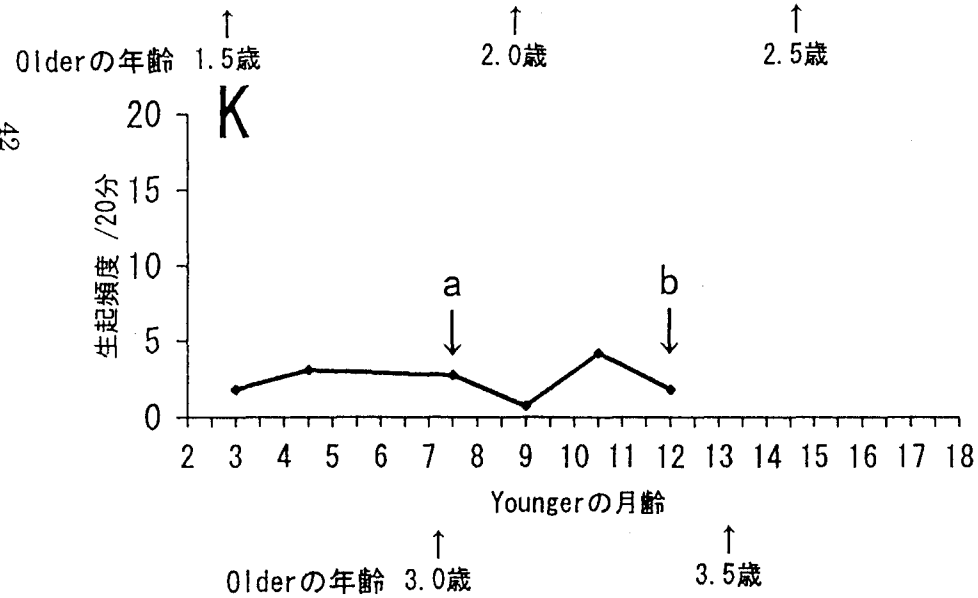
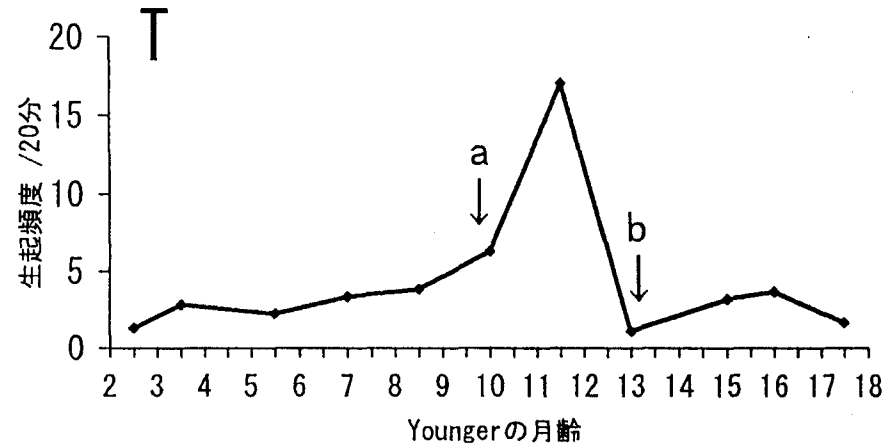
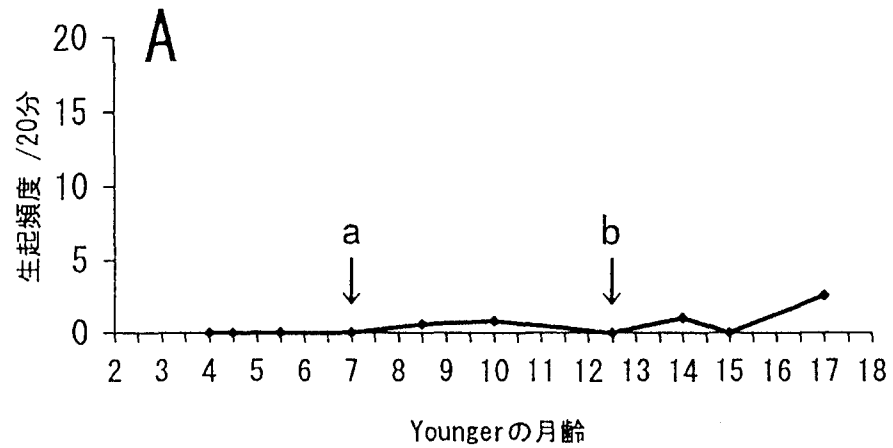
Olderの年齢 ↑ 3.0歳 ↑ 3.5歳



↑ 4.0歳 ↑ 4.5歳

a: Youngerがハイハイできるようになった時期
 b: Youngerが歩けるようになった時期

Figure 2-8 OlderからYoungerへの親和的行動の縦断的变化



42

a: Youngerがハイハイできるようになった時期
 b: Youngerが歩けるようになった時期

Figure 2-9 OlderからYoungerへの関心の縦断的变化

期を除くすべての時期において観察された。

3. Older から Younger への否定的行動・親和的行動・関心の前後における

母親の調整行動

Older から Younger への否定的行動や親和的行動、あるいは Older から Younger への関心が生起したときに、母親がいかなる調整行動を示したかが分析された。なお、この後の分析に関しては、観察期間全体のデータを一括して扱う。

1) Older が Younger に否定的行動を示したときの母親の調整行動

Table 2-5 は、Older から Younger に対する否定的行動の直後に母親が調整行動を示した割合を示したものである。母親の調整行動は T で最も頻繁に観察された (72.6%)、次いで M が多かった (60.7%)。A、K で調整行動が観察されたのは Older の否定的行動全体の半分以下であった (A : 48.8%; K : 47.4%)。

Table 2-6 は、母親の調整行動の有無を Older の否定的行動の内容によって分類して示したものである。非難、拒否、奪取のそれぞれについては、調整行動の有無は被験者毎に傾向が異なっていた。しかしながら、身体的攻撃に対しては、いずれの被験者に関しても母親は調整行動を示すことが多かった。なかでも、T や M に関しては Older から Younger への身体的攻撃自体の総数が多く、母親の調整行動も頻繁であった。

Table 2-7 は、Older が Younger に否定的行動を示した直後に母親が示した調整行動の分布を示したものである。

Younger に対する調整行動としては、A と M では注意の分散が最も多く (A 35.0%; M 23.3%)、T では保護が (17.4%)、K では Older の行動や内的状

Table 2-5 OlderからYoungerへの否定的行動の
直後における母親の調整行動の有無

被験者	直後の母親の調整行動		Total
	あり	なし	
A	40 (48.8)	42 (51.2)	82 (100.0)
T	69 (72.6)	26 (27.4)	95 (100.0)
K	36 (47.4)	40 (52.6)	76 (100.0)
M	54 (60.7)	35 (39.3)	89 (100.0)

注：（ ）の数値は全体に占める割合

Table 2-6 Olderの否定的行動の内容別にみた母親の調整行動の有無

被験者	非難			拒否			奪取			身体的攻撃			邪魔		
	調整有	調整無	Total	調整有	調整無	Total	調整有	調整無	Total	調整有	調整無	Total	調整有	調整無	Total
A	3 (50.0)	3 (50.0)	6 (100.0)	19 (47.5)	21 (52.5)	40 (100.0)	11 (42.3)	15 (57.7)	26 (100.0)	7 (77.8)	2 (22.2)	9 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
T	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)	3 (37.5)	5 (62.5)	8 (100.0)	7 (63.6)	4 (36.4)	11 (100.0)	52 (86.7)	8 (13.3)	60 (100.0)	3 (60.0)	2 (40.0)	5 (100.0)
K	7 (53.8)	6 (46.2)	13 (100.0)	12 (44.4)	15 (55.6)	27 (100.0)	6 (46.2)	7 (53.8)	13 (100.0)	11 (57.9)	8 (42.1)	19 (100.0)	0 (0.0)	4 (100.0)	4 (100.0)
M	12 (66.7)	6 (33.3)	18 (100.0)	9 (60.0)	6 (40.0)	15 (100.0)	5 (33.3)	10 (66.7)	15 (100.0)	28 (77.8)	8 (22.2)	36 (100.0)	0 (0.0)	5 (100.0)	5 (100.0)

注1： Olderの否定的行動の内訳についてはTable 2-3を参照のこと

注2： () の数値は全体に占める割合

Table 2-7 Olderの否定的行動の直後に見られた母親の調整行動の内訳

Youngerに向けられた調整行動						
被験者	直後の母親の 調整行動の総数	保護	慰撫	Youngerの 注意を逸らす	Olderの行動や内的 状態に関する発話	親和的関わり の促進
A	40 (100.0)	2 (5.0)	0 (0.0)	14 (35.0)	2 (5.0)	0 (0.0)
T	69 (100.0)	12 (17.4)	3 (4.3)	7 (10.1)	3 (4.3)	2 (2.9)
K	36 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (11.1)	8 (22.2)	3 (8.3)
M	54 (100.0)	2 (4.7)	0 (0.0)	10 (23.3)	7 (16.3)	0 (0.0)
Olderに向けられた調整行動						
被験者	直後の母親の 調整行動の総数	叱責	Youngerの 代わりに謝罪	Olderの 注意を逸らす	Youngerの行動や内的 状態に関する発話	親和的関わり の促進
A	40 (100.0)	15 (37.5)	0 (0.0)	2 (5.0)	10 (25.0)	7 (17.5)
T	69 (100.0)	19 (27.5)	3 (4.3)	3 (4.3)	20 (29.0)	4 (5.8)
K	36 (100.0)	7 (19.4)	0 (0.0)	4 (11.1)	16 (44.4)	4 (11.1)
M	54 (100.0)	15 (34.9)	1 (2.3)	0 (0.0)	25 (58.1)	12 (27.9)

注1： 母親の調整行動の内訳についてはTable 2-4を参照のこと

注2： () の数値は全体に占める割合

態に関する発話が (22.2%) 最も多かった。

Older に対して示された調整行動としては、Aでは、叱責が最も多く (37.5%)、次いで Younger の行動や内的状態に関する発話が多かった (25.0%)。Tでは、Younger の行動や内的状態に関する発話が最も多く (29.0%)、次いで叱責が多かった (27.5%)。Kでは、Younger の行動や内的状態に関する発話が最も多く (44.4%)、次いで叱責 (19.4%) が多かった。またMにおいても、Younger の行動や内的状態に関する発話が最も多く (58.1%)、次いで叱責が多かった (34.9%)。

2) Older が Younger に親和的行動を示したときの母親の調整行動

Table 2-8 は、Older から Younger への親和的行動が生じた直前及び直後に母親が調整行動を示した割合を示したものである。Aでは、親和的行動は 1 例だけであったが、その直前及び直後には母親の調整行動が観察された。Tでは、Older の親和的行動は 41 例観察され、そのうち 25 例 (61.0%) では、直後に調整行動が観察された。Kでは、Older の親和的行動は 8 例だけであったが、そのうち 5 例 (62.5%) では直前に、4 例 (50.0%) では直後に、母親の調整行動が観察された。Mでは、親和的行動は 12 例で、そのうち 4 例 (33.3%) では直前に、5 例 (41.7%) では直後に、母親の調整行動が観察された。

Table 2-9 は、Older から Younger への親和的行動の直前及び直後に母親が示した調整行動の分布を表したものである。Aでは、Older の親和的行動は 1 例であったが、その直前に母親は Younger との関わりを促すような発話を Older に対して示した。また、直後には Older に対する賞賛行動を示した。Tでは、親和的行動の直前に見られた調整行動のすべてにおいて、Younger の行動や内的状態

Table 2-8 OlderからYoungerへの親和的行動の
直前・直後における母親の調整行動の有無

被験者	母親の調整行動		親和的行動 (頻度)
	直前	直後	
A	1 (100.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
T	16 (39.0)	25 (61.0)	41 (100.0)
K	5 (62.5)	4 (50.0)	8 (100.0)
M	4 (33.3)	5 (41.7)	12 (100.0)

注：（ ）の数値は全体に占める割合

Table 2-9 Olderの親和的行動の直前・直後に見られた母親の調整行動の内訳

被験者	直前の母親の 調整行動の総数	Youngerの行動や内的 状態に関する発話	Youngerとの関わりを 促す発話	Olderの行動に関する Youngerへの発話	その他	
直前						
A	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
T	16 (100.0)	16 (100.0)	7 (43.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
K	5 (100.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	
M	4 (100.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
被験者	直後の母親の 調整行動の総数	Youngerの行動や内的 状態に関する発話	Youngerとの関わりを 促す発話	Olderの行動に関する Youngerへの発話	賞賛	その他
直後						
A	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)
T	25 (100.0)	5 (20.0)	7 (28.0)	0 (0.0)	3 (12.0)	6 (24.0)
K	4 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
M	5 (100.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	3 (60.0)

注1： 母親の調整行動の内訳についてはTable 2-4を参照のこと

注2： () の数値は全体に占める割合

に関する発話が見られた。Younger との関わりを促すような発話もかなりの割合で見られた (43.8%)。Tではまた、親和的行動の直後に、引き続いて Younger との関わりを促すような発話が頻繁に観察された (28.0%)。Kでは、親和的行動の直前に見られた調整行動 5 例のうち 2 例 (40.0%) において、Younger との関わりを促すような発話が行われた。また、親和的行動の直後の調整行動のすべてにおいて、Older の行動や内的状態に関する発話が見られた。Mでは、Older の親和的行動の直前における調整行動 4 例のうち 3 例 (75.0%) において、Younger の行動や内的状態に関する発話が見られた。また、親和的行動の直後にも Younger の行動や内的状態に関する発話が多く見られた (40.0%)。

3) Younger の行動や内的状態に Older が関心を示したときの母親の調整行動

Table 2-10 は、Older が Younger の行動や内的状態に関心を示した直前及び直後に母親が何らかの調整行動を示した割合を示したものである。Aでは、4 例のうち 1 例 (25.0%) で直前に、同じく 1 例 (25.0%) で直後に、母親の調整行動が見られた。Tでは、直前に調整行動が観察されたのは、62 例中 24 例 (38.7%)、直後に観察されたのは 36 例 (58.1%) であった。Kでは、直前に母親の調整行動があったのは、21 例中 8 例 (38.1%)、直後に調整行動があったのは 13 例 (61.9%) であった。Mでは、直前に調整行動があったのは、9 例中 5 例 (55.6%)、直後に調整行動があったのは 6 例 (66.7%) であった。

Table 2-11 は、Older が Younger の行動や内的状態に関心を示した直前及び直後に観察された調整行動の分布を示したものである。A、T、K、Mのいずれの被験者においても、Older から Younger への関心の直前に観察された調整行動のすべては、Younger の行動や内的状態に関する発話であった。また、同じように、

Table 2-10 OlderからYoungerへの関心の
直前・直後における母親の調整行動の有無

被験者	母親の調整行動		Youngerの行動や内的 状態に対する関心（頻度）
	直前	直後	
A	1 (25.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
T	24 (38.7)	36 (58.1)	62 (100.0)
K	8 (38.1)	13 (61.9)	21 (100.0)
M	5 (55.6)	6 (66.7)	9 (100.0)

注：（ ）の数値は全体に占める割合

Table 2-11 OlderからYoungerへの関心の直前・直後に見られた母親の調整行動の内訳

被験者	直前の母親の 調整行動の総数	Youngerの行動や内的 状態に関する母親の発話	Youngerとの関わりを 促す発話	
<u>直前</u>				
A	1 (100.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	
T	24 (100.0)	24 (100.0)	0 (0.0)	
K	8 (100.0)	8 (100.0)	0 (0.0)	
M	5 (100.0)	5 (100.0)	0 (0.0)	
被験者	直後の母親の 調整行動の総数	Youngerの行動や内的 状態に関する母親の発話	Youngerとの関わりを 促す発話	その他
<u>直後</u>				
A	1 (100)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
T	36 (100.0)	26 (72.6)	3 (8.3)	7 (19.4)
K	13 (100.0)	6 (46.2)	1 (7.7)	6 (46.2)
M	6 (100.0)	6 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

注1：母親の調整行動の内訳についてはTable 2-4を参照のこと

注2：（）の数値は全体に占める割合

直後の調整行動においても Younger の行動や内的状態に関する発話が非常に多かった。

4. 子ども同士の相互作用に対する母親の調整行動の役割

以上示したように、Older から Younger への否定的行動や親和的行動、あるいは Older から Younger への関心が生じた直前もしくは直後には、母親が Younger の行動や内的状態を Older に伝える場合が多かった。そこで、本項では逆に、この調整行動がいかなる場面でよく生じたか、そしてその直後にはいかなる状況に移行したかを分析した。

Table 2-12 は、Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動が生じた直前及び直後の状況の内訳を示したものである。Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動は、Aで60例、Tで262例、Kで143例、Mで107例観察された。

いずれの被験者に関しても、この行動の直前は子ども同士の否定的相互作用である割合が高かった。また、TやKにおいては、直前が子ども同士の親和的相互作用である割合も高かった（T：12.6%；K：23.1%）。

Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動が生じた直後の状況に関しては、TやKでは、親和的な状況が最も多かった。またT、Kにおいては、直後に Older が Younger の行動や内的状態に関心を示した割合も高かった。

Table 2-12 Youngerの行動や内的状態をOlderに伝える行動が生起した
直前・直後の状況

被験者	Youngerの行動や内的状態を		直前の状況	
	Olderに伝える行動の総数	否定的相互作用	親和的相互作用	OlderからYoungerへの関心
A	60 (100.0)	40 (66.7)	0 (0.0)	1 (1.7)
T	262 (100.0)	55 (21.0)	33 (12.6)	26 (9.9)
K	143 (100.0)	63 (44.1)	33 (23.1)	6 (4.2)
M	107 (100.0)	51 (47.7)	9 (8.4)	6 (5.6)

被験者	Youngerの行動や内的状態を		直後の状況	
	Olderに伝える行動の総数	否定的相互作用	親和的相互作用	OlderからYoungerへの関心
A	60 (100.0)	20 (33.3)	1 (1.7)	1 (1.7)
T	262 (100.0)	15 (5.7)	25 (9.5)	24 (9.2)
K	143 (100.0)	7 (4.9)	19 (13.3)	8 (5.6)
M	107 (100.0)	24 (22.4)	4 (3.7)	5 (4.7)

注：（ ）の数値は全体に占める割合

考 察

第二子の出産は、母親の子育てに大きな負担をもたらす。第二子の誕生以降、母親は二人の子どもの世話を同時にしなければならないし、何よりも子どもたちの関係を適切に調整していかねばならない。

本研究は、第二子を出産したばかりの母親が子どもたちの関係をいかに調整しているかを明らかにするために計画された。

最初に注目したのは、母親が子どもたちとどのような配分で関わるのかという問題であった。仮に子どもが一人であれば、母親は自分の注意をすべてその子どもに向けることができる。しかしながら、相手が二人になると、母親はその注意をバランスよく配分していかなくてはならない。なぜなら、一方の子どもに注意が偏っていた場合、子ども同士の間には嫉妬心が芽生え、他方より少しでも長くその注意を自分の方に向けようと母親に無理な要求をしたり、あるいはきょうだい間に敵対的な関係が生まれる可能性があるからである。つまり、母親はある程度自分自身の判断で子どもたちとの関わりのバランスを取り、子ども同士の関係が競合的になるのを防ぐ必要があるのである。

本研究が次に注目したのは、子ども同士の相互作用に対して母親がどのような行動を示すのかという問題であった。母親の行動は、子ども同士の否定的な関わりを解消し、親和的な関わりを亢進させるように、方向づけられているのではないかと予想された。なぜなら、このような行動を通じて、子どもたちが親和的な関係を構築していけば、それは母親自身の負担の軽減にもつながるからである。

具体的には、子ども同士の否定的な関わりの直後や親和的な関わりの前後に、母親がどのような行動を示したかが分析された。

本研究の観察は、母親、Older, Younger によるブロック遊び場面を対象に行われた。このような実験場面は以上の点を明らかにするうえで有効だと考えられた。その理由は以下のとおりである。

まず第一に、本研究で使用したブロックは子どもたちにとって新奇なおもちゃであったので、長時間にわたる観察が可能であると考えられた。子どもは、よほど興味のあるおもちゃでないかぎり、すぐに飽きて別のものに注意を移行させてしまう。本研究では、各回 20～40 分程度のまとまった遊び場面を観察することができたので、母親による注意の配分や調整行動についての定量的な分析が可能であった。

また第二に、ブロックの部品は数に限りがあるので、ブロックをめぐる争いが通常よりも生じ易いと考えられた。子ども同士の否定的な関わりやそれに対する母親の調整行動の特徴を分析するには、このような場面の方が適当であろう。

さらに、このような実験場面のもう一つの特徴としては、子ども同士の親和的な関わりが生じにくいという点が挙げられる。Younger はまだ生まれてまもないので、親和的な行動を示すのは主に Older であるが、Older の注意はブロックという新奇なおもちゃに向かっている。母親がいかなる行動を通して Older の親和的行動を引き出すのかという問題を解明するには、むしろ親和的な行動が少ない場面の方が望ましいと考えられた。

以下においては、上述した内容に沿って 3 つの問題が検証される。

第一点は、母親が自身の判断で子どもたちとの関係をどのように維持していた

かという問題である。Older, Younger に対する関わりかけをどのような配分で行ったか、そしてその配分の仕方には発達的な変化があったかについてまず言及し、続いて、同時的関わりかけ（Older に言語的な働きかけをしつつ Younger に対しても非言語的に働きかける行動）に関する結果について考察する。

第二点は、子ども同士の相互作用に対する調整行動を母親がどの程度示したか、そして調整行動の内容にはどのような特徴があったかという問題である。否定的な関わりや親和的な関わりの直前あるいは直後に示された母親の行動の特徴について考察する。

そして最後に、調整行動のなかで最も特徴的であった、Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動に注目し、この行動が子どものきょうだい関係にとってどのような意味を持っていたかを考察する。この行動がどのような状況でよく出現し、あるいはその後どのような状況に移行したかについて、詳しく論じる。

1. 母親から子どもへの関わりかけの特徴

本研究では、母親から子どもへの関わりかけを定量的に表すために、発話バウトが指標として用いられた。Older, Younger それぞれに対する発話バウトを比較することによって、母親の注意がどのように配分されているか、あるいは両者への関わりかけがどの程度の時間間隔で移行するかが明らかにできる。

Older に対する発話バウト数は、観察期間中のいずれの時期においても、Younger に対する発話バウト数より多かった。しかしながら、Younger が生後 10 ヶ月頃に達した頃から、Older に対する発話バウト数がやや増加する傾向が見られた。

発話バウトの持続時間は、Older に向けられたものの方が長かった。しかしながら、Older に対する発話バウトは、少なくとも T, K, M の 3 組に関する限り、徐々に短くなる傾向があった。

Older への発話と Younger への非言語的関わりかけが並行して行われる同時的関わりかけは、いずれの被験者においても、明確な減少傾向があった。

以上の結果を総合すると次のようになる。

Younger が誕生して数ヶ月間は、母親はどちらかといえば Older と頻繁に、かつ長い時間言語的交渉を持った。しかしながら、注目すべきは、Older に話しかけながらも、母親は Younger に対しても非言語的な働きかけを示したことである。これは逆にいえば、Younger に対する働きかけが非言語的な内容で補えるからこそ、Older と比較的長い時間言語的に関わったということの意味しているのかもしれない。

このような傾向は、Younger の運動機能が活発になる生後半年以降になると消失した。この頃になると、母親から Older への発話バウト数は、それ以前より増加したが、逆に発話バウト自体の持続時間は短くなった。このことは、Older との交渉と Younger との交渉が比較的短い時間間隔で交互に行われているという特徴を示している。

Younger が誕生してまもない頃、同時的関わりかけという特徴的な行動を用いることによって、母親は両方の子どもたちとうまく関係を維持していた。同時的関わりかけが次第に観察されなくなると、母親は発話による働きかけを Older, Younger それぞれにうまく配分しながら、彼らとの関係を維持していた。

2. 子ども同士の相互作用に及ぼす母親の調整行動の影響

1) 否定的相互作用

子ども同士の否定的相互作用に関しては、Younger の邪魔行動と Older の否定的行動の二つの行動が分析された。Younger は、運動能力の活発化に伴って、生後半年以降、手を伸ばすなどして Older の邪魔をすることが多くなった。

Older から Younger に対する否定的行動は、Younger の邪魔行動が増加した時期とほぼ同じ時期に増加した。このことは、Older の否定的行動の多くが、Younger の邪魔行動を発端に生じることを示唆している。

しかしながら、ここで注目すべきは、Older の否定的行動が Younger の邪魔行動の初発時期より以前にも観察されたという点である。否定的行動の原因を分析したところ、この時期の Older の否定的行動の多くが、母親が Younger に働きかけることに嫉妬して示されたものであることがわかった。

Younger が誕生する以前であれば、Older は必要なだけ十分に母親の注意を受けられることができる。したがって、Older にとって Younger が産まれてまもないこの時期は、母親による注意が極端に減少したことを痛感する時期と考えられる。言い換えるなら、Older にとって Younger は、母親の注意を横取りする存在として認識されている可能性がある。

では、こうして生じた Older の否定的行動に対して、母親はどの程度、あるいはどのような調整行動を示したのであろうか。調整行動の割合は、多い被験者で 70%以上、少ない被験者で 50%弱であった。

否定的行動には、単に口頭で非難する行動から、叩く、蹴るなどの身体攻撃に至るまで、さまざまなレベルのものが含まれていた。そこで、否定的行動の内容

によって、母親の調整行動の割合には差があるのではないかと考え、分析を行った。

その結果、非難や拒否などの否定的行動に対しては、母親は調整行動を示すこともあったが示さないことも同じぐらいあった。一方、叩いたり、蹴ったりする身体攻撃に対しては、かなりの割合で調整行動を示した。

子ども同士の否定的相互作用に対して調整行動を示す頻度は予想以上に少なかったが、なかでも一定のレベル以上の激しい内容のものに対しては、母親は即座に何らかの行動を示した。母親は子どもの否定的行動のレベルを適切に判断し、調整の必要があるかどうかを決定しているのである。

Older の否定的行動に対する母親の調整行動の内容はさまざまであった。Younger に向けられたもので比較的良好に観察されたのは、保護、注意を逸らす、Older の行動や内的状態に関する発話、の3つであった。

保護は、Older の否定的行動から Younger を守るために用いられる行動である。Older が身体攻撃などを示した場合には、保護によってまず Younger の身の安全を確保する必要がある。また、注意を逸らす、という行動は、一方の注意を別のものに移行させることによって、子ども同士の対立を解消しようとするものである。Older の行動や内的状態に関する発話とは、具体的には「お兄ちゃんが持って行っちゃったねえ」、「お兄ちゃんが先に使ってたのよ」などである。

もし仮に、母親の調整行動の第一の目的が、子ども同士の対立をいち早く解消させることだとするならば、Older の行動や内的状態に関する発話には、注意を逸らすという行動ほどの即効性はない。なぜなら、Younger の注意は依然として Older が手にしているもの、注目しているものに向かい続けるからである。

では、なぜ母親はこのような行動を Younger に示したのであるだろうか。

その理由はおそらく、まだ Younger には十分理解できないにしろ、Older の意図や気持ちを早く理解できるようになってほしいと母親が考えているからではないだろうか。確かに、両者の注意を分散させることにより、否定的な相互作用は即座に解消されるであろう。しかしながら、Younger には、なぜ Older が自分を叩いたのか、あるいはブロックを奪ったのか理解できないに違いない。できるだけ頻繁に Older の行動や気持ちを Younger に説明してやることで、Younger は Older の意図などを早く理解できるようになるかもしれない。実際、Dunn, Brown, & Beardsall (1991) は、感情や気持ちに関する発話がよく行われる家庭で育った子どもは、そうでない子どもよりも、他者の感情を早く理解できるようになったと報告している。

では、Older に対しては母親はどのような調整行動を示したのであるだろうか。

Older に対する調整行動の中でひときわ多かったのは、叱責、Younger の行動や内的状態に関する発話、の2つであった。叱責は、Older の行動を即座に中止させることを目的とした行動で、「だめ」、「やめなさい」などの発話がこれに該当する。Younger の行動や内的状態に関する発話は、叱責の頻度に匹敵するほど、あるいは多くの場合それ以上の頻度で出現した。

Younger の場合と同様、もし調整行動の主たる目的が、否定的行動をいち早く終結させることだとすれば、母親は叱責や注意を逸らす、などの行動をもっと多用したはずである。

では、なぜ母親は Younger の行動や内的状態を説明するという行動を頻繁に示したのであるだろうか。

この理由として有力なのは、Younger の意図や気持ちや欲求を Older に理解させようというかなり強い意志が母親にあったという説明であろう。ただ「だめ」というよりは、「そんなことしたら痛いでしょう」、「欲しがってるでしょう」などと言った方が、Older には Younger の意図が理解しやすい。

そのうえ、Older は Younger の意図を理解することによって、否定的行動を今後自分の意志で抑制するかもしれない。このような意味では、当該の否定的相互作用を終結させることよりも、今後も否定的相互作用を出現させないようにすることの方が、母親にとっては重要なかもしれない。

2) 親和的相互作用

Older が Younger に対して示した親和的行動についての分析が行われた。

Older の親和的行動は、少ない被験者では 1 回、多い被験者でも 40 回しか観察されなかった。しかしながら、親和的行動の直前や直後には母親による調整行動がかなりの割合で観察された。Older の親和的行動を出現させるために、あるいは出現した親和的行動を持続させるために、母親は非常に興味深い行動を示した。

親和的行動の直前における調整行動の中では、Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動、Younger との関わりを促す発話、の 2 種類の行動がよく観察された。

前者の行動は、例えば「このブロックで遊びたいみたいよ」などの発話であるが、Younger の「アッ」とか「ウッ」とかいう音声に引き続いて出現することが多かった。すなわち、これは Younger の音声に対して母親の意味づけが行われていたことを表す。

一方、後者の行動は、Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動よりも

さらに直接的なものである。「これ、〇〇ちゃん (Younger の名前) に作ってあげて」などの発話がこれに該当する。

Older の親和的行動の頻度を増やすことが母親の希望だとすれば、母親は Younger との関わりを促す発話だけを行えばよいはずである。母親は、なぜ Younger の行動や内的状態を Older に説明するという行動を頻繁に示したのであろうか。

その理由として、次のような説明が考えられる。つまり、母親は、自分に言われた通り援助行動を示すことを、Older に望んでいるのではなく、自らの意志で親和的行動を示してくれることを期待しているのである。Younger の行動や内的状態を Older に説明するという行動は、Older の注意を Younger の方に向けるという効果だけでなく、Younger の内的状態に対する理解力を向上させる効果がある。Older は Younger に注目し、かつ母親から Younger の内的状態に関する説明を受けることによって、自分の意志で親和的行動を示したのである。

また、Younger の行動や内的状態を説明するという行動には、もう一つ大きな効果がある。つまり、このような行動を何度も繰り返し Older に対して示すことで、いずれ Older は、母親の説明を受けなくとも自分の目で Younger の様子を確認し、自分の意志で親和的行動を示すようになる可能性が高いということである。母親の立場からすれば、いちいち Younger の状態を Older に説明するのは大変である。しかしながら、それでも早晩 Older が自分の意志で親和的行動を示すようになってくれるのなら、母親にとってもそれは望ましいことだといえる。

Older の親和的行動の直後にはどのような調整行動が観察されたであろうか。

A と T では賞賛行動が観察された。これは Older の親和的行動を誉めるという

行動である。KとMでは Older の行動に関する Younger への発話が観察された。これは、例えば「お兄ちゃん、上手に作ってくれたね、すごいね」などの話しかけであるが、この発話は Older の耳にも届くので、間接的には Older への賞賛行動と同種のものといえるかもしれない。TとMでは Younger の行動や内的状態に関する発話が観察された。これは、具体的には「ほら、喜んでるよ」とか「笑ってるよ」などの発話であるが、こうした発話も、Older が示した行動が Younger に喜びをもたらしたことを伝えるという意味では一種の賞賛行動かもしれない。

ただ、最後に説明した Younger の行動や内的状態を Older に伝えるという行動が他の行動と大きく異なるのは、繰り返し述べているように、Younger の内的状態を Older に理解させようという母親の意図である。Older もまた、自分の行った行動に対して Younger が笑ったり喜んだりしていることに不快感を持ったりはしないはずである。むしろ、次回からは母親に促されなくとも、自分の意志で Younger に親和的行動を示そうと思うのではないだろうか。

3) Older から Younger への関心

否定的行動、親和的行動のような直接的な行動ではないにしろ、Older は Younger の行動や内的状態に対して明らかに関心を示す場合があった。これには、「ブロックで遊んでる」とか「笑ってる」などの具体的な発話だけでなく、単に Younger の様子を手で指し示すなどの行動も含まれた。そして、このような関心行動の直前や直後にも母親の調整行動が多く観察された。

Older が Younger に関心を示した直前に観察された調整行動はすべて、Younger の行動や内的状態に関する発話であった。これは、母親が Younger の行動や内的状態を説明してやることによって、Older の注意が Younger に向かい、

Younger に対する関心の度合いが高まったことを意味している。

一方、Older が Younger に対して関心を示した直後にも、母親は Younger の行動や内的状態に関する発話を頻繁に示した。これは、今 Younger の方に向かっている Older の注意を、なるべく持続させようという母親の意図を表している。

ただし、ここで注目すべきは、TとKでは、直後に Younger との関わりを促すような発話が観察された点である。これはおそらく、ただ単に Older から Younger への関心を維持させるだけでなく、その関心を親和的な行動へと導こうという母親の意図を表しているのであろう。すでに述べたように、Older が自分の意志で親和的な行動を示すようになってくれることを、母親が望んでいるのであれば、Younger に向かっている Older の関心をただ関心だけで終結させるのではなく、親和的な行動へと導こうという母親の意向は十分に理解できる。

3. Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動の機能

以上述べた結果から、Older の否定的行動や親和的行動あるいは Younger への関心などの直前や直後に、母親は Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動をよく示すことがわかった。

これまでは、子ども同士の関わりを中心に分析結果を示してきたが、以下では母親の調整行動を中心とした議論を行う。母親の調整行動がどのような場面で出現し、その後どのような状況になったかを論じることで、調整者としての母親の役割について考察する。

Younger の行動や内的状態を Older に説明する行動は、それ自体かなりの頻度で観察された。そして、この行動は、圧倒的に子ども同士が否定的な状態にあるときに生じることが多かった。特に、AとMにおいては、この行動の半数あるいはそれ以上が、子ども同士が否定的に関わっている場面で用いられていた。このことは、明らかに子どもの否定的相互作用を終結させる目的で、母親が Younger の行動や内的状態を説明しているのだということを意味している。

さらに、この行動には、すでに述べたように、ただ否定的相互作用を終わらせる機能だけでなく、否定的行動により Younger がどのような状態に至ったか、あるいはどう感じたかを理解させるという機能も含まれている。

個人差の問題を取り上げるなら、TとKでは、Younger の行動や内的状態を Older に伝える行動が、子ども同士の親和的な場面においてもよく観察されたことを述べなくてはならない。このことは、本来 Younger の行動や内的状態を説明するという行動に二通りの機能が存在することを示唆している。すなわち、否定的相互作用を終結させるという機能と親和的相互作用に正のフィードバックを与

えるという機能である。

Younger の行動や内的状態を Older に説明した直後の状況には個人差があった。しかしながら、この行動がどういった用いられ方をしていたかという問題と照らし合わせると、興味深い結果が見られた。

すなわち、AとMでは、この調整行動の直後に否定的相互作用が生じる場合が多かったが、親和的相互作用に対して正のフィードバックを与えることが多かったTとKに関しては、逆に親和的相互作用や Older から Younger への関心が喚起される場合が多かったのである。

AとMでは、Younger の行動や内的状態を説明する行動は、子ども同士の否定的場面では十分機能的に用いられていたが、親和性を亢進させるという機能は必ずしも活用されていなかったといえる。

まとめ

同時に二人の子どもの相手をするのは母親にとって想像以上に大変なことがある。Younger がまだ活動的でないとき、母親の言語的関わりかけの比重は圧倒的に Older の方に置かれていた。しかしながら、これは Younger との関係を非言語的な内容で補うことが可能だからであると推測された。

一方、Younger の活動量が増え、徐々に周囲の事物に関心が向くようになると、母親は比較的短い間隔で交互に両者と交渉を持ち、注意のバランスをうまく配分していることがわかった。

子ども同士の否定的な関わりは、最初の頃は母親の注意をめぐる嫉妬が原因となっていて、それ以降はブロックなどのものをめぐる取り合いが原因となって生じる

ことが多かった。そして、予想通り、このような否定的相互作用に対して、母親はかなりの割合で調整行動を示すことがわかった。しかもこのとき、母親は当該の否定的行動を解消するだけにとどまらず、以降の否定的行動が事前に抑制されるような調整の仕方をした。

子ども同士の親和性を高める調整行動の効果は、いずれの被験者でも共通に見られたわけではなかった。なぜ被験者によってこのような違いがあるのか。一つの可能性は Older の年齢である。本研究の被験者において、調整行動によって、Older の親和的行動が顕著に亢進されたのは、4 組中 2 組で、その 2 組では、Older と Younger の年齢差が 2 歳～2 歳半であった。したがって、Younger の行動や内的状態を説明するという行動が Older の親和的行動の出現に対して効果を発揮するのは、この年齢差のきょうだいだけなのかもしれない。

これらの疑問を解明するためには、Older の年齢についてもきちんと統制し、さらに被験者の数を増やして定量的な研究へと展開していく必要があるだろう。

第3章

幼児期のきょうだい関係に
関する横断的研究
—調整者としての母親の
役割を中心に—

目 的

本研究の目的は、幼児期のきょうだい関係に母親がどう関与しているかを明らかにすることである。母親の行動については二つの側面が取り上げられる。

一つは、子ども同士の関わりに直接影響するような行動である。一方の子ども
の注意を他方の子どもの方に向けたり、親和的に関わるよう促したりする行動、
あるいは逆に彼らの注意を分散させる行動などがこれに該当する。これらの行動
と子どものきょうだい関係との関連が分析される。

母親の行動における二つ目の側面は、子ども同士の関わりを直接的に規定する
ものではない。それぞれの子どもとどのような関わりを持つかという行動上の特
性が取り上げられる。このような行動特性が子どものきょうだい関係に影響して
いるかどうか分析される。

方 法

被験者

少なくとも2人の子どもがおり、かつ年少の子どもが幼児である家庭を探すために、まず研究の概要を記した書類を数人の知人に配布し、条件に該当する家庭を紹介してもらった。知人から紹介を受けた家庭には、観察者自身が改めて電話連絡し、詳細な手続きを再度口頭で説明した上で、研究への参加を依頼した。このうち、研究への参加を拒否した家庭はわずか(5~6例)であった。このようにして募った被験者の総数は40組であった。被験者の居住地は、大阪府、京都府、滋賀県、兵庫県、奈良県の2府3県であった。

被験者40組のなかには、2人きょうだいの家庭が38組、3人きょうだいの家庭が2組含まれていた。3人きょうだいの家庭に関しては、3人の子どものうち2人が被験者として選ばれた。年長の子ども(Older sibling; 以下「Older」と表記する)の年齢は5.43歳(2.90-8.70歳)、年少の子ども(Younger sibling; 以下「Younger」と表記する)の年齢は2.48歳(1.00-4.82歳)、きょうだい間の年齢差は2.95歳(1.49-5.52歳)であった。Olderの年齢、Youngerの年齢、きょうだい間の年齢差にはきょうだい構成による差はなかった(Olderの年齢： $F=0.911$, $n_1=3$, $n_2=36$; Youngerの年齢： $F=0.791$, $n_1=3$, $n_2=36$; きょうだい間の年齢差： $F=0.609$, $n_1=3$, $n_2=36$, いずれも ns)。Olderの年齢とYoungerの年齢との間には有意な正の相関があった($r=0.68$, $n=40$, $p<0.001$)。またOlderの年齢ときょうだい間の年齢差の間にも有意な正の相関があった($r=0.70$, $n=40$,

p<0.001) . Table 3-1 に被験者の詳細を記す. 母親の平均年齢は 31.6 歳 (25-45 歳) , 父親の平均年齢は 34.8 歳 (26-45 歳) であった.

家庭訪問の手続き

家庭訪問は, Older, Youngerがともに在宅し, かつ最も機嫌の良い時間帯に行われた. 観察者1名が家庭訪問を実施し, 母親, Older, Youngerによる三者遊び場面の観察と質問紙調査が行われた. 質問紙は, 日頃のきょうだい関係に関するものと子どもの気質に関するものの2種類であった. 遊び場面の観察と質問紙調査の順序はカウンターバランスされた. 家庭訪問の時間は1時間半から2時間であった. 被験者40組に対する総観察時間は831分であった. 家庭訪問の手続きの詳細をFigure 3-1に示す.

遊び場面の行動観察と行動カテゴリー

遊び場面の観察は, 日頃子どもたちがよく遊んでいる部屋で行われた. 母親, Older, Youngerの3人に, 観察者が持参したブロック (カワダ社, ダイヤブロック) を用いて20~30分間自由に遊んでもらった. このブロックで遊んだ経験のある子どもは1人もいなかった. 三者遊び場面の様子は, 約2m離れた位置に設置された8mmビデオカメラ (SONY製, Video8 Handycam) で撮影された. 観察者は被験者から約3m離れた位置に座り, 気のついたことをノートにメモした. 観察者は, 可能な限り被験者と相互作用を持たないよう心がけたが, 被験者の方から観察者へ話しかけがあった場合には, 不自然にならない程度に対応した.

子ども同士の相互作用に関するカテゴリー及び母親から子どもに対する行動に関するカテゴリーは, 撮影されたビデオテープを見ながら作成された. 子ども同士の相互作用には, 三者遊び場面のすべてのデータが用いられ, カテゴリー毎に

Table 3-1 被験者

	きょうだい構成				Total (n=40)	F (n ₁ =3, n ₂ =36)
	姉-妹 (n=8)	兄-弟 (n=13)	姉-弟 (n=10)	兄-妹 (n=9)		
Olderの年齢 (SD)	5.13 (1.23)	5.36 (1.49)	5.17 (1.41)	6.18 (1.77)	5.43 (1.48)	0.911
Youngerの年齢 (SD)	2.52 (1.27)	2.52 (0.99)	2.12 (0.67)	2.87 (1.39)	2.48 (1.06)	0.791
年齢差 (SD)	2.61 (1.06)	2.84 (0.95)	3.05 (1.12)	3.31 (1.32)	2.95 (1.08)	0.609

電話連絡

研究の概要を詳しく説明し家庭訪問の日時を決める。

家庭訪問 (1時間半～2時間)

1. 三者遊び場面の観察

母親, Older, Youngerの3人に参加してもらい, 観察者の持参したブロックを使って約20分間自由に遊んでもらう。
遊び場面の様子をビデオカメラで撮影する。

2. 質問紙調査

質問紙はいずれも母親に記入を依頼する。

(1) SRQ (Furman & Buhrmester, 1985)

日頃の子どものきょうだい関係に関する質問紙

(2) EAS (Buss & Plomin, 1984)

子どもの気質に関する質問紙

※注：遊び場面の観察と質問紙調査の順序はカウンターバランスされた。

終了

Figure 3-1 家庭訪問の手続き

生起頻度が求められた。子ども同士の相互作用に関するカテゴリーについて Table 3-2に示す。

母親から子どもに対する行動に関しては、2通りのデータが用いられた。第一は子ども同士の相互作用を調整する行動（以下、「調整行動」と表記する）、第二は子どもたちに相対したときの行動特性である。前者のデータには、三者遊び場面のすべてのデータが用いられ、カテゴリー毎の生起頻度が求められた。後者のデータには撮影されたビデオのうち10分間の映像が用いられ、カテゴリー毎に10秒間のワン・ゼロ法（Altmann, 1974）を用いてコーディングされた。各カテゴリーの定義及びコーディング方法についてTable 3-3, Table 3-4に詳細を示す。

質問紙

質問紙は、日頃のきょうだい関係を調べるためのもの（SRQ: Sibling Relationship Questionnaire）と子どもの気質を調べるためのもの（EAS）の2種類で、いずれも母親に記入を依頼した。

SRQ SRQは、Furman & Buhrmester（1985）が作成した質問紙で、実際の行動とも対応があることが他の研究で確かめられている（Stoneman & Brody, 1993）。「お子さんたちはどの程度言い争いをしますか?」、「お子さんたちは一緒にどこかへ行ったり、遊んだりすることがどの程度ありますか?」などの質問が48問あり、いずれも、「ほとんどない（1点）」から「とてもよくある（5点）」までの5段階で評定される。質問は16種類の下位項目からなり（Table 3-5）、各下位項目毎に質問が3問ずつ含まれている。得点は下位項目毎に算出された（SRQの質問項目については付表1を参照）。

EAS EASは、Buss & Plomin（1984）が考案したもので、子どもの気質を

Table 3-2 きょうだい間の相互作用に関するカテゴリー

きょうだい間の相互作用	定義	コーディング法
OlderからYoungerへの親和的行動	Youngerにブロックの作り方を教示したり、 ブロックを手渡したりする行動	生起頻度
OlderからYoungerへの否定的行動	Youngerからブロックを奪う、ブロックを投げつけるなどの行動 叩く、非難する、などの身体攻撃	”
YoungerからOlderへの非意図的邪魔行動	手を伸ばすなどして非意図的にOlderのブロック作りを邪魔する行動	”
YoungerからOlderへの参加	Olderが組み立てているものにブロックを積み重ねるなどして 親和的に参加する行動	”
YoungerからOlderへの否定的行動	Olderからブロックを奪う、ブロックを投げつけるなどの行動 叩く、非難する、などの身体攻撃	”

Table 3-3 母親の調整行動に関するカテゴリー(1)

行動	定義	コーディング法
(1) Olderに対する行動		
Youngerの行動に関する発話や行動	Youngerの行動をOlderに伝える行動 例：「○○ちゃん (Youngerの名前, 以下同様), あんなことしてるよ」 「(Youngerを指し示しながら) ほら」など	生起頻度
Youngerの内的状態に関する発話や行動	Youngerの感情や意図などをOlderに伝える行動 例：「○○ちゃん, お腹すいてきたのかなあ」 「このブロックが気に入ったみたいだね」など	”
共通の話題を提供する行動	Youngerに提示した話題と同じ話題をOlderに提供する行動 例：ブロックで飛行機を作ってYoungerに提示したあと, もう一つ別の飛行機を作ってOlderに提示する, など	”
Youngerとの関わりを促す発話や行動	Youngerに対して働きかけるようにOlderに仕向ける行動 例：「○○ちゃんがしてるのを手伝ってあげて」など	”
Youngerから注意を逸らす行動	Youngerに向かっている, あるいは向かいつつあるOlderの注意を逸らす行動 例：「あなたはこっちのおもちゃで遊んでなさい」, など	”

Table 3-3 母親の調整行動に関するカテゴリー(2)

行動	定義	コーディング法
(2) Youngerに対する行動		
Olderの行動に関する発話や行動	Olderの行動をYoungerに伝える行動 例：「お兄ちゃん，上手に作ったよ」 「(Olderを指し示しながら) ほら」など	生起頻度
Olderの内的状態に関する発話や行動	Olderの感情や意図などをOlderに伝える行動 例：「お兄ちゃん，機嫌悪いね，どうしたのかなあ」など	”
共通の話題を提供する行動	Olderに提示した話題と同じ話題をYoungerに提供する行動 例：ブロックでくるまを作ってOlderに提示したあと，もう一つ別のくるまを作り，「はい，〇〇ちゃん (Youngerの名前) もくるま」といいながら提示する，など	”
Olderとの関わりを促す発話や行動	Olderに対して働きかけるようにYoungerに仕向ける行動 例：「お兄ちゃんのところに行っておいで」など	”
Olderから注意を逸らす行動	Olderに向かっている，あるいは向かいつつあるYoungerの注意を逸らす行動 例：「あなたはこっちのおもちゃで遊んでなさい」， など	”

Table 3-4 母親の行動特性に関するカテゴリー

行動 ^a	定義	コーディング法
賞賛	子どもの行動や発話に対して賞賛したり，驚嘆したりする行動 例：「上手にできたねえ」，「すごいねえ」，頭をなでてやる，など	10秒毎ワン・ゼロ法 ^b
援助	ブロックを組み立てるのを手伝ったり，そのやり方を説明したりする行動 例：「これは縦につなげたらうまくくっつくのよ」など	”
方向づけ	遊びの流れを作るなどして子どもを導く行動 例：「これは動物園にしよう」，「あそこの丸いブロック取ってきて」など	”
問合わせ	子どもの内的状態を問合わせる行動 例：「これはここにくっつけたいの？」，「緑色の方がいいの？」など	”
提示	ブロックを提示するなどして，子どもの注意を引きつける行動 例：「ほら，これみてごらん」，特定のブロックを指し示す，など	”

^a Olderに向けられたもの，Youngerに向けられたもの，それぞれについてコーディングした

^b Altmann (1974)による

Table 3-5 SRQの質問内容^a

質問項目	質問内容
1 Prosocial	きょうだい間の向社会性
2 Maternal partiality	母親による支援 ^b
3 Nurturance of younger	OlderからYoungerへの世話
4 Nurturance by younger	YoungerからOlderへの世話
5 Dominance of younger	Olderの優位性
6 Dominance by younger	Youngerの優位性
7 Paternal partiality	父親による支援 ^b
8 Affection	きょうだい間の愛情性
9 Companionship	きょうだい間の友好性
10 Antagonism	きょうだい間の敵対心
11 Similarity	きょうだい間の類似性
12 Intimacy	きょうだい間の親密性
13 Competition	きょうだい間の競争性
14 Admire of younger	OlderからYoungerへの賞賛
15 Admire by younger	YoungerからOlderへの賞賛
16 Quarreling	きょうだい間の不和

^a SRQは日頃のきょうだい関係を調査するための質問紙で
Furman & Buhrmester (1985) が考案した

^b 得点が高いほど母親（父親）からYoungerへの支援の度合いが大きいことを示す

調べるための尺度である。EASは20問からなり、子どもの情動性 (Emotionality) , 活動性 (Activity) , 社会性 (Sociability) , 内向性 (Shyness) が測定される。これらの尺度のうち、社会性と内向性との間には負の相関があることが確かめられており、先行研究では内向性を除く3つの尺度が用いられることが多い (例えば, Stoneman & Brody, 1993) 。したがって、本研究においても情動性、活動性、社会性の3つの尺度が分析に用いられた。母親に記入を依頼し、「感情的な方だ (情動性) 」, 「朝起きるとすぐに走り回る (活動性) 」, 「1人であるより誰かと遊んでいる方が好きだ (社会性) 」などの質問に対して、「全く当てはまらない (1点) 」から「よく当てはまる (5点) 」までの5段階で評定してもらった。Older, Youngerそれぞれに対して、情動性得点、活動性得点、社会性得点が算出された (EASの質問項目については付表2を参照) 。

分析方法

被験者によって観察時間にはばらつきがあった。したがって、三者遊び場面でのきょうだい間の相互作用及び母親の調整行動に関しては、各カテゴリーの生起頻度を20分あたりの数値に換算したものが分析に用いられた。母親の行動特性に関しては、カテゴリー毎の生起率が求められ、全カテゴリーの生起率を元に主成分分析が行われた。他の変数との関連を分析するには各因子の因子スコアが用いられた。

SRQの分析に関しては、Table 3-5に示した16下位項目のそれぞれの得点を元にした最尤因子分析が行われ、バリマックス回転が施された。抽出された因子の因子スコアが分析に用いられた。EASに関しては、情緒性得点、活動性得点、社会性得点そのまま分析に用いられた。

それぞれの変数ときょうだい構成との関連を調べるためには、一元配置の分散分析が用いられた。それ以外の分析では主に相関係数、偏相関係数が検定に用いられた。すべての統計的検定にはStatistica (StatSoft社) が用いられた。

結 果

第1節 子ども同士の相互作用と他の変数との関連性

本節では、きょうだい間の相互作用（Older から Younger に対する親和的行動、Older から Younger に対する否定的行動、Younger から Older に対する非意図的邪魔行動、Younger から Older への参加、Younger から Older に対する否定的行動）と

1. きょうだい構成
2. 子どもの年齢やきょうだい間の年齢差
3. 子どもの気質
4. 母親の行動
 - 1) 母親による調整行動
 - 2) 母親の行動特性

の各変数との関連を分析する。

Table 3-6 に示すように、Older から Younger に対する否定的行動と Younger から Older に対する非意図的邪魔行動との間には有意な正の相関があったが ($r=0.68, n=40, p<0.001$) , その他の相互作用同士には相関がなかった。

Table 3-6 きょうだい間の相互作用間の相関

きょうだい間の相互作用	1	2	3	4	5
1. Olderの親和的行動	1.00				
2. Olderの否定的行動	0.01	1.00			
3. Youngerの非意図的邪魔行動	0.01	0.68 ***	1.00		
4. Youngerの参加	0.27	0.29	0.23	1.00	
5. Youngerの否定的行動	0.06	0.18	-0.03	-0.27	1.00

注：数値は相関係数を表す

*** $p < 0.001$

1. きょうだい構成との関連性

きょうだい間の相互作用の生起頻度がきょうだい構成によって異なるかどうかを分析した (Table 3-7) . Younger が Older の遊びに参加する行動に関しては、きょうだい構成による差が有意で ($F=2.808$, $n_1=3$, $n_2=36$, $p<0.05$) , Tukey の下位検定の結果, 兄を持つ女兒 (表中の兄一妹) に比べて兄を持つ男児 (兄一弟) の方が有意に高い値を示した ($p<0.05$) .

Older から Younger に対する親和的行動, Older から Younger に対する否定的行動, Younger から Older に対する非意図的邪魔行動, Younger から Older に対する否定的行動に関しては、きょうだい構成との関連は見られなかった.

2. 子どもの年齢やきょうだい間の年齢差との関連性

きょうだい間の相互作用が Older の年齢, Younger の年齢, きょうだい間の年齢差と関連があるかどうかを分析した (Table 3-8) . Older から Younger に対する親和的行動は, Older, Younger の年齢と有意な正の相関が見られた (Older の年齢との相関 : $r=0.42$, $p<0.01$; Younger の年齢との相関 : $r=0.35$, $p<0.05$, いずれも $n=40$) . Younger から Older に対する非意図的邪魔行動は, Younger の年齢と有意な負の相関が認められた ($r=-0.45$, $n=40$, $p<0.01$) . Older から Younger に対する否定的行動, Younger から Older への参加, Younger から Older に対する否定的行動に関しては、子どもの年齢やきょうだい間の年齢差とは有意な相関は認められなかった.

Table 3-7 きょうだい間の相互作用ときょうだい構成との関連性

きょうだい間の相互作用	きょうだい構成				Total (n=40)	F (n ₁ =3, n ₂ =36)
	姉-妹 (n=8)	兄-弟 (n=13)	姉-弟 (n=10)	兄-妹 (n=9)		
Olderの親和的行動	6.46	7.60	4.53	5.22	6.05	0.815
Olderの否定的行動	6.78	9.33	7.72	8.04	8.12	0.292
Youngerの邪魔	4.83	5.49	6.22	3.69	5.20	0.293
Youngerの非意図的邪魔行動	3.86 _{a, b}	10.12 _a	4.34 _{a, b}	2.10 _b	5.68	2.808*
Youngerの否定的行動	2.84	1.13	1.70	1.85	1.77	1.117

注：数値は20分あたりの生起頻度を表す

* p<0.06

a>b: Tukeyの下位検定, p<0.05

Table 3-8 きょうだい間の相互作用と子どもの年齢・年齢差との関連性

きょうだい間の相互作用	Olderの年齢	Youngerの年齢	年齢差
Olderの親和的行動	0.42	0.35 *	0.23
Olderの否定的行動	-0.16	-0.26	0.04
Youngerの非意図的邪魔行動	-0.19	-0.45 **	0.18
Youngerの参加	-0.03	0.11	-0.14
Youngerの否定的行動	0.17	0.29	-0.06

注：数値は相関係数を表す

* $p < 0.05$

** $p < 0.01$

3. 子どもの気質との関連性

1) 気質間の関連

Older, Younger それぞれの情緒性, 活動性, 社会性に関して, 各得点間の関連性を分析した (Table 3-9) . Older の情緒性得点と Younger の情緒性得点の間には有意な正の相関が見られた ($r=0.39, n=40, p<0.05$) . Older の情緒性得点と Younger の社会性得点の間には有意な正の相関があった ($r=0.33, n=40, p<0.05$) . Older の活動性得点と Older の社会性得点の間には有意な正の相関があった ($r=0.40, n=40, p<0.05$) . Older の社会性得点と Younger の社会性得点との間には正の有意な相関があった ($r=0.32, n=40, p<0.05$) . Younger の活動性得点と Younger の社会性得点との間には有意な正の相関があった ($r=0.39, n=40, p<0.05$) .

2) 子どもの気質がきょうだい間の相互作用に及ぼす影響

きょうだい間の相互作用と Older, Younger それぞれの気質得点との相関を分析した (Table 3-10) . Older から Younger に対する親和的行動は, Older の情緒性得点, Younger の情緒性得点のそれぞれと有意な負の相関があった (Older の情緒性得点との相関 $r=-0.35, n=40, p<0.05$; Younger の情緒性得点との相関 $r=-0.31, n=40, p=0.05$) . Younger から Older に対する否定的行動は, Older の活動性得点と有意な正の相関があった ($r=0.33, n=40, p<0.05$) . Older から Younger に対する否定的行動, Younger から Older に対する非意図的邪魔行動, Younger から Older への参加に関しては, Older, Younger の気質得点との相関は認められなかった.

Table 3-9 気質得点間の関連性

子どもの気質	1	2	3	4	5	6
1. Olderの情緒性	1.00					
2. Olderの活動性	0.08	1.00				
3. Olderの社会性	-0.02	0.40 *	1.00			
4. Youngerの情緒性	0.39 *	-0.01	0.28	1.00		
5. Youngerの活動性	0.21	0.19	0.09	-0.11	1.00	
6. Youngerの社会性	0.32 *	0.13	0.31 *	0.03	0.39 *	1.00

注：数値は相関係数を表す

* $p < 0.05$

Table 3-10 きょうだい間の相互作用と気質得点との関連性

きょうだい間の相互作用	子どもの気質					
	情緒性(O)	活動性(O)	社会性(O)	情緒性(Y)	活動性(Y)	社会性(Y)
Olderの親和的行動	-0.35 *	0.11	-0.14	-0.31 *	-0.06	-0.29
Olderの否定的行動	0.24	0.27	0.04	-0.02	0.25	0.13
Youngerの非意図的邪魔行動	0.05	-0.06	0.04	0.12	0.20	0.02
Youngerの参加	-0.10	-0.05	0.05	0.09	-0.07	-0.08
Youngerの否定的行動	0.06	0.33 *	0.08	-0.18	-0.12	-0.11

注：数値は相関係数を表す

O: Older

Y: Younger

* $p < 0.05$

4. 母親の行動との関連性

1) 母親による調整行動との関連性

主成分分析の適用

母親による調整行動に関しては 40 組すべてのデータが用いられた。各調整行動の 20 分あたりの生起頻度を元に、主成分分析を行った結果、固有値が 1.0 を超える因子が 3 つ抽出された (Table 3-11)。第 1 因子、第 2 因子、第 3 因子それぞれの寄与率は 32.72%、16.22%、11.96%で、累積寄与率は 60.90%であった。

各因子の命名

第 1 因子において因子負荷量が高かったのは、高い方から順に、Younger の行動に関する発話や行動 (0.772)、Younger との関わりを促す発話や行動 (0.763)、Older の内的状態に関する発話や行動 (0.738)、Younger の内的状態に関する発話や行動 (0.702)、Older との関わりを促す発話や行動 (0.681)、Older の行動に関する発話や行動 (0.634) の 6 つの行動であった。これらはいずれも、一方の子どもから他方の子どもへの注意を高め、相互作用を促進するような行動である。したがって、この因子は「Older と Younger を引き合わせる行動」と命名された (便宜上、以降の分析では「CONTROL 1」と表記する)。

第 2 因子において因子負荷量が高かったのは、Older から注意を逸らす行動 (0.777)、Younger から注意を逸らす行動 (0.777) で、いずれも子ども同士の注意を分散させるために用いられる行動であった。したがって、この因子は「Older と Younger を引き離す行動」と命名された (以降の分析では「CONTROL 2」と表記する)。

第 3 因子において因子負荷量が高かったのは、共通の話題を Older に提供する

Table 3-11 母親の調整行動に関する主成分分析の結果

母親の調節行動	因子		
	1	2	3
(1) Youngerに対する行動			
1. Olderの行動に関する発話や行動	<u>0.634</u>	0.168	-0.466
2. Olderの内的状態に関する発話や行動	<u>0.738</u>	-0.170	-0.338
3. 共通の話題をYoungerに提供する行動	0.164	-0.126	<u>-0.672</u>
4. Olderとの関わりを促す発話や行動	<u>0.681</u>	0.280	-0.193
5. Olderから注意を逸らす行動	0.056	<u>0.777</u>	0.114
(2) Olderに対する行動			
1. Youngerの行動に関する発話や行動	<u>0.772</u>	-0.095	0.144
2. Youngerの内的状態に関する発話や行動	<u>0.702</u>	-0.373	0.057
3. 共通の話題をOlderに提供する行動	0.075	0.089	<u>0.743</u>
4. Youngerとの関わりを促す発話や行動	<u>0.763</u>	0.199	0.067
5. Youngerから注意を逸らす行動	-0.057	<u>0.777</u>	0.037
固有値	3.27	1.62	1.20
寄与率(%)	32.72	16.22	11.96
累積寄与率(%)	32.72	48.94	60.90

注1：数値は因子負荷量を表す

注2：下線部は因子負荷量が0.500を超えるもの

行動 (0.743) と共通の話題を Younger に提供する行動 (-0.672) であった。一方の子どもに対して他方の子どもと共通の話題を提供するという行動は、子ども同士の相互作用を直接的に促進するものではない。むしろ、母親と一方の子どもとの相互作用に他方の子どもを導き入れようとする意味合いが強い。この因子においては、Older に向けられたものが高い正の値を示しているのに対して、Younger に向けられたものは高い負の値を示していた。したがって、この因子は母親と Younger の相互作用が進行している場面では Older をそこに導き入れ、母親と Older の相互作用が進行している場合には Younger を導き入れない、という特徴を現していると考えられる。以上のような理由で、この因子は「母親と Younger の相互作用に Older を導き入れる行動」と命名された（以降の分析では「CONTROL 3」と表記する）。

① 母親による調整行動ときょうだい構成との関連性

母親による調整行動ときょうだい構成との関連を明らかにするために、CONTROL 1, CONTROL 2, CONTROL 3 のそれぞれの因子スコアを元に分散分析を行った (Table 3-12)。その結果、CONTROL 1~3 のいずれの因子に関しても、きょうだい構成による有意な違いは認められなかった (CONTROL 1 : $F=0.362$, $n_1=3$, $n_2=36$; CONTROL 2 : $F=1.128$, $n_1=3$, $n_2=36$; CONTROL 3 : $F=0.265$, $n_1=3$, $n_2=36$, いずれも ns)。

② 母親による調整行動とその他の変数との関連性

CONTROL 1, CONTROL 2, CONTROL 3 の各因子スコアとその他の変数(子どもの年齢, 気質) との関連を分析した (Table 3-13)。その結果、CONTROL 2 に関しては、Younger の年齢との間に有意な負の相関が見られた ($r=-0.32$,

Table 3-12 母親の調整行動と子どものきょうだい構成との関連性

母親の 調整行動	きょうだい構成				F ($n_1=3$, $n_2=36$)
	姉-妹 ($n=8$)	兄-弟 ($n=13$)	姉-弟 ($n=10$)	兄-妹 ($n=9$)	
CONTROL 1	0.276	-0.194	0.054	-0.034	0.362
CONTROL 2	-0.281	-0.269	0.344	0.245	1.128
CONTROL 3	-0.231	-0.004	0.193	-0.029	0.265

注1：数値は因子得点を表す

注2：CONTROL 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

Table 3-13 母親の調整行動と子どもの年齢・気質との関連性

母親の 調整行動	年齢		Olderの気質			Youngerの気質		
	Olderの年齢	Youngerの年齢	情緒性	活動性	社会性	情緒性	活動性	社会性
CONTROL 1	-0.01	-0.31	-0.04	0.05	-0.01	-0.13	0.21	-0.26
CONTROL 2	-0.21	-0.32 *	0.34 *	-0.13	-0.08	-0.12	0.11	0.14
CONTROL 3	0.08	0.07	-0.10	0.05	0.20	-0.02	0.05	0.21

注1：数値は相関係数を表す

注2：CONTROL 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

* p<0.05

n=40, p<0.05) . また, CONTROL 2 は, Older の情緒性得点との間にも有意な正の相関が見られた (r=0.34, n=40, p<0.05) . CONTROL 1, CONTROL 3 に関しては, 子どもの年齢や気質得点との間に相関が認められなかった.

③ 母親による調整行動がきょうだい間の相互作用に及ぼす影響

CONTROL 1~3 のそれぞれの因子スコアときょうだい間の相互作用との間の関連を分析した (Table 3-14) . その結果, Older から Younger に対する親和的行動は, CONTROL 1 との間に有意な正の相関が認められた (r=0.39, n=40, p<0.05) . Older から Younger に対する否定的行動は, CONTROL 2 との間に有意な正の相関が見られた (r=0.58, n=40, p<0.001) . Younger から Older に対する非意図的邪魔行動は, CONTROL 1 及び CONTROL 2 との間に有意な正の相関が認められた (CONTROL 1 : r=0.40, n=40, p<0.01; CONTROL 2 : r=0.41, n=40, p<0.01) . Younger から Older への参加, Younger から Older に対する否定的行動に関しては, 母親による調整行動との相関は認められなかった.

2) 母親行動特性との関連性

Older, Younger と相対したときの母親の行動特性に関しては, 被験者 40 組中 33 組のデータが用いられた. この 33 組に関して, Older の年齢は 5.20 歳 (2.90 - 7.92 歳) , Younger の年齢は 2.39 歳 (1.00 - 4.76 歳) , きょうだい間の年齢差は 2.81 歳 (1.50 - 5.51 歳) であった. Older の年齢, Younger の年齢, きょうだい間の年齢差にはきょうだい構成による差はなかった (Older の年齢 : F=0.929, n₁=3, n₂=29; Younger の年齢 : F=0.502, n₁=3, n₂=29; きょうだい間の年齢差 : F=1.171, n₁=3, n₂=29, いずれも ns) .

Table 3-14 きょうだい間の相互作用と母親の調整行動との関連性

きょうだい間の相互作用	調整行動		
	CONTROL 1	CONTROL 2	CONTROL 3
Olderの親和的行動	0.39 *	-0.25	0.03
Olderの否定的行動	0.15	0.58 ***	-0.02
Youngerの非意図的邪魔行動	0.40 **	0.41 **	0.15
Youngerの参加	-0.16	-0.10	0.02
Youngerの否定的行動	-0.06	0.19	0.01

注1：数値は相関係数を表す

注2：CONTROL 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

* p<0.05

** p<0.01

*** p<0.001

主成分分析の適用

母親の行動特性は、その相手 (Older, Younger) と行動項目 (賞賛, 援助, 方向づけ, 問い合わせ, 提示) により 10 種類に分けられた。これらの 10 種類の行動を元に主成分分析を行った結果、固有値が 1.0 を超える因子が 3 つ抽出され、それぞれの寄与率は 25.35%, 21.22%, 15.99%であった (Table 3-15)。第 3 因子までの累積寄与率は 62.56%であった。

各因子の命名

第 1 因子において因子負荷量が高かったのは、高い方から順に Younger への援助 (0.879), Younger への提示 (0.839), Younger への方向づけ (0.521) であった。全体的に、Older に向けられたものより Younger に向けられたものの方が高い因子負荷量を示しているため、この因子は「Younger に対する積極的な働きかけ」と命名された (便宜上、以降の分析では「MOTHER 1」と表記する)。

第 2 因子において因子負荷量が高かったのは、高い方から順に Older への方向づけ (0.899), Older への問い合わせ (0.748), Older への提示 (0.707) であった。全体的に、Younger に向けられたものより Older に向けられたものの方が高い因子負荷量を示していることから、この因子は「Older に対する積極的な働きかけ」と命名された (以降の分析では「MOTHER 2」と表記する)。

第 3 因子において因子負荷量が高かったのは、高い方から順に Younger への問い合わせ (0.643), Older への賞賛 (0.641), Older への援助 (-0.625), Younger への賞賛 (0.535) であった。この因子は解釈がやや難しく、相対的に Younger の方とよく関わることを表す行動特性と子どもを誉めるという行動特性を統合したような因子だと考えられる。そこで、第 3 因子はそのまま「Younger

Table 3-15 母親の行動特性に関する主成分分析の結果

母親の行動特性	因子		
	1	2	3
Olderへの賞賛	-0.328	0.254	<u>0.641</u>
Youngerへの賞賛	0.056	-0.285	<u>0.535</u>
Olderへの援助	-0.260	0.270	<u>-0.625</u>
Youngerへの援助	<u>0.879</u>	0.014	0.061
Olderへの方向づけ	0.099	<u>0.899</u>	-0.049
Youngerへの方向づけ	<u>0.521</u>	0.463	0.265
Olderへの問合わせ	0.010	<u>0.748</u>	0.365
Youngerへの問合わせ	0.222	0.148	<u>0.643</u>
Olderへの提示	0.034	<u>0.707</u>	-0.476
Youngerへの提示	<u>0.839</u>	0.093	-0.037
固有値	2.54	2.12	1.60
寄与率(%)	25.35	21.22	15.99
累積寄与率(%)	25.35	46.58	62.56

注1：数値は因子負荷量を表す

注2：下線部は因子負荷量が0.500を超えるもの

との相対的関わりと賞賛」と命名することにした（以降の分析では「MOTHER 3」と表記する）。

① 母親の行動特性ときょうだい構成との関連性

主成分分析によって抽出された MOTHER 1, MOTHER 2, MOTHER 3 の 3 つの因子の因子スコアときょうだい構成との関連を分散分析を用いて検討した (Table 3-16) 。 その結果, MOTHER 1 に関してはきょうだい構成による違いが認められ ($F=3.578, n_1=3, n_2=29, p<0.05$) , Tukey の下位検定により, 兄を持つ男児 (表中の兄一弟) よりも兄を持つ女児 (兄一妹) の方が因子スコアが有意に高かった ($p<0.05$) 。 MOTHER 2, MOTHER 3 の因子スコアに関しては, きょうだい構成による違いが認められなかった。

② 母親の行動特性とその他の変数との関連性

MOTHER 1, MOTHER 2, MOTHER 3 のそれぞれの因子スコアとその他の変数 (子どもの年齢, 気質) との相関を分析した (Table 3-17) 。 MOTHER 1 ~3 の因子スコアと子どもの年齢との間には有意な相関関係は認められなかった。

子どもの気質得点との間には以下のような相関が得られた。 MOTHER 2 と Older の活動性得点との間には有意な負の相関があった ($r=-0.45, n=33, p<0.01$) 。 また, MOTHER 3 と Younger の活動性得点との間には有意な負の相関があった ($r=-0.37, n=33, p<0.05$) 。

③ 母親の行動特性がきょうだい間の相互作用に及ぼす影響

きょうだい間の相互作用と MOTHER 1, MOTHER 2, MOTHER 3 の各因子スコアとの相関を分析した (Table 3-18) 。 その結果, Older から Younger に対する親和的行動は, MOTHER 2 と有意な負の相関があった ($r=-0.35, n=33,$

Table 3-16 母親の行動特性と子どものきょうだい構成との関連性

母親の行動 特性	きょうだい構成				F ($n_1=3, n_2=29$)
	姉-妹 (n=7)	兄-弟 (n=12)	姉-弟 (n=8)	兄-妹 (n=6)	
MOTHER 1	-0.021 _{a, b}	-0.478 _a	-0.008 _{a, b}	0.991 _b	3.578*
MOTHER 2	0.234	-0.052	0.160	-0.383	0.475
MOTHER 3	0.337	-0.474	0.253	0.217	1.498

注1：数値は因子得点を表す

注2：MOTHER 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

* $p < 0.05$

a>b: Tukeyの下位検定, $p < 0.05$

Table 3-17 母親の行動特性と子どもの年齢・気質との関連性

母親の行動 特性	年齢		Olderの気質			Youngerの気質		
	Olderの年齢	Youngerの年齢	情緒性	活動性	社会性	情緒性	活動性	社会性
MOTHER 1	0.24	0.03	0.05	0.11	0.02	-0.19	0.04	0.08
MOTHER 2	-0.28	-0.07	-0.01	-0.45 **	-0.23	0.12	-0.15	-0.13
MOTHER 3	-0.12	-0.05	-0.04	-0.21	0.18	0.14	-0.37 *	-0.04

注1：数値は相関係数を表す

注2：MOTHER 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

* p<0.05

** p<0.01

Table 3-18 きょうだい間の相互作用と母親の行動特性との関連性

きょうだい間の相互作用	母親の行動特性		
	MOTHER 1	MOTHER 2	MOTHER 3
Olderの親和的行動	-0.12	-0.35 *	0.17
Olderの否定的行動	-0.04	-0.21	-0.24
Youngerの非意図的邪魔行動	-0.08	-0.06	-0.09
Youngerの参加	-0.49 **	0.21	0.04
Youngerの否定的行動	0.15	-0.31	-0.21

注1：数値は相関係数を表す

注2：MOTHER 1～3は主成分分析の結果得られた因子を表す（詳しくは本文に記載）

* p<0.05

** p<0.01

p<0.05) . また, Younger が Older の遊びに参加する行動は, MOTHER 1 と有意な負の相関があった ($r=-0.49$, $n=33$, $p<0.01$) . Older から Younger に対する否定的行動, Younger から Older に対する非意図的邪魔行動, Younger から Older に対する否定的行動に関しては, MOTHER 1~3 の各因子スコアとの相関が認められなかった.

第2節 子ども同士の相互作用に対する母親の行動の関与

前節では、三者遊び場面でのきょうだい間の相互作用と他の変数との関連性を分析した（得られた結果の概要を Table 3-19 に示す）。しかしながら、これまでの分析では、変数間の関連については一切述べなかった。そこで本節では、きょうだい間の相互作用の一つ一つに焦点を当て、変数間の関連も考慮に入れながら、主に母親の行動が個々のきょうだい間の相互作用に及ぼす影響を分析する。

1. Older から Younger に対する親和的行動

Table 3-8 に示したとおり、Older から Younger に対する親和的行動は、Older の年齢や Younger の年齢と正の相関があった。しかしながら、本研究の被験者に関して、Younger の年齢と Older の年齢との間に有意な正の相関があった（71 ページ）。そこで、Older の年齢の影響を排除した上で、Older の親和的行動と Younger の年齢との偏相関係数を算出したところ、有意性は消失した（偏相関係数 $r=0.08$, $n=40$, ns）。

Older から Younger に対する親和的行動は、また Older の情緒性得点、Younger の情緒性得点と有意な負の相関が見られた。しかしながら、Table 3-9 に示したように、Older の情緒性得点と Younger の情緒性得点の間には、有意な正の相関が認められた。そこで、Older の情緒性得点の影響を排除した上で、Younger の情緒性得点と Older の親和的行動との偏相関係数を算出したところ、その有意性は消失した（偏相関係数 $r=-0.20$, $n=40$, ns）。さらに、Older の年齢は Older の情緒性得点と負の相関があったので（ $r=-0.41$, $n=40$, $p<0.01$ ）、Older の年齢

Table 3-19 きょうだい間の相互作用と他の変数との関連性

きょうだい間の相互作用	Sibling Status ^a	子どもの気質	母親の行動	
			調節行動	行動特性
Olderの親和的行動	Olderの年齢 (+)	Olderの情緒性 (-)	CONTROL 1 (+)	MOTHER 2 (-)
	Youngerの年齢 (+)	Youngerの情緒性 (-)		
Olderの否定的行動	-	-	CONTROL 2 (+)	-
Youngerの非意図的邪魔行動	Youngerの年齢 (-)	-	CONTROL 1 (+)	-
			CONTROL 2 (+)	
Youngerの参加	きょうだい構成	-	-	MOTHER 1 (-)
Youngerの否定的行動	-	Olderの活動性(+)	-	-

注：CONTROL 1～3, MOTHER 1～3の詳細については本文を参照のこと

(+)： 正の相関があったことを表す

(-)： 負の相関があったことを表す

^a 子どもの年齢・年齢差・きょうだい構成を総称している (Stewart, Mobley, Van Tuyl, & Salvador, 1987)

の影響を排除したうえで、Older の情緒性得点と親和的行動との偏相関係数を算出した。その結果、この有意性は消失した（偏相関係数 $r=-0.21$, $n=40$, ns）。

Older から Younger に対する親和的行動は、CONTROL 1 との間に有意な正の相関が認められた。Older の年齢の影響を排除した場合の Older の親和的行動と CONTROL 1 との間の偏相関係数を算出したところ、その有意性は保持された（偏相関係数 $r=0.43$, $n=40$, $p<0.01$ ）。

Older から Younger に対する親和的行動は、また MOTHER 2 との間に有意な負の相関が認められた (Table 3-18)。Older の年齢の影響を排除した場合の Older の親和的行動の頻度と MOTHER 2 との偏相関係数を計算したところ、その有意性は消失した（偏相関係数 $r=-0.24$, $n=33$, ns）。

2. Older から Younger に対する否定的行動及び Younger から Older に対する非意図的邪魔行動

Older から Younger に対する否定的行動は、Younger から Older に対する非意図的邪魔行動と有意な正の相関があった (Table 3-6)。Younger から Older に対する非意図的邪魔行動は、CONTROL 2 との間に有意な正の相関が見られた。さらに、Older から Younger に対する否定的行動もまた、CONTROL 2 との間に有意な正の相関があった (Table 3-14)。したがって、Younger から Older に対する非意図的邪魔行動の影響を排除した上で、Older から Younger への否定的行動と CONTROL 2 との偏相関を算出した。その結果、有意性は保持されることがわかった（偏相関係数 $r=0.45$, $n=40$, $p<0.01$ ）。しかしながら、Older の否定的行動の影響を排除した場合の Younger の非意図的邪魔行動と CONTROL 2

との間の偏相関係数を算出したところ、その有意性は消失した（偏相関係数 $r=0.04$, $n=40$, ns）。

Younger から Older に対する非意図的邪魔行動は、Younger の年齢との間に有意な負の相関があった。また、この行動は CONTROL 1 との間に有意な正の相関があった。Younger の年齢の影響を排除した場合の Younger の非意図的邪魔行動と CONTROL 1 との間の偏相関係数を計算したところ、その有意性は保持されることがわかった（偏相関係数 $r=0.31$, $n=40$, $p=0.05$ ）。

次に、Younger の年齢の影響を排除した場合の Younger の非意図的邪魔行動と CONTROL 2 との間の偏相関係数を算出したところ、その有意性は保持された（偏相関係数 $r=0.32$, $n=40$, $p<0.05$ ）。

3. Younger から Older への参加

Younger が Older の遊びに参加する行動は、きょうだい構成によって異なり、兄を持つ男児（兄一弟）よりも兄を持つ女児（兄一妹）の方が有意に少なかった。またこの行動は、MOTHER 1 との間に負の相関があった。MOTHER 1 はきょうだい構成との関連があり、しかも M-M よりも M-F の方が有意に少なかった（Table 3-16）, Younger から Older への参加に及ぼすきょうだい構成や MOTHER 1 の影響は相補的なものであった。

4. Younger から Older に対する否定的行動

Younger から Older に対する否定的行動は、Older の活動性得点との間に有意な正の相関が見られた。その他の変数とは何ら関連が認められなかった。

第3節 子どもの各年齢段階における母親の調整行動ときょうだい間の相互作用との関連性

以上の結果から、三者遊び場面でのきょうだい間の相互作用に及ぼす母親の行動の影響としては、全体としての行動特性よりもむしろ、調整行動が重要であることが明らかになった。本節では、調整行動の中でも、CONTROL 1 と CONTROL 2 に注目し、子どもの各年齢段階において、きょうだい間の相互作用に及ぼす影響に注目する。

CONTROL 1 と CONTROL 2 は互いに拮抗する行動であるが、それぞれが各年齢段階においてどの程度生じるのか、またその効果がどの程度あるのかを分析することによって、きょうだい間の相互作用を調整する母親の役割の発達的な変化が明らかになる。そこで、Younger の年齢を基準として、被験者を3つのグループ（低 Younger 群、中 Younger 群、高 Younger 群）に分類した。

低 Younger 群は、Younger の年齢が全体の平均値 $-1/2$ SD 以下のグループ（ $n=16$ ）、中 Younger 群は、Younger の年齢が平均値 $-1/2$ SD 以上で、かつ平均値 $+1/2$ SD 以下のグループ（ $n=13$ ）、高 Younger 群は、Younger の年齢が平均値 $+1/2$ SD 以上のグループであった（ $n=11$ ）。各群における Younger の年齢の平均は、それぞれ 1.59 歳（1.00–1.92 歳）、2.28 歳（1.96–2.76 歳）、4.00 歳（3.06–4.82 歳）で、Older の年齢の平均は、それぞれ 4.32 歳（2.90–6.07 歳）、5.54 歳（3.86–7.10 歳）6.90 歳（5.60–8.70 歳）であった。分散分析により、Younger の年齢、Older の年齢のいずれに関しても、3 群間には有意な差が認められた（Younger の年齢： $F=134.74$, $n_1=2$, $n_2=37$, $p<0.001$ ；Older の年齢：

$F=19.30, n_1=2, n_2=37, p<0.001$) .

各年齢段階において、Older から Younger に対する親和的行動及び Younger から Older に対する非意図的邪魔行動が CONTROL 1, CONTROL 2 のそれぞれと関連があるかどうかを分析した (Table 3-20) . また、Younger から Older に対する非意図的邪魔行動と Older から Younger に対する否定的行動との相関、Older から Younger への否定的行動と Younger から Older への否定的行動との相関、さらには、Older の否定的行動と CONTROL 2 との相関が各年齢段階において維持されるかどうかを分析した (Table 3-21) . 各年齢段階毎の特徴を以下に述べる.

低 Younger 群

低 Younger 群においては、CONTROL 1 と Older の親和的行動の頻度との間に有意な正の相関が見られた ($r=0.72, n=16, p<0.01$) . また、CONTROL 1 と Younger から Older に対する非意図的邪魔行動との間にも有意な正の相関があった. CONTROL 2 と Older の親和的行動との間には相関関係はなかった ($r=-0.11, n=16, ns$) . CONTROL 2 と Younger から Older に対する非意図的邪魔行動との間にも有意な相関は認められなかった ($r=0.33, n=16, ns$) .

低 Younger 群においては、Younger の非意図的邪魔行動と Older の否定的行動との間に有意な正の相関が見られた ($r=0.71, n=16, p<0.01$) . Older の否定的行動と Younger の否定的行動との間にも有意な正の相関が見られた ($r=0.55, n=16, p<0.05$) . また Older の否定的行動と CONTROL 2 との間には有意な正の相関が認められた ($r=0.68, n=16, p<0.05$) .

Table 3-20 被験者の年齢段階毎にみたきょうだい間の相互作用と
母親の調整行動との関連性

Youngerの年齢を基準とした 被験者の分類	調整行動	
	CONTROL 1	CONTROL 2
Olderの親和的行動		
低Younger群 (n=16)	0.72 **	-0.11
中Younger群 (n=13)	0.69 **	-0.66 *
高Younger群 (n=11)	0.26	0.07
Youngerの非意図的邪魔行動		
低Younger群 (n=16)	0.61 *	0.33
中Younger群 (n=13)	-0.47	0.42
高Younger群 (n=11)	-0.44	-0.23

注：数値は相関係数を表す

低Younger群：Youngerの年齢が1.00-1.92歳のグループ

中Younger群：Youngerの年齢が1.96-2.76歳のグループ

高Younger群：Youngerの年齢が3.06-4.82歳のグループ

* p<0.05

** p<0.01

Table 3-21 被験者の年齢段階毎にみたきょうだい間の
否定的相互作用と母親の調整行動との関連性

Youngerの年齢を基準とした			
被験者の分類	1	2	3
低Younger群 (n=16)	0.71 **	0.55 *	0.68 *
中Younger群 (n=13)	0.68 *	0.28	0.37
高Younger群 (n=11)	0.64 *	0.08	0.45

注：数値は相関係数を表す

1: Youngerの非意図的邪魔行動とOlderの否定的行動との関連性

2: Olderの否定的行動とYoungerの否定的行動との関連性

3: Olderの否定的行動とCONTROL 2との関連性

低Younger群：Youngerの年齢が1.00-1.92歳のグループ

中Younger群：Youngerの年齢が1.96-2.76歳のグループ

高Younger群：Youngerの年齢が3.06-4.82歳のグループ

* p<0.05

** p<0.01

中 Younger 群

中 Younger 群においても、CONTROL 1 は Older の親和的行動と有意な正の相関があった ($r=0.69, n=13, p<0.01$)。CONTROL 1 と Younger の非意図的邪魔行動との間に相関は見られなかった ($r=-0.47, n=13, ns$)。CONTROL 2 と Older の親和的行動との間には有意な負の相関が見られた ($r=-0.66, n=13, p<0.05$)。CONTROL 2 と Younger の非意図的邪魔行動の頻度との間には相関が見られなかった ($r=0.42, n=13, ns$)。

中 Younger 群においても、低 Younger 群の場合と同様に、Younger の非意図的邪魔行動は Older の否定的行動と有意な正の相関が見られたが ($r=0.68, n=13, p<0.05$)、Older の否定的行動と Younger の否定的行動との間には有意な相関はなかった ($r=0.28, n=13, ns$)。また、Older の否定的行動と CONTROL 2 の間の相関も見られなかった ($r=0.37, n=13, ns$)。

高 Younger 群

高 Younger 群においては、CONTROL 1 と Older の親和的行動との間には有意な相関が見られなかった ($r=0.26, n=11, ns$)。また CONTROL 1 と Younger から Older に対する非意図的邪魔行動の頻度との間にも相関は見られなかった ($r=-0.44, n=11, ns$)。CONTROL 2 と Older の親和的行動の間には有意な関係はなかった ($r=0.07, n=11, ns$)。また CONTROL 2 と Younger の非意図的邪魔行動との間にも有意な相関はなかった ($r=-0.23, n=11, ns$)。

Younger の非意図的邪魔行動と Older の否定的行動との間の相関は有意であった ($r=0.64, n=11, p<0.05$)。しかしながら、Older の否定的行動と Younger の否定的行動との間には有意な関係はなかった ($r=0.08, n=11, ns$)。Older の否定

的行動と CONTROL 2 の相関も認められなかった ($r=0.45$, $n=11$, ns) .

第4節 三者遊び場面におけるきょうだい間の相互作用と質問紙調査による

きょうだい関係との整合性

本研究においては、幼児期のきょうだい関係に及ぼす母親の行動の影響を明らかにするために、母親、Older, Younger の三者遊び場面の観察を実施するとともに、日頃のきょうだい関係に関する質問紙調査（SRQ: 75 ページ参照）も並行して行った。そこで、本項では観察場面におけるきょうだい間の相互作用と質問紙調査の結果との対応関係を分析する。

SRQ の分析では、被験者 40 組のうち回答に記入もれがなかった 31 組のデータが用いられた。これら 31 組の被験者に関しては、Older の年齢、Younger の年齢、きょうだい間の年齢差のいずれにおいてもきょうだい構成による差がなかった（Table 3-22）。

因子分析の適用

SRQ は 16 下位項目からなり、各下位項目毎に 3 問ずつ質問が含まれている（Table 3-23 参照）。下位項目毎の得点を元に最尤因子分析を行い、そののちにバリマックス回転を施した。その結果、固有値が 1.0 を超えた因子が 3 つ抽出された。第 1 因子から第 3 因子までの寄与率は、それぞれ 22.5%、22.0%、8.2%で、累積寄与率は 52.7%であった。

因子の命名

第 1 因子において因子負荷量が高かった下位項目は、高い方から順に Quarreling (0.917) , Competition (0.824) , Antagonism (0.807) で、いずれもきょうだい間の葛藤を示すものであった。したがって、この因子は「葛藤」

Table 3-22 SRQの分析に用いられた被験者

	きょうだい構成				Total (n=31)	F ($n_1=3$, $n_2=27$)
	姉-妹 (n=6)	兄-弟 (n=10)	姉-弟 (n=7)	兄-妹 (n=8)		
Olderの年齢	5.64	5.88	5.27	5.78	5.67	0.29
(SD)	(0.83)	(1.29)	(1.51)	(1.71)	(1.34)	
Youngerの年齢	2.85	2.83	2.31	2.79	2.71	0.38
(SD)	(1.31)	(0.90)	(0.77)	(1.45)	(1.09)	
年齢差	2.78	3.05	2.95	2.99	2.96	0.09
(SD)	(1.15)	(0.96)	(1.09)	(0.97)	(0.98)	

Table 3-23 SRQに関する主成分分析の結果^a

質問項目	質問内容	因子		
		1	2	3
1 Prosocial	きょうだい間の向社会性	-0.217	0.455	<u>0.725</u>
2 Maternal partiality	母親による支援	0.199	-0.082	0.097
3 Nurturance of younger	OlderからYoungerへの世話	-0.148	-0.077	<u>0.741</u>
4 Nurturance by younger	YoungerからOlderへの世話	0.161	<u>0.647</u>	0.115
5 Dominance of younger	Olderの優位性	0.466	0.147	0.495
6 Dominance by younger	Youngerの優位性	0.258	0.420	0.312
7 Paternal partiality	父親による支援	0.421	-0.190	0.287
8 Affection	きょうだい間の愛情性	-0.330	0.244	<u>0.631</u>
9 Companionship	きょうだい間の友好性	-0.124	0.332	0.473
10 Antagonism	きょうだい間の敵対心	<u>0.807</u>	-0.036	-0.066
11 Similarity	きょうだい間の類似性	0.184	0.570	0.262
12 Intimacy	きょうだい間の親密性	0.291	<u>0.664</u>	0.417
13 Competition	きょうだい間の競争性	<u>0.824</u>	0.146	-0.155
14 Admire of younger	OlderからYoungerへの賞賛	-0.171	0.374	0.388
15 Admire by younger	YoungerからOlderへの賞賛	-0.048	<u>0.916</u>	0.034
16 Quarreling	きょうだい間の不和	<u>0.917</u>	0.045	-0.124
固有値		3.60	3.52	1.31
寄与率(%)		22.51	22.01	8.18
累積寄与率(%)		22.51	44.52	52.70

注1：数値は因子負荷量を表す

注2：下線部は因子負荷量が0.600を超えるもの

^a SRQは日頃のきょうだい関係を調査するための質問紙で
Furman & Buhrmester (1985) が考案した

と命名された（以降の文中では、「SRQ 1」と表記する）。

第 2 因子において因子負荷量が高かった下位項目は、高い方から順に Admire by younger (0.916) , Intimacy (0.664) , Nurture by younger (0.647) であった。これらには Younger から Older に対する親和的行動や親密度が含まれている。したがって、この因子は「Younger から Older への親和性」と命名された（以降「SRQ2」と表記する）。

第 3 因子において因子負荷量が高かった下位項目は、高い方から順に Nurture of younger (0.741) , Prosocial (0.725) Affection (0.631) であった。これらには Older から Younger に対する親和的行動やきょうだい間の親和的な関係を表す内容が含まれていた。したがって、この因子は「Older から Younger への親和性」と命名された（以降「SRQ 3」と表記する）。

SRQ の分析によって抽出されたこれら 3 因子の因子スコアと三者場面におけるきょうだい間の相互作用との関連を分析した (Table 3-24) 。 その結果、SRQ 1 は、観察場面での Younger の否定的行動と有意に近い正の相関が見られた ($r=0.31, n=31, p<0.09$) 。 SRQ 2 は、Older から Younger に対する否定的行動及び Younger から Older に対する非意図的邪魔行動との間に有意な負の相関が認められた (それぞれ $r=-0.45, n=31, p<0.05$; $r=-0.52, n=31, p<0.01$) 。 Older から Younger に対する否定的行動は、Younger から Older に対する非意図的邪魔行動と有意な正の相関があったので (Table 3-6) , Younger の非意図的邪魔行動の影響を排除した場合の Older の否定的行動と SRQ 2 との偏相関係数を算出した。その結果、相関は有意なものではなくなった (偏相関係数 $r=-0.21, n=31, ns$) 。 SRQ 3 は、観察場面での Older の親和的行動の頻度と有意な正の相関があ

Table 3-24 遊び場面でのきょうだい間の相互作用とSRQとの関連性

遊び場面での きょうだい間の相互作用	SRQ		
	SRQ 1	SRQ 2	SRQ 3
Olderの親和的行動	-0.10	0.05	0.40 *
Olderの否定的行動	0.19	-0.45 *	-0.14
Youngerの非意図的邪魔行動	-0.11	-0.52 **	-0.28
Youngerの参加	0.09	0.09	0.07
Youngerの否定的行動	0.31 +	-0.10	0.04

注：数値は相関係数を表す

SRQ 1: 葛藤

SRQ 2: YoungerからOlderへの親和性

SRQ 3: OlderからYoungerへの親和性

+ p<0.10

* p<0.05

** p<0.01

った ($r=0.40, n=31, p<0.05$) .

以上の分析結果から、母親、Older、Younger の三者遊び場面におけるきょうだい間の相互作用は、母親が評定した日頃のきょうだい関係を十分に反映したものであるといえる。

考 察

本研究の目的は、幼児期のきょうだい関係に母親がどう関与しているかを明らかにすることであった。母親、Older, Younger の三者遊び場面において、子ども同士の相互作用と母親の行動との間にどのような対応関係があるかが分析された。

ここで注意しなくてはならないのは、人為的に設定されたいわば実験的な場면을観察することで、本来のきょうだい関係の特徴が抽出できるのかという問題である。本研究ではこの問題を検討するために、行動観察と並行して質問紙調査も実施した。この質問紙 (SRQ: Sibling Relationships Questionnaire) は、日頃のきょうだい関係を明らかにするために考案されたもので、広く使用されている (例えば, Stoneman & Brody, 1993) 。分析の結果、観察場面のデータと SRQ の結果との間に明確な対応が見られた (Table 3-24) 。このことは、遊び場面のデータが日頃のきょうだい関係を反映したものであることを意味する。

遊び場面では、観察者が持参したブロックが用いられた。ブロックは男児にも女児にも分け隔てなく遊べるおもちゃで、性差の影響を排除するのに有効だと考えられた。また、いずれの家庭でも同じブロックが用いられたので、データを相互に比較することができると考えられた。ブロック遊び場面はまた、子ども同士の否定的相互作用や親和的相互作用を観察するのに適していると考えられた。なぜなら、遊びの対象が一つのもの (本研究ではブロック) に限定されていた方が、両者の相互作用が活発になる可能性が高いからである。第1研究 (第2章) の場

合は、観察の対象に誕生してまもない乳児が含まれていたため、まだ子どもたちだけで協力して何かこしらえるのは難しかった。しかしながら、本研究のように被験者が幼児期の場合は、ブロック遊びのように場面が明確に設定されていた方が、取り合いや身体的攻撃などの否定的行動や共同作業や援助行動などの親和的行動が通常よりも頻繁に観察されると予想された。

母親の行動については二つの側面が取り上げられた。

一つ目の側面は、子ども同士の相互作用を直接的に規定する行動（本研究においては「調整行動」と命名した）である。Olderの注意をYoungerの方に向けたり、もっと直截的に両者の相互作用を促したりする行動がこれに該当する。

きょうだい関係に関する研究で、両者の関係を調整するような行動に注目したものが過去になかったわけではない。だが、これらの研究で対象になっているのは、乳児期のきょうだいか（Dunn & Kendrick, 1982; Howe & Ross, 1990）、もしくは幼児期のきょうだいであっても、否定的な関わりに対する介入の問題に焦点が限られているものかのいずれかであった（Martin & Ross, 1995; Ross, 1996）。

母親は、おそらく調整行動を、否定的な関わりを解消させる目的だけではなく、親和的な関わりを亢進させる目的でも用いるのではないかと推測された。しかも、このような調整行動は、子どもの年齢段階によって異なった効果を示すのではないかと予想された。

母親の行動における二つ目の側面は、子どもたちに相対したときの母親の行動特性である。Older, Youngerを相手にどのようなスタイルで関わりかけるかという問題は、子どものきょうだい関係と密接に関連している可能性がある。もし、

一方の子どもに対する関わりかけが積極的であるにもかかわらず、他方に対する関わりかけがそうでないといった行動特性を持つ母親がいた場合、それが子どものきょうだい関係に影響を及ぼす可能性は十分に考えられる。

さて、子どものきょうだい関係については、母親の行動以外の変数との関連も指摘されている。なかでも、子どもの年齢や互いの年齢差、きょうだい構成、さらには気質などとの関連は多くの研究者が指摘している通りである (Abramovitch et al., 1980; Pepler et al., 1981; Munn & Dunn, 1989)。

そこで、本研究においても、母親の行動だけでなく、今挙げた変数に関する分析も併せて行った。その理由は、母親の行動が子どもの年齢や気質などと交互作用を持っているという指摘があるためである (Stocker et al., 1989)。例えば、気質の問題に関していうなら、子どもがどのような気質を持っているかによって、母親の行動が微妙に異なる可能性がある。母親の行動ときょうだい間の相互作用との関連をより明確にするには、母親の行動以外の変数も分析の対象にしなくてはならないのである。

以下の内容は次の3つからなる。

第一に、調整行動及び母親の行動特性の特徴について考察を行う。そして第二に、子ども同士の個々の相互作用に関して、母親によるこれらの行動が説明変数としてどの程度有効であったかを論じる。さらに第三に、母親の調整行動に焦点を当て、子どもの年齢段階に応じて被験者を分類したとき、そのそれぞれにおいて調整行動の効果がどの程度有効であったかを考察する。

1. 母親の行動の特徴

1) 調整行動の特徴

本研究においては、母親の調整行動は 10 種類に分類された。調整行動の特徴を検出するために、これら 10 種類の行動を元に主成分分析を行った。主成分分析は、多変数データをより少数の合成変数（因子）に変換し、データの間関係を見るために用いられるものなので、調整行動の特性を明らかにするには有効だと考えられる。

分析の結果、母親の調整行動については 3 種類の因子が抽出された。第 1 因子は、子ども同士の互いへの注意を喚起したり相互作用を促したりする行動特性、すなわち子ども同士を引き合わせる性質を持った因子であった。第 2 因子は、逆に互いの注意を分散させ、両者を引き離す性質を持った因子であった。また第 3 因子は、母親と Younger の相互交渉に Older を導き入れる性質を持った因子であった。

Dunn & Kendrick (1982) では、子ども同士の関係を調整する母親の行動として、両者の親和的な関わりを促す行動に注目しており。本研究の結果から、親和的な関わりを促進する行動だけでなく、両者を引き離すような行動も、母親の調整行動の一つの特徴を表しているということが明らかになった。

第 1 因子、すなわち子ども同士を引き合わせるような調整行動に関しては、子どものきょうだい構成、年齢、気質のいずれの変数とも関連がなかった。第 3 因子、すなわち母親と Younger の相互作用に Older を導き入れる行動に関しても同様で、他の変数との関連は一切認められなかった。第 2 因子、すなわち子ども同士を引き離す行動に関しては、Younger の年齢と負の相関があり、Younger

の年齢が低いほど、子ども同士を引き離す行動が頻繁に見られた。第2因子はまた、Olderの情緒性とも相関があり、Olderの情緒性が高い場合ほど、子ども同士を引き離す行動が頻繁に生じた。

全体的に見ると、母親の調整行動に関して、他の変数と関連が見られたのはわずかであった。このことから、調整行動は基本的に他の変数と独立したものであり、子ども同士の相互作用に対する調整の仕方は、個々の母親によって独特であったといえる。

2) Older, Youngerに相対したときの行動特性

Older, Youngerに相対したときの母親の行動特性を抽出するために、賞賛、援助、方向づけ、問合わせ、提示の5種類の行動の生起率を元に、主成分分析を行った。

分析の結果、主な因子は3つ抽出された。第1因子はYoungerに対する積極的な働きかけを表す因子で、第2因子は逆にOlderに対する積極的な働きかけを表す因子であった。第3因子は解釈が困難な因子で、相対的にYoungerの方とよく関わることを表す行動特性と子どもを誉めるという行動特性を統合したような因子であった。この第3因子に関しては、結果的にきょうだい間の相互作用との関連が見られなかった。

以下では、第1因子と第2因子を中心に他の変数との関連性を考察する。

母親の行動の第1特性、すなわちYoungerに対する積極的な働きかけは、子どものきょうだい構成によって異なることがわかった。具体的には、Olderが男児(兄)であった場合、Youngerも同じく男児(弟)の場合よりYoungerが女児(妹)の場合の方が、母親のYoungerに対する働きかけが積極的であるという

結果であった。第 1 特性と子どもの年齢・気質との間には一切関連がなかった。

母親の行動における第 2 特性、すなわち Older に対する積極的な働きかけは、Older の活動性とは相関があったが、それ以外の変数とは関連が見出されなかった。

以上述べた結果からもわかるように、Older, Younger の二人に相對したときの母親の行動特性は、いくつかの例外の除けば、他の変数による影響をほとんど受けていなかった。このことは、母親の行動特性が、基本的には子どもの成長や気質などによって変容するような性質のものではないということを表している。言い換えれば、子どもと接するときの行動に関して、母親は個々に独特のスタイルを持っているといえるかもしれない。

2. きょうだい間の相互作用と母親の行動との関連性

前項では、母親の調整行動、及び Older, Younger の二人に相對したときの母親の行動特性の特徴について考察した。

本項においては、きょうだい間の相互作用と母親の行動をはじめとするいくつかの変数との関連について結果を考察し、さらに母親の行動の影響が、他の変数の効果を除外した場合にも、有効であったかどうかを述べる。

1) Older から Younger に対する親和的行動

Older から Younger に対する親和的行動は、ブロックの作り方を教示したり、ブロックを譲渡したりする親和的な関わりかけ一般を指す。

この行動と関連があったのは、Older, Younger それぞれの年齢と情緒性であった。ただし、本研究の被験者に関しては、Older の年齢と Younger の年齢との

間にも、また Older の情緒性と Younger の情緒性との間にも有意な正の相関があり、そのうえ子どもの年齢と情緒性との間にも正の相関があった。このことは、これらの変数が互いに関連性を持っている可能性を示唆している。

Older の年齢の効果を排除した分析を行ったところ、予想通り、他の変数と Older の親和的行動との関連は有意でなくなった。Older から Younger に対する親和的行動は、子どもの加齢に伴って増加する性質を持ち、情緒性などの他の変数の影響は、子どもの加齢変化に付随するものであったといえる。

次に、Older の親和的行動と母親の行動との関連について述べる。

まず、母親の調整行動との関連について考察する。Older の親和的行動は、母親の調整行動のなかでも、第 1 特性すなわち子ども同士を引き合わせるような行動と相関があり、子ども同士を引き合わせる行動が多いほど、Older は Younger に対して親和的に振る舞った。

しかも、ここで注目すべきは、Older の年齢の影響を排除したうえでも、この相関関係が保持された点である。このことは、子どもの年齢が一定であっても、母親の引き合わせ行動が Older の親和的行動を増加させるのに有効であったということを意味する。

Older, Younger に相対したときの母親の行動特性と Older の親和的行動との関連については、次のような結果が得られた。

Older に対する積極的な働きかけと Older から Younger への親和的行動の間には負の相関があった。すなわち、母親の Older に対する働きかけが積極的であるほど、Older は Younger に対して親和的に関わりかけることが少なかったということである。

母親から Older への働きかけが多いということは、全体的に、遊びの内容が母親と Older の相互交渉を中心に展開していくことを意味している。したがって、Older の立場からすれば、Younger の方に注意が向かいにくく、結果として親和的行動が少なくなるのではないだろうか。

母親から Older への働きかけと Older の親和的行動との相関関係は、Older の年齢の効果を排除した場合には有意でなくなった。つまり、この相関関係は子どもの加齢変化に随伴するものである可能性が高いのである。もっと具体的にいうなら、もし子どもの年齢が一定であった場合、母親から Older への働きかけが積極的かどうかという問題は、Older の親和的行動の多少とは何ら関連性がないのである。

子ども同士の親和的な関係は母親にとって最も望ましいものである。なぜなら、子ども同士が仲良く遊んでくれることによって、母親が子どもの相手をするのに費やす負担は大幅に軽減されるからである。このような意味で、子ども同士の互いへの注意を喚起したり、関わりを促進したりする引きあわせ行動は、非常に有効な調整行動だといえる。

2) Older から Younger への否定的行動及び Younger から Older への非意図的邪魔行動

Older から Younger に対する否定的行動と Younger の非意図的邪魔行動の間には非常に強い相関関係があった。これは、Younger が Older の邪魔をしたことがきっかけとなって、子ども同士の否定的な相互作用へと発展する場合が多いことを表しているのかもしれない。

Younger による邪魔行動は、Younger の年齢と負の相関があり、Younger が

成長するにしたがって減少した。第2章にも示したように、Younger は生後半を経た頃から Older に接近したり、手を伸ばしたりして邪魔をすることが多くなる (37 ページ, Figure 2-5)。

この行動が、加齢に伴って減少した理由の第一点は、手を伸ばすなどして邪魔した場合、それが Older の否定的行動につながるが多いということ Younger がしだいに学習したということである。また理由の第二点は、成長するにしたがって、Older がこしらえた構成物に興味を覚えても、すぐさま手を伸ばしたりせず、しばらくは傍観していられたようになったということである。

いずれにせよ、Younger は成長するにしたがって、以前のようにむやみに Older の方へ手を伸ばしたりすることが少なくなるのである。

ここで興味深いのは、Younger の邪魔行動が Younger の加齢に伴って減少するのに対して、Older の否定的行動は必ずしも加齢変化の影響を受けなかったという点である。このことは、Older の否定的行動がもっと別の、例えば子ども自身が持っている攻撃性のようなものと強い関連を持っていることを示唆している。ちなみに、Older の否定的行動は、Older の活動性との間に有意に近い正の相関関係があった。活動的な子どもが、ときに攻撃的になる場合があるとすれば、今述べた推測はかなり妥当性のあるものだろう。

次に、Older の否定的行動や Younger の非意図的邪魔行動と母親の行動との関連について述べる。

Younger の邪魔行動は、母親の調整行動と密接な関係があった。子ども同士を引き合わせる行動を頻繁に示す母親ほど、Younger は頻繁に Older の邪魔をした。しかも、注目すべきはこうした関係が年齢の影響を排除した場合にも保持された

という点である。

このような関連性については時系列的に二通りの解釈が可能である。

一つは、引き合わせ行動ののちに邪魔行動が生じたという解釈である。すなわち、母親が子ども同士を引き合わせることによって、Youngerの注意がOlderの方へと向かい、邪魔行動が触発されたという考え方である。

もう一つの解釈は、その逆で、邪魔行動ののちに引き合わせ行動が生じたという解釈である。Olderに対しては「○○ちゃん (Youngerの名前) も使いたかったんだって」などと語りかけ、Youngerに対しては「お兄ちゃんが先に使ってたのよ」などと諫める場合がこれに該当する。

実際の遊び場面では、引き合わせ行動は上述したいずれの使われ方もしていたので、どちらがどうとはいえない。結果的に重要なのは、母親による引き合わせ行動が子どもの親和的相互作用だけでなく、否定的相互作用とも強い関連を持っていたという点である。この点については次の項で詳しく論じる。

Youngerの非意図的邪魔行動やOlderの否定的行動はまた、母親の引き離し行動とも関連があった。時系列的には、邪魔行動や否定的行動ののちに、母親が両者を引き離す場合が圧倒的に多かった。

ここで興味深いのは、Youngerの邪魔行動と母親の引き離し行動との関係がOlderの否定的行動の影響を排除したときに有意でなくなったにもかかわらず、Olderの否定的行動と引き離し行動との関係は、Youngerの邪魔行動の影響を排除した場合にも保持されたという点である。これをもっと具体的にいえば、Youngerの邪魔行動の頻度が一定であっても、Olderの否定的行動は母親の引き離し行動と強い関連を持っていたことになる。

これらの結果から、母親の引き離し行動には次のような特徴があると考えられる。母親は Younger の邪魔行動に即応して両者を引き離すわけではない。Younger が邪魔行動をした直後には、むしろ、両者の意図を確認させるなどして、否定的な関わりを解消しようとする。しかしながら、一旦、Older が否定的な振る舞いに及んだ時には、両者を引き離すという手段を用いて否定的関わりを解消するのである。Younger はいうまでもなく Older より体力的に劣っているので、Older が否定的な振る舞いをしたときには Younger に危害が及ぶ可能性が高い。母親が Older の否定的行動に対して引き離し行動を頻繁に示したのはこのためであろう。

3) Younger から Older への参加

Younger による参加行動は、具体的には Older がブロックで何か作っているときに、自分も持っているブロックを積み重ねるなどして、親和的に Older の遊びに参入する行動である。

この行動は、きょうだい構成との関連が認められた。すなわち、Older が男児（兄）であった場合、Younger が女児（妹）の場合より男児（弟）の場合の方が、Younger は頻繁に Older の遊びに参加した。また、Younger の参加行動には母親の行動との関連もあり、Younger に対する働きかけが少ない母親ほど、Younger は Older の遊びに頻繁に参入した。

ここで注意しなくてはならないのは、すでに前項で述べたように、母親から Younger への働きかけにはきょうだい構成の影響があったということである。すなわち、Older が男児（兄）の場合、Younger が男児（弟）のときより女児（妹）のときの方が、母親から Younger への働きかけが有意に多かったのである。

母親から Younger に対する働きかけは、きょうだい構成によって異なり、Older が男児（兄）で Younger が女児（妹）の場合に、母親は Younger と積極的に交渉を持つ傾向があった。こうした結果の間接的影響として、母親との交渉が多い女児（妹）は、兄の遊びに参加する頻度が少なかったと解釈することが可能なのではないだろうか。

4) Younger から Older に対する否定的行動

Younger から Older に対する否定的行動は、具体的には Older が持っているブロックをわざと取ったり、Older の要請を拒否したり非難したり、あるいは身体的に攻撃したりした場合を指す。

この行動は、Older の活動性との間に正の相関が見られた。すなわち、Older の活動性が高いほど、Younger から Older に対する否定的行動が頻繁だったといえる。このような関係は一見不自然なように思える。しかしながら、Older の活動性は Older 自身の否定的行動と有意に近い正の相関関係があった。Older の否定的行動と Younger の否定的行動の間には、必ずしも有意な関係は見られなかったが、Older の否定的行動に対して Younger も同じように Older に報復行動を示す場面は頻繁に観察された。

このことから、Older の活動性が高い場合、Older から Younger に対して否定的行動を示すことが多く、その結果として Younger から Older の否定的行動に結びつくという連鎖反応があったのかもしれない。

以上、観察場面で見られた子ども同士の相互作用と他の変数との関連を母親の行動を中心として論じてきた。そもそも本研究では、母親の行動に関して二通り

のアプローチを試みた。一つは、直接的に子ども同士の関係を調整する行動、もう一つは、子どもたちに相対したときの行動特性である。

後者について、子ども同士の相互作用との関連が、他の変数の影響を排除したときにも認められたのは、Younger の参加行動に関してであった。しかしながら、質問紙調査の結果との対応関係を見ると、Younger の参加行動は日頃のきょうだい関係と何ら関連がない (Table 3-24) 。このことから、Older, Younger と相対したときに母親がどのような行動特性を示すのかという問題は、子どものきょうだい関係とは基本的に無関係であったといえてよい。

一方、前者の調整行動は、他の変数の影響を取り除いた場合でも、きょうだい間の相互作用を規定する変数として有効であった。母親は、子ども同士を引き合わせたり引き離したりする行動を、子どもの行動に即して用いることで、彼らのきょうだい関係を調整していたのである。

3. 発達の観点からみた母親の調整行動の機能

本研究の目的は、きょうだい間の相互作用と母親の行動との対応関係を明らかにすることであった。以下においては、きょうだい間の相互作用との強い関連性が確かめられた調整行動に焦点を当て、子どもの各発達段階においてこの調整行動がどのような機能を持っていたかを考察していく。

被験者を Younger の年齢を基準として 3 つのグループに分類したところ、最も年齢の低いグループ (低 Younger 群) では Younger は 1 歳台で、最も年齢の高いグループ (高 Younger 群) では Younger は 3~4 歳であった。その中間にあたるグループ (中 Younger 群) では Younger は 2 歳台であった。このようにし

て分けられたグループのそれぞれについて、母親の調整行動ときょうだい間の相互作用との関係を調べた。結果を以下に紹介する。

低 Younger 群においては、母親による引き合わせ行動と Older の親和的行動との間に相関があり、母親が子ども同士を頻繁に引き合わせるほど、Older から Younger への親和的行動が多かった。引き合わせ行動はまた、Younger の邪魔行動とも相関があり、引き合わせ行動を頻繁に示す母親ほど、Younger は Older の邪魔をよくした。さらに、Younger の邪魔行動が多いほど、Older の否定的行動も頻繁で、Older の否定的行動はまた Younger の否定的行動と相関があった。このことは、低 Younger 群では、きょうだい間の否定的相互作用が激しいものへと発展しやすいという特徴を示している。

では、なぜ母親はこのようなリスクを背負いつつも、子ども同士を引き合わせるのでしょうか。この疑問を解く鍵は母親が示した別の調整行動にある。つまり、母親は子ども同士を引き合わせるだけでなく、引き離すこともあったのである。しかも、引き離し行動は Older の否定的行動との間に相関があり、両者の否定的関係を解消するのに有効であった。

以上のことから、低 Younger 群においては、母親は子ども同士を引き合わせたり、引き離したりすることによって、子どものきょうだい関係をかなり調整できるということを意味する。

では、母親の調整行動は中 Younger 群においても同じような効果を発揮するのでしょうか。

子ども同士を引き合わせる行動と Older の親和的行動の間には、低 Younger 群の場合と同様に、相関があった。すなわち、中 Younger 群においても、子ども

同士を引き合わせる行動が Older の親和的行動に結びつくことを意味している。低 Younger 群では、引き合わせ行動は Younger の邪魔行動とも相関があったが、中 Younger 群ではこのような関係は認められなかった。

なぜ低 Younger 群と中 Younger 群とでこうした違いが生じたのであろうか。低 Younger 群では、Younger は母親の引き合わせ行動を契機に、手を伸ばすなどして Older の邪魔をする場合があったが、中 Younger 群では、たとえ Older がしていることに関心を持って、すぐさま手を伸ばしたりせず、しばらく傍観していたり、あるいは自分がしていたブロック遊びの方にすぐに注意を戻すことが多かった。

さらに、中 Younger 群では、邪魔行動が行われたときに、母親がお互いの意図を逐一説明しなくても、Older は Younger の、Younger は Older の意図や気持ちを十分に理解できるようになっていたのかもしれない。

また、ここで注目すべき点は、Younger の邪魔行動と Older の否定的行動との間には依然として正の相関関係があったにもかかわらず、Older の否定的行動と Younger の否定的行動との間には相関がなくなったという点である。このことは、子ども同士の否定的相互作用が、激しいものへと発展する前に終結するケースが多いことを意味する。

低 Younger 群では、Older の否定的行動と母親の引き離し行動との間に関連性が見られたが、中 Younger 群ではこのような関連性は消失した。これは、母親が子ども同士の否定的相互作用を随時調整しなくとも、それが自然に終結するケースが多くなったからかもしれない。それどころか、母親が子ども同士を引き離す行動を多く示した場合、Older から Younger への親和的行動が少なくなるという傾

向すらあった。

以上の内容をまとめると次のようになる。すなわち、中 Younger 群では、低 Younger 群の場合とは異なり、子ども同士を引き合わせる行動によって生じるリスクはすでに消失していた。また、子ども同士の否定的相互作用はある程度放任しておいても自然と解消される可能性があるため、母親は無理に子ども同士を引き離す必要がなくなったのである。

高 Younger 群では、母親の調整行動がきょうだい間の相互作用にもたらす効果は一切消失してしまった。このことは、きょうだい間の相互作用が母親の調整行動に影響されるようなものでなくなったことを意味しているのかもしれない。

まとめ

母親の調整行動は、子ども同士の否定的な関わりを解消させるとともに、親和的な関わりを亢進させるように方向づけられていた。幼児期においても、乳児期と同様、この種の調整行動は頻繁に観察され、しかもそれが子どものきょうだい関係に及ぼす影響も絶大であった。

また本研究は、調整行動ときょうだい間の相互作用との関連が子どもの年齢段階によってかなり違う、すなわち子どもが小さい場合ほどこれらの関連性が大きいことを明らかにした。その内容を要約すると、以下のようになる。

Younger が1歳台の頃、子ども同士を引き合わせるという調整行動は、子ども同士の親和的な関係を促進させるうえで、機能的な役割を果たしていた。しかしながら、引き合わせるという行動には、両者の否定的な関係を助長するというリスクがあった。そのうえ、この時期の否定的相互作用は抑制力が乏しく、激烈

なものに発展していく可能性を有していた。

このような場合、母親はまず第一に、引き続いて両者を引き合わせ、互いの意図を確認させることによって、否定的な関わりを解消しようとした。しかしながら、それでも Older が否定的な行動に及んだときは、両者の注意を分散するなどして、否定的相互作用を解消させるのではないかと考えられた。もちろん、こうした調整が可能なのは、両者を引き離すという行動が否定的関係を解消させるのに有効であったからである。

Younger が 2 歳台になっても、子ども同士を引き合わせる行動は彼らの親和的關係を促進する機能を持っていた。この時期になると、子ども同士の否定的相互作用は抑制的になった。したがって、母親には子ども同士を引き離す必要がなくなった。子ども同士を引き離すという行動が持つ機能は消失し、むしろきょうだい間の親和性を低下させるようなマイナスの効果すら持つようになった。

Younger が 3～4 歳台になると、きょうだい間の相互作用に対する母親の調整行動の機能は全く見られなくなった。したがって、この時期以降のきょうだい関係に関しては、母親の調整行動以外の全く別の変数の方が強い影響を持つようになるのかもしれない。

子育てに伴う母親の負担は、おそらく子どもが小さい頃の方が大きいと想像される。その理由として考えられるのは、子どもが小さい場合ほど、子ども同士の競合的な関わりが激しいものへと発展する可能性が高いということである。

このような意味で、子どもの年齢段階が低い場合ほど、母親の調整行動の効果が大きかったという本研究の結果は、非常に興味深い。調整行動には、子どもたちの競合的な関わりを解消させるだけでなく、親和性を亢進させる効果があった。

場面に応じてこれらの行動を適切に使い分けることによって、子どもたちは親和的な関係を構築していく可能性があり、それは結果的に母親自身の負担の軽減にもつながるものと思われる。

第4章

総合論議

きょうだい関係に対する母親の調整行動の役割 —発達的な観点から—

乳児期及び幼児期のきょうだいとその母親を対象として、遊び場面の行動観察を実施し、子ども同士の関係を母親がいかに調整しているかを明らかにすることが、本研究の目的であった。

乳児期のきょうだい関係に関する研究では、第二子の出産を終えたばかりの家庭が被験者に選ばれた。この時期の最大の特徴は、いうまでもなく、母親による子育ての対象が一人から二人に増えたことである。子どもが二人に増えたことで、母親の負担は大幅に増大する。食事の世話、衣類の着脱などの基本的な育児行動から、生活習慣、しつけなどの社会的・文化的育児行動に至るまで、母親に委ねられている仕事は限りなく多い。

しかしながら、これらの育児行動とは別に、母親の負担を増大させる最も大きな原因は、子ども同士の競合的關係であることが推測された。

第二子（以下、「Younger」と表記する）が誕生してまもない頃には母親の注意をめぐって、また生後半年を過ぎた頃からは主におもちゃをめぐって、第一子（以下、「Older」と表記する）は Younger に否定的な行動を繰り返し示した。

このような競合関係を解消するのに効果的だと思われる母親の行動には2種類あった。

一つ目は、母親が自身の判断で、働きかけの配分をうまく振り分けていた点である。一方の子どもへの働きかけが極端に多かったり、あるいは少なかったりすると、他方は激しい嫉妬心を抱く。子どもたち同士の敵対関係を昂じさせないためにも、母親は自分の注意をバランスよく彼らに配分する方が望ましい。

Younger が誕生して数ヶ月間のあいだ、母親は Younger との交渉を非言語的

な内容で補うことによって、Older との言語的な交渉にできるだけ比重を置くように努めていた。さらに、Younger の活動性が急速に高まる生後半年以降になると、母親は発話による働きかけをバランスよく両者に配分し、交互に、しかも短い時間間隔で彼らとの関わりを移行させていくという特徴が見られた。

子どもたちの競合関係を解消するのに効果的な母親のもう一つの行動は、子どもたちの相互作用に介入するというものであった。本研究ではこのような行動を「調整行動」と定義した。

調整行動に関して特徴的だったのは、その効果がその場かぎりでのみ有効だというわけではなく、長期的に見ても意味のあるものであった点である。具体的には、母親は、Younger の行動や内的状態を丁寧に Older に説明するという行動をよく示した。このような行動が繰り返されることによって、Older は、今まさに自分が Younger に示した否定的行動によって、Younger の内的状態にどのような変化が生じたのかを、少しでも早く理解できるようになることが予測された。Younger の内的状態が理解できるようになれば、Older は早晩、自分の意志で否定的行動を抑制しうる可能性が高い。母親がこのような調整行動を子どもたちの否定的相互作用の直後に示したのは、Older に対して、少しでも早く否定的行動を抑制できるようになってほしいと期待しているからにほかならない。

さらに興味深いのは、Younger の行動や内的状態に関する説明が子ども同士の親和的な関係をもたらすうえでも、効果的であったという点である。

被験者の中には、Older が Younger に親和的な行動を示した直後に、Younger の行動や内的状態に関する発話（「喜んでよ」や「笑ってるよ」など）を Older に対してよく示す母親とあまり示さない母親とがいた。

そして、前者の被験者に関しては、Older は引き続いて Younger に対して親和的な関わりかけをすることが多かった。このことは、自分が示した親和的行動の結果、Younger の内的状態に喜びの感情が生じたことを、母親の説明を通して理解し、Younger に対してさらにまた親和的行動をよく示したということの意味している。

母親がこのような調整行動を繰り返し行えば、Older はやがて、親和的行動が相手 (Younger) に喜びをもたらすものだということを学習し、母親に促されなくとも、自分の意志で Younger に親和的な関わりかけを示すようになることが予想される。逆にいえば、母親は、Older による自発的な親和的行動を期待しているからこそ、Younger の行動や内的状態を説明するという調整行動を頻繁に示したのだともいえる。

以上述べてきた母親の調整行動の特徴から、一つの疑問が生じる。

つまり、自分の負担を軽減することが母親にとって何より重要なのであれば、母親は、子どもたちの競合的關係を減少させさえすれば、わざわざ、親和的な關係を亢進させる必要はないのではないかという疑問である。

この点については、はっきりしたことはわからないが、おそらく、母親には潜在的に子どもたちの親和的關係を期待する性質があるのかもしれない。だからこそ、母親は子どもたちの否定的な関わりに介入するばかりか、親和的關係に対しても度々介入したのではないだろうか。

幼児期になると、母親の調整行動は Older に対してだけでなく、Younger に対しても頻繁に向けられるようになった。また、母親の調整行動には、子どもたちを引き合わせる目的で用いられたものと、逆に引き離す目的で用いられたものの 2 種類があった。これらの調整行動を巧みに使い分けることによって、母親は子どもたちの関係を調整していた。

少なくとも Younger が 2 歳を迎えるまでは、母親は子ども同士を引き合わせたり、引き離したりしながら、彼らの関係をうまく調整していた。ただし、ここで注意しなくてはならないのは、両者を引き合わせる行動にはある程度リスクがあったということである。子どもは互いに注意を向け合うことによって、親和的に振る舞う場合もあるが、母親の意図とは逆に、否定的に振る舞うこともあった。

このようリスクを犯してまでも、母親が子ども同士を引き合わせようとした第一の理由は、先ほども述べたように、母親がそもそも彼らの親和的關係を望んでいたということである。また第二の理由は、たとえその結果、子どもたちが否定的な関わりを示したとしても、両者を引き離すことによってこのような関わりを解消することができるということである。

もちろん、子どもたちの関わり一つ一つに対して、このような調整行動を示すのは、母親にとっても負担の大きい作業にちがいない。しかしながら、この時期に示した調整行動は、のちの子どもたちの関係に強く影響する可能性があるため、長期的に見れば、母親にとって有益だともいえる。つまり、互いの気持ちや意図を逐一子どもたちに説明してやることによって、子どもたちは早期に互いの内的状態を理解できるようになる可能性があるからである。

子どもたちが、自分自身の判断で否定的行動を抑制したり、あるいは親和的行動を示すようになれば、それは母親自身の負担の軽減にも結びつくかもしれない。ただし、この点についてはあくまで推測にすぎないので、後述するようにさらなる検討が必要である。

さて、母親の調整行動が子どもたちの関係にもたらす効果は、Younger が少なくとも3歳を経る頃には消失してしまった。これはおそらく、Younger 自身の社会的認知能力の発達と関連があるだろう。例えば、Hoffman (1981) によると、子どもは2~3歳になると、役割取得能力 (role-taking ability) の形成と関連して、他者の感情や欲求が自分とは独立したものであると理解できるようになるという。さらに、Wellman (1988) によると、3歳児でも心の理論 (theory of mind) はかなり発達しており、他者の信念や意図あるいは願望がかなり推測できるという。

全体的に、他者とのやりとりの中で自分の感情を処理したり、対人関係に伴う葛藤を処理したりする能力も、この頃にはかなり発達しており (例えば、Iskandar, 1995) , Younger は Older の感情や意図を推測したり、自分の感情を抑制したりすることによって、Older との関係を調整することができるようになっているのではないだろうか。

ただし、Dunn et al. (1991) も指摘しているように、内的状態に関する話題が頻繁な家庭に育った子どもは、そうでない家庭に育った子どもよりも、他者の感情を理解する能力が優れている。本研究の被験者に関しても、このような発話が頻繁な家庭とそうでない家庭とは、明確に分けることができた。このような内容の発話を比較的好く行う母親に育てられた子どもは、きょうだいの内的状態を

推測する能力の発達が早いと考えられるので、自分の意志で否定的行動を抑制したり、親和的行動を行ったりすることができるようになる時期は早いかもしれない。この点については、縦断的な追跡観察をすることによって、実証されていくものと思われる。

調整行動の意味づけ

第1章にも記したように、ヒトにおいては、子どもの成長が他の霊長類とは比較にならないほど遅い。また、比較的短い出産間隔で子どもを設けることが可能なので、主たる養育者である母親は、まだ未成熟な複数の子どもの世話を同時にしていかななくてはならないことになる。

子育ては、栄養状態の管理（食事）、排泄の世話、衣類の交換などの基本的な内容のものから、生活習慣の教育、しつけなどの社会的・文化的な内容のものに至るまで、非常に多岐に渡っている。例えば、排泄の世話に関していえば、子どもが多くなれば多くなるほど、母親の負担の大きいものとなるが、四六時中その世話に追われなくてはならないような性質のものではない。食事の世話、衣類の交換などに関しても同じことがいえる。生活習慣の教育、しつけなどに関しては、毎日必ずしなくてはならないといった性質のものではない。また、いちいち細かいことまで説明しなくとも、子どもは見よう見まねで自然に学習していく面もある。

これらの内容と質的に大きく異なるのは、子ども同士の関係に対する介入の問題である。特に、年少の子どもが小さいあいだは、母親の注意やおもちゃなどの資源をめぐって、子どもたちは競合的な関わりを頻繁に示す。ある母親の弁によれば、一日中といってもよいほど頻繁に、子どもたちはおもちゃの取り合いをする。

子どもたちが示すこのような競合的な関わりを母親がいかにして処理しているのかという問題を考えたとき、本研究が取り上げた調整行動の重要性が明確になる。母親は、もちろん、すべての競合的な関わりに介入したわけではなかったが、

ある一定のレベルを超えた激しい行動（例えば、叩く、蹴るなどの攻撃行動）が生じたときには、一方の子どもの行動や内的状態を他方に説明してやったり、一時的に両者の注意を分散させたりすることによって、彼らの関係を修復していた。また、母親は競合的關係を解消するだけでなく、親和的な関わりを促すことによって、彼らの関係をできるかぎり親和的なものへと導く傾向があった。

特筆すべきは、このような調整行動の効果が、子どもが小さい場合ほど大きいものであったということである。子育てに伴う負担が、子どもが小さいときほど大きいのはいうまでもない。調整行動は、母親の負担が最も大きいこの時期に一番効果的な役割を果たしていたのである。

ヒトの場合、子どもの成長は顕著に遅く、子育てに要する期間も他の霊長類とは比較にならないほど長い。それでも、比較的短い間隔で複数の子どもを産み育てられるのは、一方の子どもの内的状態を他方に伝えたり、あるいは両者の注意を別々のものに分散させたりといった、独特の關係調整能力を有しているからなのかもしれない。

きょうだい関係の発達に関する新たな疑問

1) 幼児期後半のきょうだい関係に母親はどうか関係しているか

Younger が少なくとも 3 歳になる頃までに関しては、母親の調整行動が子どものきょうだい関係にかなり大きな影響を及ぼしていることが、本研究の結果から明らかになった。

では、この時期以降のきょうだい関係には、どのような変数の効果が見られるのだろうか。この疑問を解明するうえで、Brody et al. (1987, 1992) の研究結果は興味深い。

彼らは、Younger が 4~7 歳の年齢段階にあるきょうだいを対象とした観察研究を行った。その結果、きょうだい関係に最も影響を与えていたのは、母親の Older, Younger それぞれに対する関わりかけの配分であった。具体的には、Younger に対する働きかけが相対的に多ければ多いほど、子どものきょうだい関係は競合的であったという結果である。本研究の結果と Brody らの研究結果を総合すると、以下ようになる。Younger が誕生して約 3 年は、子どものきょうだい関係は、調整者としての母親の器量に大きく左右される。しかしながら、それ以降少なくとも Younger が 7 歳になる頃までは、母親の働きかけの配分に強く影響される。

しかしながら、きょうだい関係が、Younger の誕生から、あるいはそれ以前からのさまざまな周囲の環境との相互作用の中で、歴史的に積み重ねられてきたものであることはいうまでもない。本研究の結果を踏まえるなら、Brody らの被験者の年齢段階に到達する以前に、母親からどのような調整行動を受けてきたかという問題を、十分検討しておく必要があるのではないだろうか。

きょうだい関係と母親の行動との関連をより広い視野で捉えるには、5年あるいは10年といったかなり長期的なスパンで追跡していく必要があるといえる。

2) きょうだい関係に父親の影響は見られるか

本研究では、子どものきょうだい関係に母親がどう関与しているかという問題を詳しく分析してきた。その理由は、子どもと最も長い時間をいっしょに過ごすのが母親であると考えられたからである。しかしながら、最近の研究では、子育てに対する母親の役割と父親の役割とは、質的に異なるという指摘がある（例えば、正高, 1995）。したがって、子どものきょうだい関係に及ぼす父親の影響については、今後十分に検討する必要があるだろう。母親の行動だけでなく、父親の行動にも焦点を当てることによって、子どものきょうだい関係の発達について新たな知見が得られるであろう。

おわりに

—きょうだい関係に関する最新の研究—

日本においては、きょうだい関係に関する研究は数えるほどしかない（依田, 1965; 小嶋・山田・村上・河合, 1982）。しかしながら、アメリカを中心として、海外では、この領域の研究を専門的に行っているグループがいくつもある。しかも、最近の研究から、きょうだい関係が子どものその他の諸領域の発達に多大な影響を及ぼしていることが明らかになってきた。

例えば、きょうだい関係は視点取得能力（perspective-taking ability）の発達に影響を及ぼすことが知られている（Vandell & Wilson, 1987; Howe & Ross, 1990; Howe, 1991）。また、Dunn & Kendrick（1982）やDunn & Munn（1985, 1986a, b）は、きょうだい間の相互作用が他者の感情を理解する能力の発達に効果的であることを示唆している。Dunn et al.（1991）やYoungblade & Dunn（1995）は、きょうだいのいる家庭では、きょうだいのいない家庭に比べて、内的状態に関する会話が頻繁に見られ、このような経験が子どもの視点取得能力や他者感情理解の発達に影響を及ぼすとしている。きょうだい間の相互作用における特徴が幼稚園での仲間関係におおいに影響するという指摘もある（Baskett & Johnson, 1982; Berndt & Bulleit, 1985; Mendelson, Aboud, & Lanthier 1994）。

最近の研究では、きょうだいのいる子どもは「心の理論（theory of mind）」の発達が早いことが明らかにされている（Perner, Ruffman, & Leekam, 1994; Jenkins & Astington, 1996）。

また、East & Rook（1992）やStormshak, Bellanti, Bierman, & the Conduct

Problems Prevention Research Group (1996) は、ハイリスク児を被験者に取り上げ、きょうだい間の競合的なやりとりが子どもの社会適応に効果的な役割を果たしていることを明らかにしている。これまでは、競合的な関わりに対する否定的な見解が大半を占めていたが、必ずしもそうとはいえないのである。

以上、海外での最新の研究の一端を紹介したが、依然として不明な点が多い。本研究は、乳幼児期のきょうだい関係を行動学的に解明しようとしたおそらく日本で最初の研究であろう。本研究を機に、日本においてもきょうだい関係に関する研究が活発に行われることを期待し、筆を置く。

要 約

本研究の背景

子育ては、食事の世話、衣類の交換、排泄の処理などの基本的な内容のものから、生活習慣の教育、しつけなどの社会的・文化的な内容のものに至るまでの養育行動一般を指す。

子どもが複数になったとき、つまり子どもにきょうだいがあったとき、主たる養育者である母親は、これらの育児行動に加えて、子ども同士の関係をうまく調整していくという仕事を引き受けなくてはならない。

とりわけ、子どもがまだ小さいあいだは、母親の世話やおもちゃなどの資源をめぐる、子どもたちの関わりは度々競合的になる。母親は、このような関わりを解消するだけでなく、彼らの親和的な関わりを促進するように、働きかけなくてはならないのである。

本研究の目的は、乳児期及び幼児期のきょうだいと母親を対象とした行動観察を実施することにより、母親が子どものきょうだい関係をいかにして調整しているかを発達的な観点から明らかにすることであった。

乳児期のきょうだい関係に対する縦断的研究

—母親の関わりかけにおける特徴及び調整行動の機能—

目的

本研究の目的は、第二子を出産した直後の母親が、子どもたちの関係をいかに調整しているかを明らかにすることであった。母親の行動については、2つの側面が検証された。第一の側面は、母親が自分自身の判断で、子どもたちに対する働きかけをどう配分しているかという問題であった。第二の側面は、子ども同士の相互作用に対して、どのような行動を示すかという問題であった。

方法

被験者：第二子を出産した直後の家庭4組が被験者であった。第一子（以下「Older」と表記する）、第二子（以下「Younger」と表記する）はいずれも男児であった。

観察期間：第二子の誕生から約1年半（最も短い被験者で12ヵ月、最も長い被験者で17.5ヵ月）にわたって、原則的に1ヵ月～2ヵ月の間隔で観察が行われた。

観察手続き：母親、Older、Youngerによる三者遊び場面の観察が行われた。被験者4組に対する総観察時間は946分であった。

結果と考察

1. 母親による働きかけの配分と働きかけの特徴

Youngerが誕生して約半年間は、母親はOlderと頻繁に、かつ長い時間言語的交渉を持った。しかしながら、Youngerとの関係も非言語的な内容で補うという特徴が見られた。Youngerの活動性が高まる生後半年以降には、このような傾向は消失し、母親は、Older、Youngerのそれぞれと、比較的短い時間間隔で交互

に言語的交渉を持つようになった。

母親は、Younger の成長に応じて、自分自身の判断で、両者に対する働きかけをバランスよく配分するように努めていた。

2. 子ども同士の相互作用に対する調整行動

Older が Younger に対して何らかの行動を示したとき、その直前や直後に、母親がどのような行動を示したかが分析された（この行動を本研究では「調整行動」と定義した）。Older の行動は、おもちゃを取る・叩く・蹴るなどの否定的行動、おもちゃを渡す・なでるなどの親和的行動、Younger の行動や内的状態に関心を示す行動、の3種類に分類された。

Older の否定的行動の直後に示された母親の調整行動のなかで、最も特徴的であったのは、Younger の行動や内的状態を Older に説明するという行動（「泣いてるじゃないの」、「そんなことしたら痛いでしょ」などの発話）であった。このような調整行動が Older の否定的行動の直後によく用いられた理由は、Older が Younger の内的状態を推測することによって、今後自発的に否定的行動を抑制できるようになってほしいと、母親が期待しているからではないかと推測された。

Older が親和的行動を示した直前や直後、あるいは Younger の行動や内的状態に関心を示した直前や直後にも、母親は、Younger の行動や内的状態を Older に説明するという調整行動を頻繁に示した。とりわけ、Older が親和的行動を示した直後に行われた調整行動には、以下のような効果があると推測された。

親和的行動の直後に、繰り返し、Younger の内的状態を説明する（「喜んでるよ」、「笑ってるよ」などの発話）ことによって、Older は、自分が示した親和

的行動が Younger に喜びの感情をもたらしたということを早期に学習し、自分の判断で Younger に親和的行動をよく示すようになるであろうと考えられた。

母親は、Younger の行動や内的状態を伝える媒介者として、Older に接することによって、きょうだい間の否定的な関わりを終結させ、親和的な関わりを促進させようとしていた。そのうえ、この調整行動は、長い目で見ても、子ども同士の親和的関係の促進に効果的である可能性が示唆された。

幼児期のきょうだい関係に関する横断的研究

—調整者としての母親の役割を中心に—

目的

本研究の目的は、幼児期のきょうだい関係に対して母親がどう関与しているかを明らかにすることであった。母親の行動については、子ども同士の相互作用を調整する行動、及び子どもに接するときの行動特性、の2種類が取り上げられた。子どもの年齢段階に応じて、これらの行動と子ども同士の相互作用との関連がどう変化するかが分析された。

方法

被験者：幼児期のきょうだいとその母親 40 組。Younger の平均年齢は 2.48 歳、Older の平均年齢は 5.43 歳、きょうだい間の年齢差の平均は 2.95 歳であった。

手続き：母親、Older、Younger による三者遊び場面の観察と質問紙調査が行われた。質問紙は 2 種類で、日頃のきょうだい関係に関するもの (SRQ) と子どもの気質に関するもの (EAS) であった。

観察の結果得られた子ども同士の相互作用の特徴と SRQ の結果との間には対

応があった。したがって、三者遊び場面での子どもの行動は、日頃のきょうだい関係を反映したものであると考えられた。

結果と考察

1. 子どものきょうだい関係に及ぼす母親の行動の影響

きょうだい関係との関連が強かったのは、母親の調整行動であった。調整行動には、子ども同士を引き合わせる内容の行動と、逆に引き離す内容の行動の相反する2つの特徴が検出された。

両者を引き合わせる行動は、きょうだい間の親和的な関係を促すのに効果的であったが、否定的な関わりとも関連が見られた。また、両者を引き離す行動は、きょうだい間の否定的な関わりと強い関連が見られた。母親は、両者を引き合わせる行動と両者を引き離す行動を場面に応じて使い分けることによって、彼らの関係を調整していることが明らかになった。

2. 発達的な観点から見た調整行動の機能

被験者全体の中で、最も年齢の低いグループ（Youngerが1歳）については、子どものきょうだい関係と母親の調整行動との関連は強く、上述したような特徴が認められた。しかしながら、年齢が高いグループになるにつれ、きょうだい関係と調整行動との関連は希薄になり、Youngerが3歳あるいは4歳のグループでは、これらの関連性は全くなくなってしまった。

幼児期のきょうだい関係は、調整者として母親がどのような行動を示すかによって大きく変動しうる可能性があった。しかも、このような影響は、子どもの年齢段階が低いほど大きかった。

結論

ヒトの特徴として、子どもの成長が遅いということと、にもかかわらず、比較的短い間隔で子どもを設けることができることの2点が挙げられる。主たる養育者である母親にとって、このことは、複数の未成熟な子どもの世話を同時にしなくてはならないということの意味する。そのうえ、子どもたちは年齢が低いときほど競合的に振る舞うので、繰り返し母親はその仲裁に入ってやらねばならない。

このような意味で、本研究の結果は非常に興味深いものであった。つまり、母親は、一方の子どもの行動や内的状態を他方に伝えたり、両者の注意を分散したりしながら、彼らの関係を調整し、しかも、この効果は子どもの年齢段階が低い場合ほど大きかった。

二者間の関係を第三者が調整するという能力は、明らかにヒトに固有なものである。母親は、このような独特な関係調整能力を発揮することによって、子育ての負担から解放されているといえる。

謝 辞

本論文を執筆するにあたって、大変多くの方々のお世話になりました。大阪大学人間科学部の糸魚川直祐教授、南徹弘教授、中道正之助教授には、論文の構想段階から暖かい御指導を賜りました。心より感謝申し上げます。特に、南徹弘先生には、論文の内容や執筆の進行具合を常に気にかけていただいたばかりか、お忙しい中、筆者の拙い文章を丁寧に読んで下さり、時には厳しく、時には暖かく、励ましていただきました。本当にありがとうございました。

大阪大学人間科学部の金沢忠博助手、今川真治助手には、論文全体の流れから細かいデータの読み込みに至るまで、いろいろと御忠告賜りました。ありがとうございました。また、大芝宣昭技官をはじめ、大阪大学人間科学部比較行動論研究室の方々には、いつも暖かく筆者の論文執筆を励ましていただきました。心より御礼申し上げます。

本研究を遂行するにあたって、被験者をはじめ、多くの方々から御協力を賜りました。特に、被験者を何人も紹介して下さった親戚や知人あるいは友人にはいくら御礼を言っても足りないほどです。ここで、一人一人の名前を挙げるわけにはいきませんが、これらの多くの方々の御世話がなければ、本研究は到底なし得ませんでした。記して感謝申し上げます。

本研究の計画段階では、果たして本当に、子どもたちの様子を、しかも家庭内で、ビデオ撮影することに賛同していただけるかと不安でしたが、このように多くの被験者の御協力を得ることができました。被験者の方々には心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、データ収集中のみならず、論文執筆中もいつも筆者の健康を心配し、陰ながら応援してくれた両親に心より感謝申し上げます。

1996年12月 小島康生

引用文献

- Abamovitch, R., Corter, C., & Lando, B. (1979). Sibling interaction in the home. *Child Development, 50*, 997-1003.
- Abramovitch, R., Corter, C., & Pepler, D. J. (1980). Observations of mixed-sex sibling dyads. *Child Development, 51*, 1268-1271.
- Abramovitch, R., Pepler, D., & Corter, C. (1982). Patterns of sibling interaction among pre-schoolage children. In M. E. Lamb, & B. Sutton-Smith (Eds.), *Sibling relationships: Their nature and significance across the life span* (pp. 61-86). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Altmann, J. (1974). Observational study of behavior: Sampling methods. *Behaviour, 49*, 227-265.
- Baskett, L. M., & Johnson, S. M. (1982). The young child's interactions with parents versus siblings: A behavioral analysis. *Child Development, 53*, 643-650.
- Berndt, T. J., & Bulleit, T. N. (1985). Effects of sibling relationships on preschoolers' behavior at home and at school. *Developmental Psychology, 21*, 761-767.
- Bigner, J. J. (1974). Second born's discrimination of sibling role concept. *Developmental Psychology, 10*, 564-573.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & Burke, M. (1987). Child temperaments, maternal differential behavior, and sibling relationships. *Developmental Psychology, 23*, 354-362.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & MacKinnon, C. E. (1982). Role asymmetries in interactions among school-aged children, their younger siblings, and their friends. *Child Development, 53*, 1364-1370.

- Brody, G. H., Stoneman, Z., McCoy, J. K., & Forehand, R. (1992). Associations of maternal and paternal direct and differential behavior with sibling relationships: Contemporaneous and longitudinal analyses. *Child Development, 63*, 82-92.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., MacKinnon, C. E., & MacKinnon, R. (1985). Role relationships and behavior between preschool-aged and school-aged sibling pairs. *Developmental Psychology, 21*, 124-129.
- Buss, A. H., & Plomin, R. (1984). *Temperament and early developing personality traits*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cicirelli, V. G. (1972). The effect of sibling relationship on concept learning of young children taught by child-teachers. *Child Development, 43*, 282-287.
- Cicirelli, V. G. (1976). Mother-child and sibling-sibling interactions on a problem-solving task. *Child Development, 47*, 588-596.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of others' emotions. *Developmental Psychology, 27*, 448-455.
- Dunn, J., & Kendrick, C. (1979). Interaction between young siblings in the contexts of family relationships. In M. Lewis, & L. A. Rosenblum (Eds.), *The child in its family*. New York: Plenum Press.
- Dunn, J., & Kendrick, C. (1982). *Siblings: Love, envy, and understanding*. Cambridge, M. A.: Harvard University Press.
- Dunn, J., Kendrick, C., & MacNamee, R. (1981). The reaction of first-born children to the birth of a sibling: Mother's reports. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 22*, 1-18.

- Dunn, J., & Munn, P. (1985). Becoming a family member: Family conflict and the development of social understanding in the second year. *Child Development, 56*, 480-492.
- Dunn, J., & Munn, P. (1986a). Sibling quarrels and maternal intervention: Individual differences in understanding and aggression. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 27*, 583-595.
- Dunn, J., & Munn, P. (1986b). Sibling and the development of prosocial behaviour. *International Journal of Behavioral Development, 9*, 265-284.
- Dunn, J., Slomkowski, C., Donelan, N., & Herrera, C. (1995). Conflict, understanding, and relationships: Developments and differences in the preschool years. *Early Education and Development, 6*, 303-316.
- East, P. L., & Rook, K. S. (1992). Compensatory patterns of support among children's peer relationships: A test using school friends, non-school friends, and siblings. *Developmental Psychology, 28*, 163-172.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1985). Children's perception of the qualities of sibling relationships. *Child Development, 56*, 448-461.
- Hoffman, M. L. (1981). The development of empathy. In L. P. Rushton, & R. M. Sorrentino (Eds.), *Altruism and helping behavior: Social, Personality, and developmental perspectives*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Howe, N. (1991). Sibling-directed internal state language, perspective taking, and affective behavior. *Child Development, 62*, 1503-1512.
- Howe, N., & Ross, H. S. (1990). Socialization, perspective-taking, and the sibling relationship. *Developmental Psychology, 26*, 160-165.

- Iskandar, N., Laursen, B., Finkelstein, B., & Fredrickson, L. (1995). Conflict resolution among preschool children: The appeal of negotiation in hypothetical disputes. *Early Education and Development, 6*, 359-376.
- Jenkins, J. M., & Astington, J. W. (1996). Cognitive factors and family structure associated with theory of mind development in young children. *Developmental Psychology, 32*, 70-78.
- 小嶋 秀夫・山田 洋子・村上 京子・河合 優年 (1982). 乳幼児の「きょうだいー母関係」に対する認知と行動 (1)(2)(3) 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 288-293.
- Lamb, M. E. (1978a). Interactions between eighteen-month-olds and their preschool-aged siblings. *Child Development, 49*, 51-59.
- Lamb, M. E. (1978b). The development of sibling relationships in infancy: A short-term longitudinal study. *Child Development, 49*, 1189-1196.
- Martin, J. L., & Ross, H. S. (1995). The development of aggression within sibling conflict. *Early Education and Development, 6*, 335-358.
- 正高 信男 (1995). ヒトはなぜ子育てに悩むのか 講談社現代新書
- Mendelson, M. J., Aboud, F. E., & Lanthier, R. P. (1994). Kindergartners' relationships with siblings, peers, and friends. *Merrill-Palmer Quarterly, 40*, 416-435.
- Minnett, A. M., Vandell, D. L., & Santrock, J. W. (1983). The effects of sibling status on sibling interaction: Influence of birth order, age spacing, sex of child, and sex of sibling. *Child Development, 54*, 1064-1072.
- Munn, P., & Dunn, J. (1989). Temperament and the developing relationship between siblings. *International Journal of Behavioral Development, 12*, 433-451.

Napier, J. R., & Napier, P. H. (1967). *A handbook of living primates* (p. 456), London: Academic Press.

根ヶ山 光一 (1989). 子育ての論理 糸魚川 直祐・日高 敏隆 (編) 応用心理学講座 11 ヒューマン・エソロジー (pp. 59-75) 福村出版

根ヶ山 光一 (1995). 子育てと子別れ 根ヶ山 光一・鈴木 晶夫 (編著) 子別れの心理学 —新しい親子関係像の提唱— 第1章 (pp. 12-30) 福村出版

Nishida, T. (1990). *The Chimpanzees of the Mahale Mountains: Sexual and life history strategies*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Pepler, D. J., Abramovitch, R., Corter, C. (1981). Sibling interaction in the home: A longitudinal study. *Child Development, 52*, 1344-1347.

Perner, J., Ruffman, T., & Leekam, S. R. (1994). Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development, 65*, 1228-1238.

総務庁青少年対策本部 (1996). 子供と家族に関する国際比較調査報告書 (p.14) 大蔵省印刷局

Ross, H. S. (1996). Negotiating principles of entitlement in sibling property disputes. *Developmental Psychology, 32*, 90-101.

Stewart, R. B., & Marvin, R. S. (1984). Sibling relations: The role of conceptual perspective-taking in the ontogeny of sibling caregiving. *Child Development, 55*, 1322-1332.

Stewart, R. B., Mobley, L. A., Van Tuyl, S. S., & Salvador, M. A. (1987). The firstborn's adjustment to the birth of a sibling: A longitudinal Assessment, *Child Development, 58*, 341-355.

- Stocker, C., Dunn, J., Plomin, R. (1989). Sibling relationships: Links with child temperament, maternal behavior, and family structure. *Child Development, 60*, 715-727.
- Stoneman, Z., Brody, G. H., & Burke, M., (1989). Sibling temperaments and maternal and paternal perceptions of marital, family, and personal functioning. *Journal of Marriage and the Family, 51*, 99-113.
- Stoneman, G. H., & Brody, G. H. (1993). Sibling temperaments, conflict, warmth, and role asymmetry. *Child Development, 64*, 1786-1800.
- Stoneman, Z., Brody, G. H., & MacKinnon, C. E. (1986). Same-sex and cross-sex siblings: Activity choices, roles, behavior, and gender stereotypes. *Sex Roles, 15*, 495-511.
- Stormshak, E. A., Bellanti, C. J., Bierman, K. L., & the Conduct Problems Prevention Research Group. (1996). The quality of sibling relationships and the development of social competence and behavioral control in aggressive children. *Developmental Psychology, 32*, 79-89.
- 高畑 由起夫 (1994). 性の人類学 —サルとヒトの接点を求めて— (pp. 102-103) 世界思想社.
- Vandell, D. L., & Wilson, K. S. (1987). Infants' interactions with mother, sibling, and peer: Contrasts and relations between interaction systems. *Child Development, 58*, 176-186.
- Wellman, H. M. (1988). First steps in the child's theorizing about the mind. In J. W. Astington, P. L. Harris, & D. R. Olson (Eds.), *Developing theories of mind* (pp. 64-92). Cambridge: Cambridge University Press.
- 依田 明 (1965). きょうだいの性構成ときょうだい関係 日本教育心理学会 第7回総会発表論文集, 262-263.

Youngblade, L. M., & Dunn, J. (1995). Individual differences in young children's pretend play with mother and sibling: Links to relationships and understanding of other people's feelings and beliefs. *Child Development, 66*, 1472-1492.

付表1 SRQの質問項目

きょうだい関係に関する調査

上のお子さんのお名前 () 誕生日 / /
下のお子さんのお名前 () 誕生日 / /

この質問紙は、きょうだい日常どんな風に振る舞っているかを調べるためのものです。それぞれの質問に対してどれがもっとも適当かをv印でお答えください。

1. 互いにとっても親切にしあうきょうだいもありますし、少ししか親切にしあわないきょうだいもあります。お子さんたちは、互いにどの程度親切にしあいますか？
ほとんどしない あまりしない 少しする
よくする とてもよくする
2. 上のお子さんと下のお子さんとは、普通どちらの方がお母さんによく扱われていますか？
ほとんどいつも下のお子さんの方がよく扱われている
上のお子さんよりも下のお子さんの方がよく扱われている
上のお子さんも下のお子さんも同じくらいよく扱われている
下のお子さんよりも上のお子さんの方がよく扱われている
ほとんどいつも上のお子さんの方がよく扱われている
3. 下のお子さんに何かわからないことがあれば、上のお子さんはどの程度そのやり方を教えてあげますか？
ほとんど教えない あまり教えない 少し教える
よくお教える とてもよく教える
4. 逆に、上のお子さんに何かわからないことがあれば、下のお子さんはどの程度そのやり方を教えてあげますか？
ほとんど教えない あまり教えない 少し教える
よくお教える とてもよく教える
5. 上のお子さんは下のお子さんに対して、どの程度「～しなさい、～しろ」と言いますか？
ほとんど言わない あまり言わない 少し言う
よく言う とてもよく言う
6. 下のお子さんは上のお子さんに対して、どの程度「～しなさい、～しろ」と言いますか？
ほとんど言わない あまり言わない 少し言う
よく言う とてもよく言う

7. 上のお子さんと下のお子さんとは、普通どちらの方がお父さんによく扱われていますか？

- ほとんどいつも下のお子さんの方がよく扱われている
- 上のお子さんよりも下のお子さんの方がよく扱われている
- 上のお子さんも下のお子さんも同じくらいよく扱われている
- 下のお子さんよりも上のお子さんの方がよく扱われている
- ほとんどいつも上のお子さんの方がよく扱われている

8. お互いによく面倒をみあうきょうだいもいますし、少ししか面倒をみあわないきょうだいもいます。お子さんたちは、お互いにどの程度面倒をみあっていますか？

- ほとんど面倒をみあっていない
- あまり面倒をみあっていない
- 少し面倒をみあっている よく面倒をみあっている
- とてもよく面倒をみあっている

9. お子さんたちは、一緒にどこかへ行ったり、何かしたりすることがどの程度ありますか？

- ほとんどない あまりない 少しある
- よくある とてもよくある

10. お子さんたちは、お互いの名前をからかって呼んだりすることがどの程度ありますか？

- ほとんどない あまりない 少しある
- よくある とてもよくある

11. お子さんたちは、どの程度同じことが好きですか？

- ほとんどない あまりない 少しある
- よくある とてもよくある

12. お子さんたちは、お互いにどの程度なんでも話しあっていますか？

- ほとんど話していない あまり話していない
- 少し話している
- よく話している とてもよく話している

13. よくけんかをしてたたきあったりするきょうだいもいますし、少ししかしないきょうだいもいます。お子さんたちは、どの程度けんかしてたたきあったりしますか？

- ほとんどしない あまりしない 少しする
- よくする とてもよくする

14. 上のお子さんはどの程度下のお子さんのことをほめますか？

- ほとんどほめない あまりほめない 少しほめる
- よくほめる とてもよくほめる

15. 下のお子さんはどの程度上のお子さんのことをほめますか？
ほとんどほめない あまりほめない 少しほめる
よくほめる とてもよくほめる
16. お子さんたちは、どの程度言い争ったりけんかしたりしますか？
ほとんどしない あまりしない 少しする
よくする とてもよくする
17. お互いによく協力しあうきょうだいもいますし、少ししか協力しあわないきょうだいもいます。お子さんたちは、どの程度協力しあいますか？
ほとんど協力しあわない あまり協力しあわない
少し協力しあう よく協力しあう
とてもよく協力しあう
18. 上のお子さんと下のお子さんとは、どちらの方がお母さんに世話をしてもらいますか？
ほとんどいつも下のお子さんの方が世話してもらう
上のお子さんよりも下のお子さんの方がよく世話してもらう
上のお子さんも下のお子さんも同じくらい世話してもらう
下のお子さんよりも上のお子さんの方がよく世話してもらう
ほとんどいつも上のお子さんの方がよく世話してもらう
19. 下のお子さんが一人でできないことがあれば、上のお子さんはどの程度下のお子さんの手助けをしますか？
ほとんどいつも手助けしない あまり手助けしない
少し手助けする よく手助けする
とてもよく手助けする
20. 上のお子さんが一人でできないことがあれば、下のお子さんはどの程度上のお子さんの手助けをしますか？
ほとんどいつも手助けしない あまり手助けしない
少し手助けする よく手助けする
とてもよく手助けする
21. 上のお子さんはどの程度下のお子さんに物事をさせますか？
ほとんどいつもさせない あまりさせない 少しさせる
よくさせる とてもよくさせる
22. 下のお子さんはどの程度上のお子さんに物事をさせますか？
ほとんどいつもさせない あまりさせない 少しさせる
よくさせる とてもよくさせる

23. 上のお子さんと下のお子さんとは、どちらの方がお父さんに世話をしてもらいますか？
- ほとんどいつも下のお子さんの方が世話してもらう
 - 上のお子さんよりも下のお子さんの方がよく世話してもらう
 - 上のお子さんも下のお子さんも同じくらい世話してもらう
 - 下のお子さんよりも上のお子さんの方がよく世話してもらう
 - ほとんどいつも上のお子さんの方がよく世話してもらう
24. お子さんたちは、どの程度お互いを好きですか？
- ほとんど好きではない あまり好きではない
 - 少し好きだ 好きだ とても好きだ
25. よく一緒に遊ぶきょうだいもいますし、少ししか一緒に遊ばないきょうだいもいます。お子さんたちは、どの程度一緒に遊びますか？
- ほとんど遊ばない あまり遊ばない 少し遊ぶ
 - よく遊ぶ とてもよく遊ぶ
26. お子さんたちは、お互いに対してどの程度意地悪をしますか？
- ほとんどしない あまりしない 少しする
 - よくする とてもよくする
27. お子さんたちは、どの程度同じものを持っていますか？
- ほとんど持っていない あまり持っていない
 - 少し持っている よく持っている
 - とてもよく持っている
28. お子さんたちだけが知っている秘密や内緒事はどの程度ありますか？
- ほとんどない あまりない 少しある よくある
 - とてもよくある
29. お子さんたちは、どの程度争いますか？
- ほとんど争わない あまり争わない
 - 少し争う よく争う とてもよく争う
30. 上のお子さんは下のお子さんのことをどの程度誇りに思っていますか？
- 思っていない あまり思っていない 少し思っている
 - 思っている とても思っている
31. 下のお子さんは上のお子さんのことをどの程度誇りに思っていますか？
- 思っていない あまり思っていない 少し思っている
 - 思っている とても思っている

- 3 2. お子さんたちは、お互いに怒りあったり、言いあいをしたりすることがどの程度ありますか？
（）ほとんどない （）あまりない （）すこしある
（）よくある （）とてもよくある
- 3 3. お子さんたちは、どの程度ものを共有していますか？
（）ほとんど共有していない （）あまり共有していない
（）少し共有している （）よく共有している
（）とてもよく共有している
- 3 4. お母さんは、普通上のお子さんと下のお子さんとどちらの方をひいきしますか？
（）下のお子さんの方をほとんどいつもひいきする
（）上のお子さんよりも下のお子さんの方をひいきする
（）上のお子さんも下のお子さんもどちらもひいきしていない
（）下のお子さんよりも上のお子さんの方をひいきする
（）上のお子さんの方をほとんどいつもひいきする
- 3 5. 上のお子さんは、下のお子さんが知らないことを教えてあげますか？
（）ほとんど教えてあげない （）あまり教えてあげない
（）少し教えてあげる （）よく教えてあげる
（）とてもよく教えてあげる
- 3 6. 下のお子さんは、上のお子さんが知らないことを教えてあげますか？
（）ほとんど教えてあげない （）あまり教えてあげない
（）少し教えてあげる （）よく教えてあげる
（）とてもよく教えてあげる
- 3 7. 上のお子さんは、どの程度下のお子さんに命令をしますか？
（）ほとんどしない （）あまりしない （）少しする
（）よくする （）とてもよくする
- 3 8. 下のお子さんは、どの程度上のお子さんに命令をしますか？
（）ほとんどしない （）あまりしない （）少しする
（）よくする （）とてもよくする
- 3 9. お父さんは、普通上のお子さんと下のお子さんとどちらをひいきしますか？
（）下のお子さんの方をほとんどいつもひいきする
（）上のお子さんよりも下のお子さんの方をひいきする
（）上のお子さんも下のお子さんもどちらもひいきしていない
（）下のお子さんよりも上のお子さんの方をひいきする
（）上のお子さんの方をほとんどいつもひいきする

40. お子さんたちの中には、どの程度強い愛情がありますか？
ほとんどない あまりない 少しある ある
とてもある
41. 多くの時間をきょうだいと一緒に過ごす子供もいますし、あまりきょうだいと一緒に過ごさない子供もいます。お子さんたちは、どの程度一緒に自由な時間を過ごしますか？
ほとんど一緒に過ごさない
あまり一緒に過ごさない
少し一緒に過ごす よく一緒に過ごす
とてもよく一緒に過ごす
42. お子さんたちは、意地悪で互いにじゃまをしあったり、いじめたりすることがどの程度ありますか？
ほとんどない あまりない 少しある
よくある とてもよくある
43. お子さんたちは、どの程度似ていますか？
ほとんど似ていない あまり似ていない 少し似ている
よく似ている とてもよく似ている
44. お子さんたちは、他の人には知られたくないことを、お互いにどの程度話しますか？
ほとんど話さない あまり話さない 少し話す
よく話す とてもよく話す
45. お子さんたちは、自分の方が相手よりも上手に物事をしようとする（例えば上のお子さんなら、弟や妹よりも上手に何かをしようとする）ことが、どの程度ありますか？
ほとんどない あまりない 少しある
よくある とてもよくある
46. 上のお子さんは下のお子さんのことをどの程度大事に思っていますか？
ほとんど思っていない あまり思っていない
少し思っている 思っている とても思っている
47. 下のお子さんは上のお子さんのことをどの程度大事に思っていますか？
ほとんど思っていない あまり思っていない
少し思っている 思っている とても思っている
48. お子さんたちは、どの程度言い争いをしますか？
ほとんどしない あまりしない 少しする
よくする とてもよくする

付表2 EASの質問項目

子どもの気質調査

おかあさんのお名前 () 年齢 才

最終学歴 【中学 高校 専門学校 短大 大学 その他 ()】

仕事の有無 【無 有】 職種 ()

おとうさんのお名前 () 年齢 才

最終学歴 【中学 高校 専門学校 短大 大学 その他 ()】

職種 ()

上のお子さんのお名前 () 誕生日 / /

下のお子さんのお名前 () 誕生日 / /

質問紙に記入なさる前によくお読みください

この質問紙には、子どもの行動傾向が述べてあります。それぞれの項目に書かれている行動が、上のお子さんにあてはまるかどうかを5段階で評定してください。1から5の数字は、以下の内容を表しています。

- 1 全くあてはまらない
- 2 どちらかといえばあてはまらない
- 3 どちらともいえない
- 4 どちらかといえばあてはまる
- 5 よくあてはまる

(1) 恥ずかしがりやな方だ。

1 2 3 4 5

(2) 泣き虫だ。

1 2 3 4 5

(3) 大勢でいるのが好きだ。

1 2 3 4 5

(4) いつも動き回っている。

1 2 3 4 5

(5) 一人でいるよりも誰かと遊んでいる方が好きだ。

1 2 3 4 5

(6) 感情的な方だ。

1 2 3 4 5

- (7)動きまわっているとき、動作がのろい。
1 2 3 4 5
- (8)誰とでもすぐ友達になる。
1 2 3 4 5
- (9)朝起きるとすぐに走り回る。
1 2 3 4 5
- (10)他のことをしているよりも人と関わることを好む。
1 2 3 4 5
- (11)ぐずったり泣いたりすることが多い。
1 2 3 4 5
- (12)たいへん社交的だ。
1 2 3 4 5
- (13)たいへんエネルギッシュだ。
1 2 3 4 5
- (14)知らない人と仲良くなるには時間がかかる。
1 2 3 4 5
- (15)すぐにかんしゃくを起こす。
1 2 3 4 5
- (16)どちらかといえば一人にいる方が好きだ。
1 2 3 4 5
- (17)活発な遊びよりも、静かな遊びや活発でない遊びを好きだ。
1 2 3 4 5
- (18)一人でいると寂しがる。
1 2 3 4 5
- (19)かんしゃくを起こすと激しい。
1 2 3 4 5
- (20)初めて会う人とすぐに親しくなる。
1 2 3 4 5

注：この質問紙は、Older, Youngerのそれぞれについて記入してもらった。